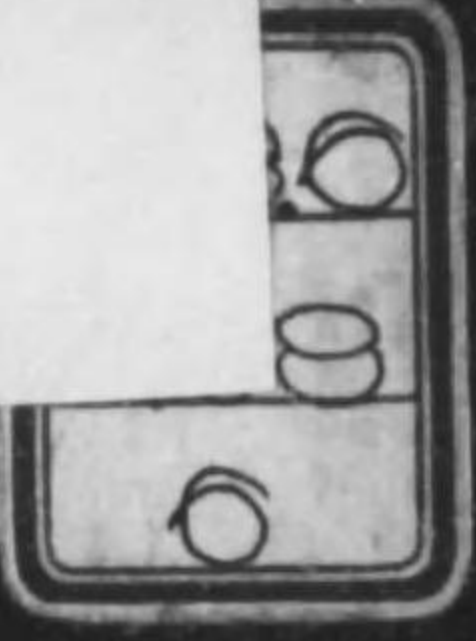


918.6-N58-67



1200500759346



始



918.6
N58
6



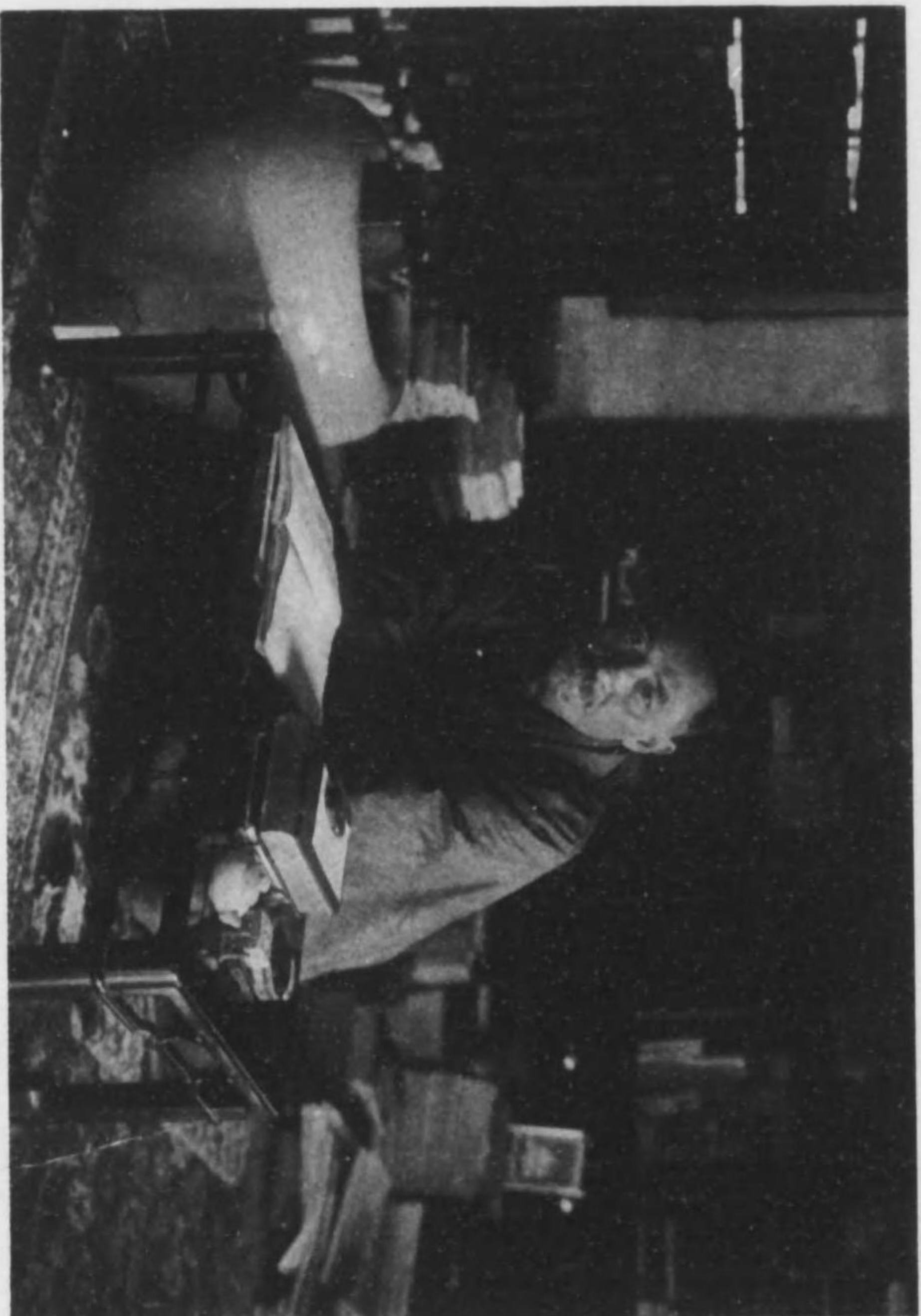
論
雜篇



秋景山水

大正十一年三月三日
于京都
秋景山水
画





（齋書町南田留早於）影撮月二十年三正大

987
53

目次

評論

作物の批評	一
寫生文	二三
文藝の哲學的基礎	三三
創作家の態度	一〇八
田山花袋君に答ふ	二〇六
コンラッドの描きたる自然に就て	二〇九
明治座の所感を虚子君に問れて	二二二
虚子君へ	二二七

太陽雜誌募集名家投票に就て

「額の男」を読む

「夢の如し」を読む

日英博覽會の美術品

東洋美術圖譜

客觀描寫と印象描寫

草平氏の論文に就て

長塚節氏の小説「土」

文藝とヒロイック

艇長の遺書と中佐の詩

鑑賞の統一と獨立

イズムの功過

好惡と優劣

二二三

二二三

二三九

二四三

二四七

二五一

二五五

二五八

二六一

二六五

二六九

二七三

二七六

博士問題とマードック先生と余

マードック先生の日本歴史

博士問題の成行

文藝委員は何をするか

田中王堂氏の「書齋より街頭へ」

坪内博士とハムレット

學者と名譽

道樂と職業

現代日本の開化

中味と形式

文藝と道德

文展と藝術

素人と黒人

二八二

二九一

二九七

三〇一

三一

三一五

三二一

三二五

三五二

三八一

四〇五

四三一

四六六

私の個人主義
津田青楓君の畫
點頭錄

四七七

五一四

五一八

雜 篇

入社の辭

五四三

『虞美人草』豫告

五四七

『三四郎』豫告

五四八

『それから』豫告

五四九

元日

五五〇

霞寶會設立主旨

五五三

稟告

五五四

〔子規書幅添書〕

五五五

余と萬年筆
明治天皇奉悼之辭
行人續稿に就て
『心』廣告文

五五六

五六一

五六二

五六三

序 文

小羊物語に題す十句 —— 小松武治譯『沙翁物語集』序 ——

五六七

浦瀨 白雨譯『ウォルヅヲオスの詩』序

五七二

『吾輩は猫である』上篇自序

五七四

『漾虛集』自序

五七六

『吾輩は猫である』中篇自序

五七七

『鶉籠』自序

五八二

鈴木三 重吉作『千代紙』序

五八四

平井著『野葡萄』序	五八五
『吾輩は猫である』下篇自序	五八七
藪野著『東京見物』序	五八九
本間久『名著新譯』序	五九一
四郎譯	
森田草平川下江村『草雲雀』序	五九四
生田長江共著	
生田著『文學入門』序	五九七
長江著	
高濱著『鶏頭』序	六〇一
虛子著	
松根東『新春夏秋冬』春之部序	六一三
洋城選	
沼波 <small>瓊音</small> 共編『古今名流俳句談』序	六一四
天生目杜南	
松根東『新春夏秋冬』夏之部序	六一五
洋城選	
松根東『新春夏秋冬』秋之部序	六一七
洋城選	
樋口著『俳諧新研究』序	六一八
銅牛著	
森田著『煤煙』第一卷序	六二〇
草平著	

中村畫『不折俳畫』上序	六二四
不折畫	
自然を離れんとする藝術——『新日本畫譜』の序——	六二七
池邊君の史論に就て——『明治維新三大政治家』再版序——	六三三
『土』に就て——長塚節著『土』序——	六四〇
秋元編『三愚集』序	六四八
梧樓編	
高原著『極北日本』序	六四九
蟹堂著	
『社會と自分』自序	六五二
ふぢ『相模の埃』紹介	六五四
子作	
野上八『傳説の時代』序	六五五
重子譯	
想田編『高岳』題言	六六〇
秋曉編	
米窪太『海のロマンス』序	六六一
刀雄著	
保坂著『吾輩の見たる亞米利加』下篇序	六六四
歸一著	
岡本著並畫『探訪畫趣』序	六六六

『心』自序

六七〇

木村恒譯『南國へ』再版序

六七二

木下登太郎著『唐草表紙』序

六七四

『硝子戸の中』自序

六八一

植松安譯『文藝批評論』序

六八二

縮刷に際して——縮刷『社會と自分』自序——

六八五

『金剛草』自序

六八六

題丙辰潑墨——不折山人著『丙辰潑墨』第一集序——

六八九

解 說

六九一

評 論

然るに各課擔任の教師は其學問の専門家であるが爲め、専門以外の部門に無識にして無頓着なるが爲め、自己研究の題目と他人教授の課業との權衡を見るの明なきが爲め、往々わが範圍以外に飛び超えて、わが學問の有効を、他の領域内に侵入して迄も主張しやうとする事がある。たとへば英語の教師が英語に熱心なるの餘り學生を鞭撻して、地理數學の研修に利用すべき當然の時間を割いて迄も難句集を暗誦させる様なものである。たゞに夫のみではない、わが專攻する課目の外、わが擔任する授業の外には天下又一の力を用ゐるに足るものなきを吹聴し來るのである。



中學には作物の課目があり、高等學校には高等學校の課目があつて、之を修了せねば卒業の資格はないとてある。その課目の數やその按排の順は皆文部省が制定するのだから各擔任の教師は其課目をもつた學問を其時間の範圍内に於て出來得る限りの力を盡すべきが至當と云はねばならぬ。

吹聴し來る丈ならまだいゝ。果はあらゆる他の課目を罵倒し去るのである。

かゝる行動に出づる人の中で、相當の論據があつて公然文部省所定の課目に服せぬものは、こゝに引き合に出ず限りではない。それ程の見識のある人ならば結構である。四角に仕切つた芝居小屋の拵見た様な時間割のなかに立て籠つて、土籠の如く働いてゐる教師より遙かに結構である。然し英語文の本城に生涯の尻を落ちつけるのみならず、櫓から首を出して天下の形勢を視察する程の能力さへなきものが、徒らに自尊の念と固陋の見を綱り合せたる如き没分曉の鞭を振つて學生を精根のつゞく限りたゞいたなら、見じめなのは學生である。熱心は敬服すべきである。精神は嘉すべきである。其善意的なるも亦多とすべきである。あるにも拘らず學生は迷惑である。當該課目に於ける智識が缺乏する爲めではない、當該課目以外の智識が全然缺乏してゐるからである。たゞ缺乏してゐるからではない。其結果として入らぬ所迄のさばり出て、要もない課目を打ちのめさねば已まぬ底の勇氣があるから迷惑なのである。

是等の人は自己の主張を守るの點に於て志士である。主張を貫かんとするの點に於て勇士である。主張の長所を認むるの點に於て智者である。他意なく人の爲めに盡さんとするの點に於て善人である。只自他の關係を知らず、眼を全局に注ぐ能はざるが爲め、わが繩張りを設けて、いゝ加減な所に幅を利かして満足すべき所を、足に任せて天下を横行して、憚からぬのが災になる。

人が咎めれば云ふ。おれの地面と君の地面との境はどこだ。境は自分がきめぬ丈で、人の方ではとうから定めてゐる。再び咎めれば云ふ。此通り足が達者でどこへでも歩いて行かれるぢやないか。足の達者なのは御意の通りである。足に任せて人の畠を荒らされては困ると云ふのである。かの志士と云ひ、勇士と云ひ、智者と云ひ、善人と云はれたるものも是に於てか忽ちに浪人となり、暴士となり、盲者となり、悪人となる。

今の評家のあるものは、ある點に於て此教師に似て居ると思ふ。尤も尊敬すべき言語を以て評家を翻譯すれば教師である。尤も謙遜したる意義に於て作家を解釋すれば生徒である。生徒の點數は教師によつて定まる。生徒の父兄朋友と雖も此權利を奈何ともする事は出來ん。學業の成績は一に教師の判断に任せて、不平をさしはさまざるのみならず、却つて之によつて彼等の優劣を定めんとしつゝある。一般の世間が評家に望む所は正に是に外ならぬ。

たゞ學校の教師には専門がある。擔任がある。評家はこゝ迄發達して居らぬ。たまには詩のみ評するもの、劇のみ品するものもあるが、然しそれすら寥々たるものである。のみならず是等の分類は形式に屬する分類であるから、専門として獨立する價值があるかないか既に疑問である。して見ると、つまりは純文學の批評家は純文學の方面に關するあらゆる創作を檢閲して採點しつゝある事になる。前例を布衍して云ふと地理、數學、物理、歴史、語學の試験を只一人で擔任す

ると同様な結果になる。

純文學と云へば甚だ單簡である。然し其内容を論ずれば千差萬別である。實は文學の標榜する所は何と何で其表現し得る題目は如何なる範圍に跨がつて、其人を動かす點は幾ヶ條あつて、是等が未來の開化に觸るゝときどこ迄押擴げ得るものであるか、未だ何人も組織的に研究したものが居らるのである。また頗る出來にくいのである。

かう云ふては分らんかも知らぬ。例を擧げて二三を語ればすぐに合點が行く。古い話であるが昔しの人には劇の三統一と云ふ事を必要條件の様に説いた。所が沙翁の劇は是を破つてゐる。しかも立派に出來てゐる。して見ると統一が劇の必要であると云ふ趣味から沙翁の作物を見れば失望するにきまつてゐる。或は駄作になるかも知れぬ。然し是が爲めに統一論の價値がなくなつたのではない。其價値がモチフハイされたのであると思ふ。だから此條件を充たした劇を見れば矢張りそれなりに面白い。其代り沙翁の劇を賞翫する態度でかゝつてはならぬ。讀者の方で融通を利かして、其作物と同じ平面に立つ丈の餘裕がなくてはならぬ。外に一例をあげる。又沙翁を引合に出すが、あの男のかいたものは頗る亂暴な所がある。劇の一段がたつた五六行で、始まるかと思ふとすぐ仕舞はねばならぬと思ふのに、作者は大膽にも平氣でいくらでも、こんな連鎖を設けてゐる。無論マクベスの發端の様に行數は短かくても、興味の上に於て全篇を貫く重みのあるも

のは論外であるが、平々凡々たる而も十行内外の一段を設けるのは、話しの續きをあらはす爲め已を得ず挿入したのだと見え透く様に思はれる。換言すれば彼の戯曲のあるものは齣幕の組織に於て明かに比例を失してゐる。だから比例丈を眼中に置いてマーチャント、オブ、エニスを讀むものは必ず失敗の作だと云ふだらう。マーチャント、オブ、エニスは此點から讀むべきものでないと云ふ事がわかる。又沙翁を引き合に出す。オセロは四大悲劇の一である。然し讀んで決して好い感じの起るものではない。不愉快である。(今は其理由を説明する餘地がないから略す)もし感じ一方を以てあの作に對すれば全然愚作である。幸にしてオセロは事件の綜合と人格の發展が非常にうまく配合されて自然と悲劇に運び去る手際がある。讀者は夫を見ればいゝ。日本の芝居の仕組は支離滅裂である。馬鹿々々しい。結構とか性格とか云ふ點からあれを見たならば抱腹するのが多いだらう。然し幕に變化がある。出來事が走馬燈の如く人を驚かして續々出る。こゝ丈を面白がつて、その外を忘れて居れば矢張り幾分の興味がある。一九は御覽の通りの作者である。一九を讀んで崇高の感がないと云ふのは非難しやうもない。崇高の感がないから排斥すべしと云ふのは、文學と崇高の感と内容に於て全部一致した曉でなければ云へぬ事である。一九に點を興へるときには滑稽が下卑であるから五十とか、諧謔が自然だから九十とかきめなければならぬ。メリメのカルメンはカルメンと云ふ女性を描いて躍然たらしめてゐる。あれを讀んで人生間

題の根元に觸れてゐないから駄作だと云ふのは數學の先生が英語の答案を見て方程式にあてはまらないから落第だと云ふ様なものである。デ、フォーは一種の寫實家である。ロビンソンクルーソーを讀んでデニソンのイノツク、アーデンの様に詩趣がないと云ふ。こゝ迄は成程と降參せねばならぬ。然し夫だからロビンソンクルーソーは作物にならないと云ふのは歌麿の風俗畫には美人があるが、ギド、レニのマグダレンは女になつて居らんと主張する様なものである。——例を挙げれば際限がないから已める。

作家が評家に呈出する答案は斯の如く多種多面である。評家は中學の教師の如く部門をわけて採點するか又は一人で物理、數學、地理、歴史の智識を兼ねなければならぬ。今の評家は後者である。苟も評家であつて、専門の分岐せぬ今の世に立つからには、多様の作家が呈出する答案を檢閲するときの方つて、色々に立場を易へて、作家の精神を汲まねばならぬ。融通のきかぬ一本調子の趣味に固執して、その趣味以外の作物を一氣に抹殺せんとするのは、英語の教師が物理、化學、歴史を受け持ちながら、凡ての答案を英語の尺度で採點して仕舞ふと一般である。其尺度に合せざる作家は悉く落第の悲運に際會せざるを得ない。世間は學校の採點を信する如く、評家を信するの極途に其落第を當然と認定するに至るだらう。

是に於て評家の責任が起る。評家は先づ世間と作家とに向つて文學は如何なる者ぞと云ふ解決

を與へねばならぬ。文學上の述作を批判するに方つて（詩は詩、劇は劇、小説は小説、凡てに共有なる點は共有なる點として）批判すべき條項を明かに備へねばならぬ。恰も中學及び高等學校の規定が何と何と、これ／＼とを修め得ざるものは學生にあらずと宣告するが如くせねばならぬ。此條項を備へたる評家は此條項中のあるものに就て百より〇に至る迄の點數を作家に附與せねばならぬ。此條項のうちわが趣味の缺乏して自己に答案を檢査するの資格なしと思惟するときは作家と世間とに遠慮して點數を付與する事を差し控へねばならぬ。評家は自己の得意なる趣味に於て専門教師と同等の權力を有するを得べきも、其繩張以外の諸點に於ては知らぬ、わからぬと云ひ切るか、又は何事をも云はぬが禮であり、徳義である。

是等の條項を机の上に貼り附けるのは、學校の教師が、學校の課目全體を承知の上で、自己の受持に當る様なもので、自他の關係を明かにして、文學の全體を一目に見渡すと同時に、自己の立脚地を知るの便宜になる。今の評家は此便宜を認めてゐない。認めても作つてゐない。只手當り次第にやる。述作に對すると思ひ付いた事をいゝ加減に述べる。だから評し盡したのだから、まだ残つて居るのか當人にも判然しない。西洋も日本も同じ事である。

是等の條項を遺憾なく捕へる爲めには過去の文學を材料とせねばならぬ。過去の批評を一括して其變遷を知らねばならぬ。従つて上下數千年に涉つて抽象的の工夫を費やさねばならぬ。右か

ら見てゐる人と左から眺めてゐる人との關係を同じ平面にあつめて比較せねばならぬ。昔し人の述作した精神と、今の人の支配を受くる潮流とを地圖の様に指し示さねばならぬ。要するに一人の事業ではない。一日の事業でもない。

此條項を備へたる人にして始めて、此條項中に差等をつける事を考へてもよいと思ふ。人力も人を載せる。電車も人を載せる。兩者を知つたものが始めて兩者の利害長短を比較するの權利を享ける。中學の課目は數に於て極まつてゐる。時間の多少は一樣ではない。必要の度の高い英語の如きは比較的多くの時間を占領してゐる。批評の條項に就いても諸人の合意で此等の高下を定める事が出来るかも知れぬ。(出來ぬかも知れぬ) 崇高感を第一位に置くもよい。純美感を第一にするもよい。或は人間の機微に觸れた内部の消息を傳へた作品を第一位に据ゑてもよい。或は平々淡々のうちに人を引き着ける垢抜けのした著述を推すもよい。猛烈なものでも、沈靜なものでも、形式の整つたものでも、放縱にしてまたらぬうちに面白味のあるものでも、精緻を極めたものでも、一氣に呵成したものでも、神祕的なものでも、寫實的なものでも、臚のなかに影を認める様な模糊たるものでも、青天白日の下に掌をさすが如き明瞭なものでもいゝ。相當の理由があつて第一位に置かんとならば、相當の理由があつて等差を附するならば差支ない。但し出来るか出來ぬかは疑問である。

是等の條項に差等をつけると同時に是等の條項中のあるものは性質に於て併立して存在すべきも、甲乙と從屬せしむべきものでないと云ふ事に氣が付くかも知れぬ。然も其併立せるものが一見反對の趣味で相容れぬと云ふ事實も認め得るかも知れぬ——批評家は反對の趣味も同時に胸裏に蓄へる必要がある。

物理學者が物質を材料とする如く、動物學者が動物を材料とする如く、批評家も亦過去の文學を材料として以上の條項と此條項に從て起る趣味の法則を得ねばならぬ。去れども此條項と此法則とは過去の材料より得たる事實を忘れてはならぬ。從つて古に拘泥してあらゆる未來の作物に是等を應用して得たりと思ふは誤りである。死したる自然は古今來を通じて同一である。活動せる人間精神の發現は版行で押した様には行かぬ。過去の文學は未來の文學を生む。生まれたものは同じ譯には行かぬ。同じ譯に行かぬものを、同じ法則で品隣せんとするのは舟を刻んで劍を求むるの類である。過去を綜合して得たる法則は批評家の參考で、批評家の尺度ではない。尺度は伸縮自在にして常に彼の胸中に存在せねばならぬ。批評の法則が立つと文學が衰へるとはこの爲めである。法則がわるいのではない。法則を利用する評家が變通の理を解せんのである。

作家は造物主である。造物主である以上は評家の豫期するものばかりは拵らへぬ。突然として破天荒の作物を天降らせて評家の腦を奪ふ事がある。中學の課目は文部省できめてある。課目以

外の答案を出して採點を求める生徒は一人もない。従つて教師は融通が利かなくてもよい。造物主は白い鳥を一夜に作るかも知れぬ。動物學者は白い鳥を見た以上は鳥は黒いものなりとの定義を變ずる必要を認めねばならぬ如く、批評家も亦古來の法則に遵はざる、又過去の作中より擧げ盡したる評價的條項以外の條項を有する文辭に接せぬとは限らぬ。之に接したるとき、白い鳥を鳥と認むる程の、見識と勇氣と説明がなくてはならぬ。之が出来る爲めには以上の條項と法則を知らねばならぬ。知つて融通の才を利かさねばならぬ。拘泥すれば夫迄である。

現代評家の弊は此條項と此法則を知らざるにある。ある人は煩悶を描かねば文學でないと云ふ。あるものは他にいか程の採るべき點があつても、事件に少しでも不自然があれば文學でないと云ふ。あるものは人間交渉の際卒然として起る際とき眞味がなければ文學でないと云ふ。あるものは平淡なる寫生文に事件の發展がないのを見て文學でないといふ。而して評家が從來の讀書及び先輩の薰陶、若くは自己の狹隘なる經驗より出でたる一縷の細長き趣味中に含まるゝものゝみを見て眞の文學だ、眞の文學だと云ふ。余は之を不快に思ふ。

余は評家ではない。前段に述べたる資格を有する評家では無論ない。従つて評家としての余の位地を高めんが爲めに此篇を草したのではない。時間の許す限り世の評家と共に過去を研究して、出來得る限り此根據地を作りたいと思ふ。思ふに付いては自分一人でやるより廣く天下の人と共に

にやる方がわが文界の慶事であるから云ふのである。今の評家は斯程の事を知らぬ譯ではあるまいから、御互にかう云ふ了見で過去を研究して、御互に得た結果を交換して自然と吾邦將來の批評の土臺を築いたらよからうと相談をするのである。實は西洋でも左程進歩して居らんと思ふ。余は今日迄に多少の創作をした。此創作が世間に解せられずして不平だから此言をなすのではないのは無論である。余の作物は余の豫期以上に歡迎されて居る。たとひある人々から種々の注文が出て、其注文者の立場は余によくわかつて居る。従つて是等の人に對して不平は猶更ない。だから余の云ふ事は自己の作物の爲めでない事は明かである。余は只吾邦未來の文運の爲めに云ふのである。

寫生文

寫生文の存在は近頃漸く世間から認められた様であるが、寫生文の特色に就てはまだ誰も明瞭に説破したものが居らん。元來存在を認めらるゝと云ふ事は既に認められる文の特色を有して居ると云ふ意味に過ぎんのだから、存在を認められる以上は特色も認められた譯に相違ない。然し認めらるゝと云ふのは説明されるとは一樣でない。櫻と海棠の感じに相違のあるのは何人も認めて居る。其相違を説明しろと云はれると一寸出来悪い。寫生文と普通の文章の差違は認められて居るにも拘はらず明かに道破されて居らんのも此理である。かの寫生文を標榜する人々と雖ども單にわが特色を冥々裡に識別すると云ふ迄で、明かに指摘したものは今日に至る迄見當らぬ様である。虚子、四方太の諸君は折々此點に向つて肯綮に中る議論をされる様であるが、余の見るところでは矢張り物足らぬ心地がする。余の云ふ事も諸君から見れば依然として物足らぬかも知れぬ。然し云はぬより参考になると思ふ。單に寫生文を生命とする諸君の参考になるのみならず、汎く

文章に興味を有する人々の耳には或は物珍らしく聞えるかも知れぬ。

寫生文と普通の文章との差違を算へ來ると色々ある。色々あるうちで余の尤も要點だと考へるにも關らず誰も説き及んだ事のないのは作者の心的状態である。他の點は此一源泉より流露するのであるから、此源頭に向つて工夫を下せば他は悉く刃を迎へて向ふから解決を促がす譯である。社會は人間の塊まりである。其人間を區別すれば色々出来る。貴と賤ともなる。賢と不肖ともなる。正と邪ともなる。男と女ともなる。貧と富ともなる。老と若、長と幼ともなる。其他色々に區別が出来る。區別が出来る以上は、區別された一のものか他を視る態度は、一のうちにある甲が、同じく一のうちにある乙を視る態度とは異ならなければならぬ。人生觀といふと堅苦しく聞える。何だか恐ろしくて近寄りにくい。然し煎じつめれば此態度である。隣りの法律家が余を視る立脚地は、余が隣りの法律家を視る立脚地とは自から違ふ。大袈裟な言葉で云ふと彼此の人生觀が、ある點に於て一樣でない。と云ふに過ぎん。

人事に關する文章は此視察の表現である。従つて人事に關する文章の差違は此視察の差違に歸着する。此視察の差違は視察の立場によつて岐れてくる。すると此立場が文章の差違を生ずる源になる。今の世に云ふ寫生文家といふものの文章は如何なる事をかいても皆共有の點を有して、他人のそれとは截然と區別の出来る様な特色を帯びてゐる。すると此等の團體は其特色の共有な

る點に於て、同じ立場に根據地を構へて居ると云ふてよろしい。もう一遍大袈裟な言葉を借用すると、同じ人生觀を有して同じ穴から隣りの御嬢さんや、向ふの御爺さんを覗いて居るに相違ない。此穴を紹介するのが余の責任である。否此穴から浮世を覗けばどんなに見えるかと云ふ事を説明するのが余の義務である。

寫生文家の人事に對する態度は貴人が賤者を視るの態度ではない。賢者が愚者を見るの態度でもない。君子が小人を視るの態度でもない。男が女を視、女が男を視るの態度でもない。つまり大人が小供を視るの態度である。兩親が兒童に對するの態度である。世人はさう思ふて居るまい。寫生文家自身もさう思ふて居るまい。しかし解剖すれば遂にこゝに歸着して仕舞ふ。

小供はよく泣くものである。小供の泣く度に泣く親は氣違である。親と小供とは立場が違ふ。同じ平面に立つて、同じ程度の感情に支配される以上は小供が泣く度に親も泣かねばならぬ。普通の小説家はこれである。彼等は隣り近所の人間を自己と同程度のものと見做して、擦つたもんだの社會に吾自身も擦つたり揉んだりして、飽く迄も、其社會の一員であると云ふ態度で筆を執る。従つて隣りの御嬢さんが泣く事をかく時は、當人自身も泣いて居る。自分が泣きながら、泣く人の事を敘述するのとわれは泣かすして、泣く人を覗いて居るのとは記敘の題目其物は同じでも其精神は大變違ふ。寫生文家は泣かすして他の泣くを敘するものである。

そんな不人情な立場に立つて人を動かす事が出来るかと聞くものがある。動かさんでもいゝのである。隣りの御嬢さんも泣き、寫す文章家も泣くから、讀者は泣かねばならん仕儀となる。泣かなければ失敗の作となる。然し筆者自身がぼろ／＼涙を落して書かぬ以上は御嬢さんが、どれ程泣かれても、讀者がどれ程泣かれなくても失敗にはならん。小供が駄菓子を買ひに出る。途中で犬に吠えられる。ワーと泣いて歸る。御嬢さんが一所になつてワーと泣かぬ以上は、傍人が泣かんでも出來損ひの御母さんとは云はれぬ。御母さんは駄菓子を犬に取られる度に泣き得る様な平面に立つて社會に生息して居られるものではない。寫生文家は思ふ。普通の小説家は泣かんでもの事を泣いてゐる。世の中に泣くべき事がどれ程あると思ふ。隣りのお嬢さんが泣くのを見るのは面白い。之を記述するのも面白い。然し同じ様に泣くのは御免蒙りたい。だからある男が泣く様を文章にかいた時にたとひ讀者が泣いてくれんでも失敗したとは思はない。無暗に泣かせる杯は幼稚だと思ふ。

夫では人間に同情がない作物を稱して寫生文家の文章といふ様に思はれる。然しさう思ふのは誤謬である。親は小兒に對して無慈悲ではない、冷刻でもない。無論同情がある。同情はあるけれども駄菓子を落した小供と共に大聲を揚げて泣く様な同情は持たぬのである。寫生文家の人間に對する同情は敘述されたる人間と共に頑是なく煩悶し、無體に號泣し、直角に跳躍し、一散に

狂奔する底の同情ではない。傍から見ても氣の毒の念に堪えぬ裏に微笑を包む同情である。冷刻ではない。世間と共にわめかない許である。

従つて寫生文家の描く所は多く深刻なものでない。否如何に深刻な事をかいても此態度で押しに行くから、一寸見ると底迄行かぬ様な心持ちがするのである。しかのみならず此態度で世間人情の交渉を視るから大抵の場合には滑稽の分子を含んだ表現となつて文章の上にはあらはれて來る。人によると寫生文家のかいたものを見て世を馬鹿にしてゐると云ふ。茶化してゐると云ふ。若し兩親の小供に對する態度が小供を馬鹿にして居る、茶化して居ると云ひ得べくんば寫生文家も亦此非難を免かれぬかも知れぬ。多少の道化たるうちに一點の温情を認め得ぬものは親の心を知らぬもので、又寫生文家を解し得ぬものであらう。

此故に寫生文家は地團太を踏む熱烈な調子を避ける。慙る狂的の人間を寫すのを避けるのではない。寫生文家自身迄が寫さるゝ狂的な人間と同一になるを避けるのである。避けるのではない。そこ迄引き込まるゝ事が可笑しくて出來悪いのである。

そこで寫生文家なるものは眞面目に人世を觀じて居らぬかの感が起る。成程さうかも知れぬ。然し一方から見れば作者自身が戀に全精神を奪はれ、金に全精神を捧げ、名に全精神を注いで、さうして戀と金と、名を求めつゝある人物を描くよりも比較的に眞面目かも知れぬ。描き出ださ

るべき一人に同情して理否も、前後も辨へぬ程の熱情を以て文をやる男よりも慥かな所があるかも知れぬ。

吾が精神を篇中の人物に一圖に打ち込んで、其人物になり済まして、戀を描き愛を描き、もしくは他の情緒を描くのは熱烈なものが出来るかも知れぬが、如何にも餘裕がない作が現れるに相違ない。寫生文家のかいたものには何となくゆとりがある。逼つて居らん。屈托氣が少ない。従つて讀んで暢び／＼した氣がする。全く寫生文家の態度が人事を寫し行く際に全精神を奪はれて仕舞はぬからである。

寫生文家は自己の精神の幾分を割いて人事を視る。餘す所は常に遊んでゐる。遊んでゐる所がある以上は、寫すわれと、寫さるゝ彼との間に一致する所と同時に離れて居る局部があると云ふ意味になる。全部がびたりと一致せぬ以上は寫さるゝ彼になり切つて、彼を寫す譯には行かぬ。依然として彼我の境を有して、我の見地から彼を描かなければならぬ。是に於いて寫生文家の描寫は多くの場合に於て客觀的である。大人は小兒を理解する。然し全然小兒に成り済ます譯には行かぬ。小兒の喜怒哀樂を寫す場合には勢客觀的でなければならぬ。こゝに客觀的と云ふは我を寫すにあらず彼を寫すといふ態度を意味するのである。此の氣合で押して行く以上は如何に複雑に進むとも如何に精緻に赴くとも又如何に解剖的に説き入るとも調子は依然として同じ事である。

余は最初より大人と小兒の譬喩たとへを用ひて寫生文家の立場を説明した。然し是は單に彼等の態度を尤もよく云ひあらはす爲めの言語である。決して彼等の人生觀の高下を示すものではない。大人だからえらい。えらい見方をして人事に對するのが寫生文家だと云ふ意義に解釋されては余の本旨に背く。えらい、えらくないは問題外である。只彼等の態度がかうだと云ふ迄に過ぎぬ。

此故に寫生文家は自己の心的行動を敘する際にも矢張り同一の筆法を用ゐる。彼等も喧嘩をするだらう。煩悶するだらう。泣くだらう。その平生を見れば毫も凡衆と異なる所なく振舞つてゐるかも知れぬ。然し一度び筆を執つて喧嘩する吾、煩悶する吾、泣く吾、を描く時は矢張り大人が小兒を視る如き立場から筆を下す。平生の小兒を、作家の大人が敘述する。寫生文家の筆に依怙の沙汰はない。紙を展べて思を構ふるときは自然とさう云ふ氣合になる。此氣合が彼等の人生觀である。少なくとも文章を作る上に於ての人生觀である。人生觀が自然と出來てゐるのだから、自己が意識せざるうちに筆は既に着々として其方向に進んで行く。

彼等は何事をも寫すを憚らぬ。只拘泥せざるを特色とする、人事百端、遭逢纏綿の限りなき波瀾は悉く喜怒哀樂の種で、其喜怒哀樂は必竟するに拘泥するに足らぬものであると云ふ様な筆致が彼等の人生に齎し來る福音である。彼等のかいたものには筋のないものが多い。進水式をかく。すると進水式の雜然たる光景を雜然と敘べて知らぬ顔をしてゐる。飛鳥山の花見をかく、踊

つたり、跳ねたり、酣醉狼藉の體を寫して頭も尾もつけぬ。夫で好い積りである。普通の小説の讀者から云へば物足らない。しまりが無い。漠然として捕捉すべき筋が貫いて居らん。然し彼等から云ふとかうである。筋とは何だ。世の中は筋のないものだ。筋のないもの、うちに筋を立てて見たつて始まらないぢやないか。どんな複雑な趣向で、どんな纏つた道行を作らうとも畢竟は、雜然たる進水式、紛然たる御花見と異なる所はないぢやないか。喜怒哀樂が材料となるにも關はらず拘泥するに足らぬ以上は小説の筋、芝居の筋の様なものも、亦拘泥するに足らん譯だ。筋がなければ文章にならんと云ふのは窮窟に世の中を見過ぎた話である。——今の寫生文家がこゝ迄極端な説を有して居るか居ないかは余と雖ども保證せぬ。然し事實上彼等はパノラマ的のものをかいて平氣でゐる所を以て見ると公然と無筋を標榜せぬ迄も冥々のうちにかう云ふ約束を遵奉してゐると見ても差支なからう。

寫生文家もかう極端になると全然小説家の主張と相容れなくなる。小説に於て筋は第一要件である。文章に苦心するよりも背景に苦心するよりも趣向に苦心するのが小説家の當然の義務である。従つて巧妙な趣向は傑作たる上に大なる影響を興ふるものと、誰も考へてゐる。所が寫生文家はそんな事を主眼としない。のみならず極端に行くと力めて筋を抜いて迄其態度を明かにしやうとする。

かくの如き態度は全く俳句から脱化して來たものである。泰西の潮流に漂ふて、横濱へ到着した輸入品ではない。淺薄なる余の知る限りに於ては西洋の傑作として世にうたはるゝものゝうちに此態度で文をやつたものは見當らぬ。(尤も寫生文家のかいたものにも是ぞといふ傑作はまだない様である) オーステンの作物、ガスケルの克蘭フォード或は有名なるヂツキンスのピクキツク又はフィールディングのトムジョーンズ及びセルヴンテスのドン、キホテの如きは多少此態度を得たる作品である。然し全く同じとは誰が眼にも受け取れぬ。

然し此態度が述作の上に於て唯一の態度と云ふのではない。又是が最上等と云ふのではない。只こんな態度もあると云ふ事を紹介したいと思ふのである。近頃寫生文の存在が漸く認められるにつけて、寫生文家の態度はかうであると、云ひ纏めるのは一般の人の参考になる事と思ふから此篇を草した迄である。

俳句は俳句、寫生文は寫生文で面白い。其態度も亦東洋的で頗る面白い。面白いには違ないが、二十世紀の今日こんな立場のみに籠城して得意になつて他を輕蔑するのは誤つてゐる。かゝる立場から出來上つた作物にはそれ相當の長所があると同時に短所も亦多く含まれてゐる。作家は身邊の狀況と天下の形勢に應じて時々其立場を變へねばならぬ。評家も亦眼界を廣くして必要の場合には作物に對する毎に其見地を改めねば活きた批評は出來まい。讀者は無論の事、色々な種類

のものを手に應じて賞翫する趣味を養成せねば損であらう。余は先に「作物の批評」と題する一篇を草して批評すべき條項の複雑なる由を説明した。此篇は寫生文を品評するに當つて其條項の一となるべき者を指摘してわが所論の應用を試みたものである。

—四〇・一・二〇『讀賣新聞』—

文藝の哲學的基礎

——明治四十年四月東京美術學校に於て述——

東京美術學校文學會の開會式に一場の講演を依頼された余は、朝日新聞社員として、同紙に自説を發表すべしと云ふ條件で引き受けた上、面倒ながら其速記を會長に依頼した。會長は快よく承諾されて、四五日の後丁寧なる口上を添へて、速記を余のもとに送付された。見ると腹案の不充分であつた爲めか、或は言ひ廻し方の不適當であつた爲めか、其儘では殆んど紙上に載せて讀者の一覽を煩はすに堪へぬ位混雜して居る。そこで已を得ず全部を書き改める事にして、速速記を前へ置いて遣り出して見ると、至る處に布衍の必要を生じて、遂には原稿の約二倍位長いものにして仕舞つた。

題目の性質としては一氣に讀み下さない、思索の縁を時々切斷せられて、理路の曲折、自然の興趣に伴はざるの憾はあるが、新聞の紙面には固より限りのある事だから、不都合を忍んで、是を一二欄宛日毎に分載する積である。

この事情のもとに成れる左の長篇は、講演として速記の體裁を具ふるにも關はらず、實は講演者たる余が特に余が社の爲めに新に起草したる論文と見て差支なからうと思ふ。是より朝日新聞社員として、筆を執つて讀者に見えんとする余が入社の辭に次いで、余の文藝に關する所信の概要を述べて、余の立脚地と抱負とを明かにするは、社員たる余の天下公衆に對する義務だらうと信ずる。

私はまだ演説といふことを餘り——餘りではない殆んど遣つた事のない男で、頼まれた事は今迄大分ありましたけれどもみんな斷つて仕舞ひました。どうも嫌なんですな。それに出来ないのです。其代り講義の方は此間迄毎日やつて來ましたから、恐らく上手だらうと思ふのですけれども生憎御頼みが演説でありますから定めて拙いだらうと存じます。

實は先達て大村さんが態々御出になつて何か演説を一つと云ふ御注文でありましたが、もともと拙いと知りながら御引受をするのも御氣の毒の至りと心得て先づは御辭退に及びました。所が中々御承知になりません。是非やれ、何でもいゝからやれ、どうかやれ、と頻りにやれ／＼と御勧めになります。それでもと云つて首を捻つて居ると、仕舞には演説はやらんでもいゝと申されます。演説をやらんで何を致しますかと伺ふと、只出席してみんなに顔さへ見せれば勘辨すると

云ふ恩命であります。そこで私も大決心を起して、その位の事なら恐るゝに及ばんと快く御受合を致しました。——今日はさう云ふ條件の下に此處に出現した譯であります。けれども不幸にして餘り御覽に入れる程な顔でもない。顔丈ではあまり輕少と思ひますから序に何か御話を致しませう。もとより演説と名のつく諸君、諸君はとも出来ませんから演説と云つても其實は講義になるでせう。講義になるとすると、私の講義は暗ではやらない、云ふ事は悉く文章にして、教場でそれをのべつに話す方針であります。所が今日は夫程の閑暇もなし、又考へも纏まつて居りません。だから上手であるべき講義も今日に限つて存外拙い譯であります。

美術學校で斯う云ふ文學的の會を設立して、諸君の専門技藝以外に、一般文學の知識と趣味を養成せられるのは大變に面白い事と思ひます。唯今正木校長の御話の様に文學と美術は大變關係の深いものでありますから、其一方を代表なさる諸君が文學の方面にも一種の興味を有たれて、われ／＼の様な不調法ものゝ講話を御参考に供して下さるのは、此兩者の接觸上から見て、諸君の前に卑見を開陳すべき第一の機會を捕へた私は多大の名譽と感ずる次第であります。出来ない演説を無理にやるのは全くこの爲で、遣り付けたいものを受け合つたからと云つて、決して恩に着せる譯ではありません。全く大なる光榮と心得て此處へ出て來たのである。が繰返して云ふ通り、演説は出來ず講義としては纏まらず、定めて聞苦しい事もあるだらうと思ひます。其邊はあらかじめ御容赦を願ひます。

先づ是からそろ／＼遣り始めます。遣り始めますよと斷ると何だかえらさうに聞えるが、其實は何でもない。こゝに三四頁許り書いたノートがあります。是から御話をすることは此三四頁の内容に過ぎないのでありますからすらく／＼と遣つて仕舞ふと十五分位ですぐ済んで仕舞ふ。いくら序にする演説でも夫では餘り情ない。から此三四頁を口から出まかせに敷衍して進行して行きます。敷衍しかたを豫め考へて居ないから、どこをどつちへ敷衍するか分らない。時によると飛んだ寄り道をして、出る所へも出られず、歸る所へも歸れないかも知れないと云ふ頗る心細い敷衍法を用ひます。のみならず冒頭が何だか譯の分らない事から始まるかも知れないから、決して驚いてはいけません。いづれ結末には美術とか文學とか御互に縁の深い方面へすり落ちて行く事と安心して聴いて戴きたい。——唯今正木會長の御演説中に市氣匠氣と云ふ語がありました、私の御話も出立地こそぼうつとして何となく稀有の思はあるが、落ち行く先はと云ふと、是でも會長と一所に市氣匠氣迄行く積りであります。

先づ——私は此所に立つて居ります。さうして貴所方は其所に坐つて居られる。私は低い所に立つて居る、あなた方は高い所に坐つて居られる、斯様に私が立つて居るといふ事と、あなた方が坐つて居らるゝと云ふ事が——事實であります。此事實と云ふのを他の言葉で現して見やうな

云ふ恩命であります。そこで私も大決心を起して、その位の事なら恐るゝに及ばんと快く御受合を致しました。——今日はさう云ふ條件の下に此處に出現した譯であります。けれども不幸にして餘り御覽に入れる程な顔でもない。顔丈ではあまり輕少と思ひますから序に何か御話を致しませう。もとより演説と名のつく諸君、諸君はとも出来ませんから演説と云つても其實は講義になるでせう。講義になるとすると、私の講義は暗ではやらない、云ふ事は悉く文章にして、教場でそれをのべつに話す方針であります。所が今日は夫程の閑暇もなし、又考へも纏まつて居りません。だから上手であるべき講義も今日に限つて存外拙い譯であります。

美術學校で斯う云ふ文學的の會を設立して、諸君の専門技藝以外に、一般文學の知識と趣味を養成せられるのは大變に面白い事と思ひます。唯今正木校長の御話の様に文學と美術は大變關係の深いものでありますから、其一方を代表なさる諸君が文學の方面にも一種の興味を有たれて、われ／＼の様な不調法ものゝ講話を御参考に供して下さるのは、此兩者の接觸上から見て、諸君の前に卑見を開陳すべき第一の機會を捕へた私は多大の名譽と感ずる次第であります。出来ない演説を無理にやるのは全くこの爲で、遣り付けたいものを受け合つたからと云つて、決して恩に着せる譯ではありません。全く大なる光榮と心得て此處へ出て來たのである。が繰返して云ふ通り、演説は出來ず講義としては纏まらず、定めて聞苦しい事もあるだらうと思ひます。其邊はあらかじめ御容赦を願ひます。

先づ是からそろ／＼遣り始めます。遣り始めますよと斷ると何だかえらさうに聞えるが、其實は何でもない。こゝに三四頁許り書いたノートがあります。是から御話をすることは此三四頁の内容に過ぎないのでありますからすらく／＼と遣つて仕舞ふと十五分位ですぐ済んで仕舞ふ。いくら序にする演説でも夫では餘り情ない。から此三四頁を口から出まかせに敷衍して進行して行きます。敷衍しかたを豫め考へて居ないから、どこをどつちへ敷衍するか分らない。時によると飛んだ寄り道をして、出る所へも出られず、歸る所へも歸れないかも知れないと云ふ頗る心細い敷衍法を用ひます。のみならず冒頭が何だか譯の分らない事から始まるかも知れないから、決して驚いてはいけません。いづれ結末には美術とか文學とか御互に縁の深い方面へすり落ちて行く事と安心して聴いて戴きたい。——唯今正木會長の御演説中に市氣匠氣と云ふ語がありました、私の御話も出立地こそぼうつとして何となく稀有の思はあるが、落ち行く先はと云ふと、是でも會長と一所に市氣匠氣迄行く積りであります。

先づ——私は此所に立つて居ります。さうして貴所方は其所に坐つて居られる。私は低い所に立つて居る、あなた方は高い所に坐つて居られる、斯様に私が立つて居るといふ事と、あなた方が坐つて居らるゝと云ふ事が——事實であります。此事實と云ふのを他の言葉で現して見やうな

らば、私は我と云ふもの、貴所方は私に對して私以外のものと云ふ意味であります。もつと六かしい表現法を用ひると物我對立と云ふ事實であります。即ち世界は我と物との相待の關係で成立して居ると云ふ事になる。あなた方も定めてさう思はれるであります。私もさう思うて居りませう。誰しも左様心得て居るのである。それから私が、かうやつて此處に立つて居り、あなた方が、さうして、其所に坐つて御座ると、其間に距離と云ふものがある。一間の距離とか、二間の距離とか或は十間二十間——此講堂の大きさはどの位ありますか——兎に角幾坪かの廣がりがあつて、其中に私が立つて居り、其中にあなた方が坐つて居ることになる。此廣がりや空間と申します。(申さなくつても御承知である) つまりはスペースと云ふものがあつて、萬物は其中に、各、ある席を占めて居る。次に今日の演説は一時から始まります。さうして何時終るか分りませんが、まあ何時か終るでせう。大概は日が暮れる前に終る事と思ひます。私がかうやつて好加減な事を喋舌つて、それが済むとあとから、上田さんが代つて又面白い講話がある。それから散會となる。私の講話も、上田さんの演説も皆經過する事件でありまして、此經過は時間と云ふものがなければ、どうしても起る譯に参りません。是も明瞭な事で別段改めて申上げる必要はない。最後に、なぜ私が此所にかうやつて出て来て、頻りに口を動かして居るか云へば、是は醉狂や物數奇で飛出して來たと思はれては少し迷惑であります。そこにはそれ相當な因縁、即ち先刻申上げた大村

君の鄭重なる御依頼とか、私の安受合とか、受合つたあとの義務心とか、色々の因縁が和合した其結果かくの如くフロツクコートを着て参りました。此關係を(人事、自然に通じて)因果の法則と稱へて居ります。

すると、かうですな。此世界には私と云ふものがありまして、貴所方と云ふものがありまして、さうして廣い空間の中に居りまして、此空間の中で御互に芝居をしまして、此芝居が時間の經過で推移して、此推移が因果の法則で纏められて居る。と云ふのでせう。そこで夫には先づ私と云ふものがあると見なければならぬ、貴所方があると見なければならぬ。空間といふものがあると見なければならぬ。時間と云ふものがあると見なければならぬ。又因果の法則と云ふものがあつて、吾人を支配して居ると見なければならぬ。是は誰も疑ふものはない。私もさう思ふ。

所が能く／＼考へて見ると、それが甚だ怪しい。餘程怪しい。通俗には誰もさう考へて居る。私も通俗にさう考へてゐる。然し退いて通俗に考へて見るとそれが頗る可笑しい。どうもさうでないらしい。何故かと云ふと元來此私と云ふ——かうしてフロツクコートを着て高襟をつけて、髭を生やして嚴然と存在して居るか如くに見える、此私の正體が甚だ怪しいものであります。フロツクも高襟も目に見える、手に觸れると云ふ迄で自分でないには極つてゐる。此手、此足、痒いときには掻き、痛いときには撫でる此身體が私かと云ふと、さうも行かない。痒い痛いと申

御座ると思つて御座る。私もまあ一寸さう思つて居ます。居ます事は、居ますが只かりにさう思つて差し上げる迄の事でありませぬ。と云ふものは、いくらそれ以上に思つて上げたたくても夫丈の證據がないのだから仕方がありません。普通に物の存在を確めるには先づ眼で見ますかね。眼で見ただで手で觸れて見る。手で觸れたあとで、嗅いで見る、或は舐めて見る。——貴所方の存在を確めるには夫程手数はかゝらぬかも知れぬが、けれども前にも申した通り眼で見やうが、耳できかうが、根本的に云へば、只視覚と聽覺を意識する迄で、此意識が變じて獨立した物とも、人ともなりやう譯がない。見るときに觸るゝときに、黒い制服を着た、金釧（きんけん）の學生の、姿を、私の意識中に現象としてあらはし來ると云ふ迄に過ぎないのであります。是を外にしてあなた方の存在と云ふ事實を認めることが出來やう筈がない。すると煎じ詰めた所が私もなければ、貴所方もない。あるものは、眞にあるものは、只意識ばかりである。金釧が眼に映する、金釧を意識する。講堂の天井が黒くなつて居る、其黒い所を意識する。——是は惡口ではありません。美術學校の天井が黒いと云ふのではない、只黒いと意識するので、客觀的存在は認めて居らん惡口だから構はないでせう。

まづ是丈の話であります。すると通俗の考へを離れて物我の世界を見た所では、物が自分から獨立して現存して居ると云ふ事も云へず、自分が物を離れて生存して居ると云ふ事も申されぬ。

す感じはある。撫でる搔くと云ふ心持ちはある。然し夫より以外に何にもない。あるものは手でもない足でもない。便宜の爲に手と名づけ足と名づける意識現象と、痛い痒いと云ふ意識現象であります。要するに意識はある。又意識すると云ふ働きはある。是丈は儘であります、是以上は證明する事は出來ないが、是丈は證明する必要もない位に柄乎として争ふ可からざる事實であります。して見ると普通に私と稱して居るのは客觀的に世の中に實在して居るものではなくして、只意識の連續して行くものに便宜上私と云ふ名を與へたのであります。何が故に平地に風波を起して、餘計な私と云ふものを建立するのが便宜かと申すと、「私」と、一たび建立すると其裏には、「貴所方」と、私以外のものも建立する譯になりますから、物我の區別が是で付きます。そこが入らざる葛藤で、又必要な便宜なのであります。

かう云ふと、私は自分（普通に云ふ自分）の存在を否定するのみならず、かねて貴所方の存在をも否定する譯になつて、斯様に大勢傍聴して居られるにも拘はらず、有れども無きが如くて甚だ御氣の毒の至りであります。御腹も御立ちになるでせうが、根本的の議論なのだから、先づ議論として御聽きを願ひたい。根本的に云ふと失禮な申條だが貴所方は私を離れて客觀的に存在しては居られません。——私を離れてと申したが、其私さへ所謂私としては存在しないのだから、況んや貴所方に於てをやであります。いくら怒られても駄目であります。貴所方はそこに御座る。

換言して見ると己を離れて物はない、又物を離れて己はない筈となりますから、所謂物我なるものは契合一致しなければならん譯になります。物我の二字を用ひるのは既に分り易い爲めにするのみで、根本義から云ふと、實は此兩面を區別し様がない、區別する事が出来ぬものに一致杯と云ふ言語も必要ではないのであります。だから只明かに存在して居るのは意識であります。さうして此意識の連続を稱して俗に命いのちと云ふのであります。

連続と云ふ字を使用する以上は意識が推移して行くと云ふ意味を含んで居つて、推移と云ふ意味がある以上は(一)意識に單位がなければならぬと云ふ事と(二)此單位が互に消長すると云ふ事と(三)は消長が分明である位に單位意識が明瞭でなければならぬと云ふ事と(四)意識の推移がある法則に支配せらるゝやと云ふ事になりますから、問題が餘程込入つて來ますが、今はそんな面倒な事を御話する場合でないから、諸君の御研究に一任する事として講話を進めます。尤も今申した四ヶ條のうち、意識推移の原則に就ては私の「文學論」の第五篇に不完全ながら自分の考へ丈は述べて置きましたから、御参考を願ひたいと思ひます。序に「文學論」も一部宛御求めを願ひたいと思ひます。——とに角意識がある。物もない、我もないかも知れないが意識丈は儘にある。さうして此意識が連続する。何故連続するかは哲學的に又は進化的に説明が付くにしても、付かぬにしても連続するのは儘であるから、之を事實として歩を進めて行く。

そこで一寸留まつて、此講話の冒頭を顧みると少々妙であります。最初には私と云ふものと申しました。貴所方も儘かに御出になると申しました。さうして、御互に空間と云ふ怪しいものゝ中に這入り込んで、時間と云ふ分らぬものゝ流れに掉さして、因果の法則と云ふ恐ろしいものに束縛せられて、ぐう／＼云つて居ると申しました。所が不通俗に考へた結果によると丸で反對になつて仕舞ひました。物我杯と云ふ關門は最初からない事になりました。天地即ち自己と云ふえらい事になりました。いつの間にかう約變したのか分らないが、全く矛盾して仕舞ひました。(空間、時間、因果律も矢張り此約變のうちに含んで居ます。それは講話の都合で後廻しにしましたから、今に段々わかります)

何故こんな矛盾が起つたのだらうか。能く考へると何にもないのに、通俗では森羅萬象色々なものが掃蕩しても掃蕩しきれぬ程雜然として宇宙に充物して居る。戸張君ではないが天地前にあり、竹風こゝにありと云ひたくなる位であります。——何故こんな矛盾が起つたのであらうか。これは頗る大問題である。面倒に六かしく論じて來たら大分暇が掛りませう。私は必要上、極粗末な所を、甚だ短い時間内に御話するのであるから、無論豪い哲學者などが聞いて居られたら、不完全だと云つて攻撃せられるだらうと思ひます。然し此短い時間内に、こんな大袈裟な問題を片づけるのだから、無論完全な事を云ふ筈がない、不完全は無論不完全だが、あの度胸が感心だ

と賞めて戴きたい。尤も時間は幾らでも與へるから、もつと立派に言へと注文されても私の手際では覺束ないかも知れない。まあ丁度宜いのです。

どうして、こんな矛盾が起るか云ふ問題に對して、只一口に説明して仕舞へば譯はない。前に申す通り吾々の生命は——吾々と云ふと自他を樹立する語弊はあるが暫らく便宜の爲めに使用します——吾々の生命は意識の連続であります。さうしてどう云ふものか此連続を切斷する事を欲しないのであります。他の言葉で云ふと死ぬ事を希望しないのであります。もう一つ他の言葉で云ふと此連続をつゞけて行く事が大好きなのであります。何故好むかとなると説明は出来ない。誰が出て來ても説明は出来ない。唯それが事實であると認めるより外に道はない。勿論進化論者に云はせると此願望も長い間に馴致發展し來つたのだと幾分か其發展の順序を示す事が出来るかも知れない。と云ふものはそんな傾向を有つて居らない様なもの、其の傾向に應じて世の中に處して來なかつたものは皆死んで仕舞つたので、今残つて居る奴は命の欲しい慾張り許りになつたのだと論ずる事も出来るからであります。御互の様に命に就ては極めて執着の多い、奇麗でない、思ひ切りのわるい連中が、かうしてびん／＼して居る様な譯かも知れません。是でも多少の説明にはなります。然しもつと進んで此傾向の大原因を極めやうとすると駄目であります。萬法一に歸す、一何れの所にか歸すと云ふ様な禪學の公案工夫に似たものを指定しなければならん様にな

ります。シヨペンハウワーと云ふ人は生欲の盲動的意志と云ふ語で此傾向をあらはして居ります。まことに重寶な文句であります。私も一寸拜借しやうと思ふのですが、前に述べた意識の連続以外にこんな變挺へんていなものを建立すると、意識の連続以外に何にもないと申した言質に對して申譯が立ちませんから、残念ながらやめに致して、此傾向は意識の内容を構成して居る一部分即ち屬性と見做して仕舞ひます。さうして「此傾向」と云ふ様な概念は抽象の結果、餘程發達した後には「此傾向」として放出したものと認めるのであります。それは、とも角も「吾人は意識の連続を求め」と云ふ事文を事實として受けとらねばならぬのであります。もつと明瞭に云ふと「意識には連續的傾向がある」と云ひ切つて之を事實として受けとるのであります。

意識と云ひ、連續と云ひ、連續的傾向と云ふと其うちに意識の分化と云ふ事と統一と云ふ事は自然と含まつて居ります。既に連續とある以上は甲と乙と連續したと云ふ事實を意識せねばならぬ、即ち甲と乙と差別がつく程に兩意識が明瞭でなければなりません。差別がつくと云ふのは、同時に同じ意識若くは類似の意識を統一し得ると云ふ意味と同じ事になります。例へて見れば視覚となづける意識は、分化の結果、觸覺や味覺と差別がつくと、同時にあらゆる視覺的意識を統一する事が出來て始めて出來る言語であります。意識に是文の分化作用が出來て、其分化した意識と、眼球めだまと云ふ器械を結びつけて、此種の意識は眼球が司どるのだと思ひつく。しばらく視覺

の意識と眼球の作用を混同して云ふと、昔し分化作用の行はれぬうちは視力は必ずしも眼球に集中して居らなかつたらう。私も遠い昔では、からだ全體で物を見てゐたかも知れぬ、或は脊中で物を舐めてゐたかも知れぬ。眼耳鼻舌と分業が行はれ出したのは、つい近頃の事であると思ひます。かう分業が行はれだすと融通が利かなくなり、一寸舌痛にかゝつたからと云ふて踵で飯を食ふ譯には行かず、不幸にして痲疾を患ひたからと申して臍で用を辨する事が出来なくなり、甚だ不都合であります。然し意識の連続と云ふ以上は、——連續の意義が明瞭になる以上は、——連續を形づくる意識の内容が明瞭でなければならぬ筈であります。明瞭でない意識は連續して居るか、連續してゐないか判然しない。つまり吾人の根本的傾向に反する。否意識そのもの、根本的傾向に反するのであります。意識の分化と統一とは此根本的傾向から自然と發展して参ります。向後どこ迄分化と統一が行はれるか殆んど想像がつかない。而して之に應ずる官能もどの位複雑になるか分りません。今日では目に見えぬもの、手に觸れる事の出来ぬもの、或は五感以上に超然たるものが次第に意識の舞臺に上る事であらうと思ひますから、先づ氣を長くして待つて居たら宜からうと思ひます。

もう一遍繰返して「意識の連続」と申します。此句を割つて見ると意識と云ふ字と連続と云ふ字になります。かうして意識の内容の如何と、此連続の順序の如何と二つに分れて問題は提起される譯であります。是を合すれば、如何なる内容の意識を如何なる順序に連続させるかの問題に歸着します。吾人が此問題に逢着したとき——吾人は必ず此問題に逢着するに相違ない。意識及其連續を事實と認める裏には既に此問題が含まれて居ります。さうして此問題の裏面には選擇と云ふ事が含まれて居ります。ある程度の自由がない以上は、又幾分か選擇の餘裕がないならば此問題の出やう筈がない。此問題が出るのは此問題が一通り以上に解決され得るからである。此解決の標準を理想といふのであります。之を纏めて一口に云ふと吾人は生きたいと云ふ傾向を有つてゐる。(意識には連續的傾向があると云ふ方が明確かも知れぬが) 此傾向からして選擇が出る。此選擇から理想が出る。すると今迄は只生きればいと云ふ傾向が發展して、ある特別の意義を有する命が欲しくなる。即ち如何なる順序に意識を連続させやうか、又如何なる意識の内容を選ばうか、理想は此二つになつて漸々と發展する。後に御話をする文學者の理想もこゝから出て参るのであります。

次に連続と云ふ字義をもう一遍吟味して見ますと、前にも申す通り、は、あ連続して居る哩と相互の區別が出来る位に、連続しつゝある意識は明瞭でなければならぬ筈であります。さうして、かやうに區別し得る程度に於て明瞭なる意識が、新陳代謝すると見ると、甲が去つて乙が來ると云ふ順序がなければならぬ筈であります。順序があるからには甲乙が共に意識せられるのではな

ひます。私の考へでは薔薇のなかに香水があると云つた方が適當と思ひます。尤も此時間及びびあ
とから御話をする空間と云ふのは大分六づかしい問題で、哲學者に云はせると大變八釜しいもの
でありますから、私の様な粗末な考へを好い加減に云ふ時は、あまり御信じにならん方がよいか
も知れませんが、——然しあまり信じなくつてもいけません。まづ演説の終る迄信じて居つて、
御宅へ御歸りになる頃に信じなくなるのが丁度いゝ加減であらうと思ひます。

次に今云ふ意識の連続——即ち甲が去つて乙がくるときに、かう云ふ場合がある。先づ甲を意
識して、それから乙を意識する。今度は其順を逆にして、乙を意識してから甲に移る。さうして
此兩つふたつのものを意識する時間を延しても縮めても、兩意識の關係が變らない。すると此關係は比
較的時間と獨立した關係であつて、しかもある一定の關係であると云ふ事がわかる。其時に吾人
は之を時間の關係に歸着せしむる事が出来ない事を悟つて、之に空間的關係の名を與へるのであ
ります。だからして是も兩意識の間に存する一種の關係であつて、意識其物を離れて空間なるも
のが存在して居る筈がない。空間自存の概念が起るのは矢張發達した抽象を認めて實在と見做し
た結果に外ならぬ。文法と云ふものは言葉の排列上に於ける相互の關係を法則にまとめたもので
あるが、小兒は文法があつて、夫から文章がある様に考へてゐる。文法は文章があつて、言葉が
あつて、其言葉の關係を示すものに過ぎんのだからして、文法こそ文章のうちに含まれて居ると

い。甲が去つた後で、乙を意識するのであるから、乙を意識して居るときは既に甲は意識して居
らん譯です。それにも拘らず甲と乙とを區別する事が出来るならば、明瞭なる乙の意識の下には、
比較的不明瞭かは知らぬが、矢張り甲の意識が存在して居ると見做さなければなりません。俗に
此不明瞭な意識を稱して記憶と云ふのであります。だからして記憶の最高度は尤も明瞭なる上層
の意識で、その最低度は尤も不明瞭なる下層の意識に過ぎないのであります。

すると意識の連続は是非共記憶を含んで居らねばならず、記憶といふと是非共時間を含んで來
なければなりません。からして時間と云ふものは内容のある意識の連続を待つて始めて云
ふべき事で、之と關係なく時間が獨立して世の中に存在するものではない。換言すれば意識と意
識の間に存する一種の關係であつて、意識があつてこそ此關係が出るのであります。だから意識
を離れて此關係のみを獨立させると云ふ事は便宜上の抽象として差支ないが、それ自身に存在す
るものと見る譯には参りません。丁度こゝにある水指みづさしのなから白い色文をとつて、さうして物
質を離れて白い色が存在すると主張する様なものであります。一寸考へると時間と云ふものが流
れて居て、其永劫の流れのなかに事件が發展推移する様に見えますが、それは前に申した分化統
一の力が、こゝ迄進んだ結果時間と云ふものを抽象して便宜上之に存在を許したとの意味に外な
らんのであります。薔薇の中から香水を取つて、香水のうちに薔薇があると云つた様な論鋒と思

と此一種の關係に對して吾人は因果の名を與へるのみならず、此關係文を切り離して因果の法則と云ふものを捏造するであります。捏造と云ふと妙な言葉ですが、實際ありもせぬものをつくり出すのだから捏造に相違ない。意識現象に附着しない因果はからの因果であります。因果の法則杯と云ふものは全くからのもので、矢張り便宜上の假定に過ぎません。之を知らないで天地の大法に支配せられて……杯と云つて済ましてゐるのは、自分で張子の虎を造つて其前で慄へてゐる様なものであります。所謂因果法と云ふものは只今迄が斯うであつたと云ふ事を一目に見せる爲めの索引に過ぎないので、便利ではあるが、未來に此法を超越した連続が出て來ない杯と思ふのは愚の極であります。夫だから、よく分つた人は俗人の不思議に思ふ様な事を毫も不思議と思はない。今迄知れた因果以外にいくらでも因果があり得るものだと思ふからであります。ドンが鳴ると必ず晝飯だと思ふ連中とは少々違つて居ます。

こゝいらで前段に述べた事を總括して置いて、夫から先へ進行しやうと思ひます。(一) 吾々は生きたいと云ふ念々に支配せられて居ります。意識の方から云ふと、意識には連續的傾向がある。(二) 此傾向が選擇を生ずる。(三) 選擇が理想を孕む。(四) 次に此理想を實現して意識が特殊なる連續的方向を取る。(五) 其結果として意識が分化する、明瞭になる、統一せられる。(六) 一定の關係を統一して時間に客觀的存在を與へる。(七) 一定の關係を統一して空間に客

云つて然るべきである如く空間の概念も具體的なる兩意識のうちに含まれて居ると云つてもよろしいと思ふ。それを便宜の爲めに抽象して離して仕舞つて廣い空間を勝手次第に抛り出すと、無邊際のうちにはぼつり／＼と物が散點して居る様な心持ちになります。尤も此空間論も大分難物の様で、ニュートンと云ふ人は空間は客觀的に存在して居ると主張したさうですし、カントは直覺だとか云つたさうですから、私の云ふ事は、あまり當にはなりません。あなた方が當になさらなくても、私は慥にさう思つてるんだから毫も差支はありません。只自分丈で、さう思つて居れば済む事を、斯様に何の彼のと申し上げるのは、演説を御頼みになつた因果で已を得ず申し上げるので、もし之を申し上げないと、いつ迄立つても文學談に移る事は出來ないのであります。

諸抽象の結果として、時間と空間に客觀的存在を與へると、之を有意義ならしむる爲めに數と云ふものを製造して、此兩つのものを測る便宜法を講ずるのであります。世の中に單に數と云ふ様な間の抜けた實質のないものは嘗て存在した試しがない。今でもありません。數と云ふのは意識の内容に關係なく、只其連續的關係を前後に左右に尤も簡單に測る符牒で、こんな正體のない符牒を製造するには餘程骨が折れたらうと思はれます。

それから意識の連續のうちに、二つもしくは二つ以上、いつでも同じ順序につながつて出て來るのがあります。甲の後には必ず乙が出る。いつでも出る。順序に於て毫も變る事がない。する

して参ります。要するに生活上の利害から割り出した嘘だから、大晦日に女郎のこぼす涙と同じ位な實は含んで居ります。なぜと云つて御覽なさい。もし時間があると思はなければ、又時間を計る數と云ふものがなければ、土曜に演説を受け合つて日曜に来るかも知れない。御互の損になります。空間があると心得なければ、又空間を計る數と云ふものがなければ、電車を避ける事も出来ず、二階から下りる事も出来ず、交番へ突き當つたり、犬の尾を踏んだり、甚だ嬉しくない結果になります。普通に知れ渡つた因果の法則も此通りであります。だから凡て是等に存在の權利を與へないと吾身が危ないのであります。わが身が危ふければどんな無理な事でもしなければなりません。そんな無法があるものと力味で居る人は死ぬ許であります。だから現今びん／＼生息して居る人間は皆不正直もので、律義な連中はとくの昔に、汽車に引かれたり、川へ落ちたり、巡查につかまつたりして、悉く死んで仕舞つたと御承知になれば大した間違はありません。既に空間が出来、時間が出来れば意識を割いて我と物との二つにする事は容易であります。容易な所の騒ぎぢやない。實は我と物を區別して之を手際よく安置する爲に空間と時間の御堂を建立したも同然である。御堂が出来るや否や待ち構へて居た我々は意識を攫んでは抛げ、攫んでは抛げ、恰も栗餅屋が餅をちぎつて黄ナ粉の中へ放り込む様な勢で抛げつけます。此黄ナ粉が時間だと、過去の餅、現在の餅、未來の餅になります。此黄ナ粉が空間だと、遠い餅、近い餅、こゝ

觀的存在を與へる。(八) 時間、空間を有意義ならしむる爲めに數を抽象して之を使用する。(九) 時間内に起る一定の連續を統一して因果の名を附して、因果の法則を抽象する。まづざつと、斯んなものであります。して見ると空間と云ふものも時間と云ふものも因果の法則と云ふものも皆便宜上の假定であつて、眞實に存在して居るものではない。是は私がさう云ふのです。諸君がさうでないと言へば夫でも宜い。御隨意である。兎に角今日丈はさう假定したいものだと思ひます。夫でないと言へば夫でも宜い。御隨意である。兎に角今日丈はさう假定したい云ふと、そこが人間の下の司な了簡で、我々は只生きたい／＼のみ考へて居る。生きさへすれば、どんな嘘でも吐く、どんな間違でも構はず遂行する、眞に淺ましいものどもでありますから、空間があるとならないと生活上不便だと思ふと、すぐ空間を捏造して仕舞ふ。時間がないと都合だと勘づく、よろしい、夫ぢや時間を製造してやらうと、すぐ時間を製造して仕舞ひます。だから色々な抽象や種々な假定は、みんな背に腹は代へられぬ切なさの餘りから割り出した嘘であります。さうして嘘から出た眞實であります。如何に此嘘が便宜であるかは、何年となく嘘をつき習つた、末世澆季の今日では、私も此嘘を眞實と思ひ、あなた方も此嘘を眞實と思つて、誰も怪しむものもなく、疑ふものもなく、公々然憚る所なく、假定を實在と認識して嬉しがつて居るのでも分ります。貧して鈍すとも、窮すれば盡すとも申して、生活難に追はれるとみんなかう墮落

らうと思ひます。又諸君の様な畫家の鑑別する色合は普通人の何十倍に當るか分らんでせう。それも何の爲めかと云へば、元に還つて考へて見ると、つまりは、うまく生きて行かうの一念に、此分化を促されたに過ぎないのであります。ある一種の意識連續を自由に得んが爲めに（選擇の區域に出來得る丈の餘裕を興へんが爲めに）あらかじめ意識の範圍を廣くすると云ふ意味に外ならないのであります。私共はどの草を見ても皆一樣に青く見える。青のうちで色々な種類を意識したいと思つても、如何せん分化作用がそこ迄達して居らんから皆無駄目である。少くとも色に就て變化に富んだ複雑の生活は送れない事に歸着する。盲眼の毛の生えたものであります。情ない次第だと思ひます。或る評家の語に吾人が一色を認むる所に於てチチアンは五十色を認めるとあります。是は單に畫家だから重寶だと云ふ許りではありません。人間として比較的融通の利く生活が遂げらるゝと云ふ意味になります。意識の材料が多ければ多い程、選擇の自由が利いて、ある意識の連續を容易に實行出来る——即ち自己の理想を實行し易い地位に立つ——人と云はなければならぬから、融通の利く人と申すのであります。單に色許ではありません。例へば思想の乏しい人の送る内生涯と云ふものも色に於ける吾々と同じく、氣の毒な程憐なものです。いくら金錢に不自由がなくても、いくら地位門閥が高くても、意識の連續は單調で、平凡で、毫も理想がなくて、高、下、雅、俗、正、邪、曲、直の區別さへ分らなくて昏々濛々としてアミーバの様な

の餅、あすこの餅になります。今でも私の前にあなた方が百五十人許りならんで居られる。是は失禮ながら私が便宜の爲、そこへ投げ出したのであります。既に空間の出來た今日であるから、嘘にもせよ折角出來上つたものを使はないのも寶の持腐れであるから、都合により、びしゃく／＼と投出すと約百餘人ちやんと、そこに行儀よく竝んで居られて至極便利であります。投げると申すと失敬に當りますが、栗餅とは認めて居ないのだから、大した非禮にはなるまいと思ひます。此放射作用と前に申した分化作用が合併して我以外のものを、單に我以外のものとして置かないで、之に色々な名稱を興へて互に區別する様になります。例へば感覺的なものと超感覺的なもの（あるかないか知らないが幽霊とか神とか云ふ正體の分らぬものを指すのです）に分類する。其感覺的なものを又眼で見る色や形、耳で聴く音や響、鼻で嗅ぐ香、舌でしる味杯に區別する。此の如く區別されたものを、また段々に細かく割つて行く。分化作用が行はれて、感覺が鋭敏になればなる程此區別は微精になつて來ます。のみならず同一に統一作用が行はれるからして、一方では草となり、木となり、動物となり、人間となるのみならず。草は董となり、蒲公英となり、櫻草となり、木は梅となり、桃となり、松となり、檜となり、動物は牛、馬、猿、犬、人間は士、農、工、商、或は老、若、男、女、もしくは貴、賤、長、幼、賢、愚、正、邪、いくらでも分岐して來ます。現に今日でも植物學者の見分け得る草や花の種類は殆んど吾人の幾百倍に上るであ

生活を送ります。こんな連中は人間さへ見れば誰も彼もみな同じ物だと思つて働きかけます。それは頭が不明瞭なんだからだと注意してやると、却つて吾々を輕蔑したり、罵倒したりするから厄介です——然し是はこゝで云ふ事ではない。演説の足が滑つて泥溝の中へ一寸落ちたのです。すぐ這ひ上つて眞直に進行します。

吾人は今申す通り我に對する物を空間に放射して、分化作用で之を精細に區別して行きます。同時に我に對しても亦同様の分化作用を發展させて、身體と精神とを區別する。其精神作用を知情、意、の三に區別します。それから此知を割り、情を割り、其作用の特性によつて又色々に識別して行きます。此方面は主として心理學者と云ふものが専門として擔任して居るから、此等の人に聞くのが一番わかり易い。尤も心理學者のやる事は心の作用を分解して抽象して仕舞ふ弊がある。知情意は當を得た分類かも知れぬが、三つの作用が各獨立して、他と交渉なく働いて居るものではありません。心の作用はどんなに立入つて細かい點に至つても、之を全體として見ると矢張り知情意の三つを含んで居る場合が多い。だから此三作用を截然と區別するのは全く便宜上の抽象である。此抽象法を用ひないで、しかも極度の分化作用による微細なる心の働き（全體として）を寫して人に示すのは重に文學者がやつて居る。だから文學者の仕事も此分化發展につれて段々と、朦朧たるものを明瞭に意識し、意識したるものを仔細に區別して行きます。例へば昔

の竹取物語とか、太平記とかを見ると、色々な人間が出て來るがみんな同じ人間の様であります。西鶴杯に至つても矢張りさうであります。つまりあゝ云ふ著者には人間が大抵同様にぼうつと見えたのでありませう。分化作用の發展した今日になると人間觀がさう鷹揚ではいけない。彼等の精神作用に就いて微妙な細い割り方をして、しかも其割つた部分を明細に描寫する手際がなければ時勢に釣り合はない。これ丈の眼識のないものが人間を寫さうと企てるのは、恰も色盲が繪をかゝうと發心する様なもので到底成功はしないのであります。畫を専門になさる、貴所方の方から云ふと、同じ白色を出すのに白紙の白さと、食卓布の白さを區別する位な視覚力がないと視覚の發達した今日に於て充分理想通りの色を表現する事が出來ないと同様の意義で、——文學者の方でも同性質、同傾向、同境遇、同年輩の男でも、其間に微妙な區別を認め得る位な眼光がないと、人を視る力の發達した今日に於ては、性格を描寫したとは申されないのであります。従つて人間をかく文學者は、單に文學者ではならん、要するに人間を識別する能力が發達した人でなくてはならんのです。進んだる世の中に、尤も進んだる眼識を具へた男——特に文學者としてとはない、一般人間として此方面に立派な腕前のある男——でなければ手は出せぬ筈であります。世の中はさう思つて居りません。何の小説家かと、小説家を以て恰も指物師とか經師屋の如く單に筆を舐つて衣食する人の様に考へてゐる。小説家よりも大學の先生の方が遙にえらいと考へて居

る。内務省の地方局長の方が猶遙にえらいと思つて居る。大臣や金持や華族様は猶々遙にえらいと思つてゐる。妙な事であります。もし我々が小説家から、人間と云ふものは、こんなものであると云ふ新事實を教へられたならば、我々は我々の分化作用の徑路に於て、此小説家の爲めに一步の發展を促されて、開化の進路にあたる一叢の荆棘を切り開いて貰つたと云はねばならんのだらうと思ひます。(小説家の功力は此一點に限ると云ふ意味ではない。此一點を擧げて考へても局長さんや博士さんに劣るものでないと云ふのであります)もし諸君がそんな小説家は現今日本に一人もないではないかと云はれるならば、私はかう答へる。それは小説家の罪ではない。現今日本の小説家(私も其一人と御認めになつてよろしい)の罪である。局長にでも、がある如く、博士にでも、がある如く、小説家にでも、があるのも御互様と申さねばならぬのであります。——又泥溝の中へ落ちました。

實はまだ文學の御話をする程に講演の歩を進めて居らるのであります。分化作用を述べる際に、つい口が滑つて文學者ことに小説家の眼識に論及して仕舞つたのであります。だから是を以て彼等の使命の全般をつくしたとは申されない。前にも云ふ通り序だから分化作用に即して彼等の使命の一端を擧げたのに過ぎないのである。従つて文學全體に涉つての御話をするときには今少し概括的に出て來なければならぬ譯です。是から追々そこ迄漕ぎ付けて行きます。

かく分化作用で、吾々は物と我とを分ち、物を分つて自然と人間(物として觀たる人間)と超感覺的な神(我を離れて神の存在を認める場合に云ふのであります)とし、我を分つて知、情、意の三とします。此我なる三作用と我以外の物とを結びつけると、明かに三の場合が成立します。即ち物に向つて知を働かす人と、物に向つて情を働かす人と、それから物に向つて意を働かす人でありませぬ。無論此三作用は元來獨立して居らんのだから、こゝで知を働かし、情を働かし、意を働かすと云ふのは重に働かすと云ふ意味で、全然他の作用を除却して、そのみを働かすと云ふ積ではありませぬ。そこで此うちで知を働かす人は、物の關係を明める人で俗に之を哲學者もしくは科學者と云ひます。情を働かす人は、物の關係を味はふ人で俗に之を文學者もしくは藝術家と稱へます。最後に意を働かす人は、物の關係を改造する人で俗に之を軍人とか、政治家とか、豆腐屋とか、大工とか號して居ります。

斯様に意識の内容が分化して來ると、内容の連続も多種多様になるから、前に申した理想、即ち如何なる意識の連續を以て自己の生命を構成しやうかと云ふ選擇の區域も大分自由になります。ある人は比較的知の作用のみを働かす意識の連續を得て生存せんと冀ひ、遂に學者になります。又ある人は比較的情を働かす意識の連續を以て生活の内容としたいと云ふ理想からとうとう文士とか、畫家とか、音樂家になつて仕舞ひます。又ある人は意志を多く働かし得る意識の連續を希

を味はひ得る爲めに、明かにするのだからして、いくら明かになるからと云うて、此關係を味はひ得ぬ程度迄に明かにしては何にもならぬのであります。だから三と云ふ關係を知るのは結構だが林檎と云ふ果物を忘るゝ事は到底文藝家には出来ないのであります。文藝家の意志を働かす場合も其の通りであります。物の關係を改造するのが目的ではない、よりよく情を働かし得る爲に改造するのである。からして情の活動に反する程度迄に此關係を新あらたにして仕舞ふのは、文藝家の斷じてやらぬ事でありませぬ。松の傍かたはらに石を添へる事はあるでせうが、松を切つて湯屋に賣拂ふ事は餘程貧乏しないと出来悪い。折角の松を一片の烟として仕舞ふともう、情を働かす餘地がなくなるからであります。して見ると文藝家は「物の關係を味はふものだ」と云ふ句の意味が聊か明瞭になつた様であります。即ち物の關係を味はひ得んが爲めには、其物がどこ迄も具體的でなくてはならぬ、知意の働きで、具體的のものを打ち壊して仕舞ふや否や、文藝家は此關係を味はふ事が出来なくなる。従つてどこ迄も具體的のものに即して、情を働かせる、具體の性質を破壊せぬ範圍内に於て知、意を働かせる。——まづかうなります。

すると文藝家の理想は到底感覺的なものを離れては成立せんと云ふ事になります。(此事を詳しく論ずると色々の疑問が起つて來ますが、今は時間がありませんから述べません。先づ大體の上にて此命題は確然たる根據のあるものと御考へになつても差支はなからうと思ひます) 早い

望する結果百姓になつたり、車引になつたり——是はたんとないかも知れぬが、軍いくさをしたり、冒險に出たり、革命を企てたりするのは大分あるでせう。

かく人間の理想を三大別した所で、我々、即ち今日此の席で講演の榮譽を有して居る私と、其講演を御聴き下さる諸君の理想は何であるかと云ふと、云ふ迄もなく第二に屬するものであります。情を働かして生活したい、知意を働かせたくないと云ふのではないが、情を離れて生きて居たくないと言ふのが我々の理想であります。然し只「情が理想」では合點が行かない。御五に成程と合點が參る爲めには、今少し詳細に「情を理想とする」とは、こんなものだと小こまかく割つて御話しをしなければなるまいと思ひます。

情を働かす人は物の關係を味はふんだと申しました。物の關係を味はふ人は、物の關係を明あきらめなくてはならず、又場合によつては此關係を改造しなくては味が出て來ないからして、情の人はかねて、知意の人でなくてはならず、文藝家は同時に哲學者で同時に實行的の人(創作家)であるのは無論であります。然し關係を明める方を専らにする人は、明め易くするために、味はふ事の出來ない程度迄に此關係を抽象して仕舞ふかも知れません。林檎が三つあると、三と云ふ關係を明かにさへすればよいと云ふので、肝心の林檎は忘れて、只三の數かず丈に重きを置く様になります。文藝家に取つても關係を明かにする必要があるが、之を明かにするのは従前よりよく此關係

我々は自然と此人間とに對して一種の情を有して居ります。換言すれば感覺的なる自然と感覺的なる人間其物の色合やら、線の配合やら、大小やら、比例やら、質の軟硬やら、光線の反射具合やら、彼等の有する音聲やら、凡て此等の感覺的なるものに對して趣味、即ち好惡、即ち情、を有して居ります。だから此等の感覺的なる物の關係を味はふ事が出来ます。のみならず其うちで尤も優れたる關係を意識したくなります。其意識したい理想を實現する一方法として詩が出来ます、畫が出来ます。此理想に對する情の尤も著しきものを稱して美的情操と云ひます。(實は美的理想以外にも色々な理想が起る譯であります。或は一種の關係に突兀と云ふ名を與へ、或は他種の關係に飄逸と云ふ名を與へて、突兀的情操、飄逸的情操と云ふのを作つても差支ない。分化作用が發達すれば自然と此處へ來るに極まつて居ります。西洋人の唱へ出した美とか美學とか云ふものの爲めに我々は大に迷惑します) かやうにして美的理想を自然物の關係で實現しやうとするものは山水専門の畫家になつたり、天地の景物を咏する事を好む支那詩人もしくは日本の俳句家の様なものになります。それから又、此美的理想を人物の關係に於て實現しやうとすると、美人を咏する事の好きな詩人が出來たり、之を寫す事の御得意な畫家になります。現今西洋でも日本でも八釜しく騒いでゐる裸體畫杯と云ふものは全く此局部の理想を生涯の目的として苦心してゐるのであります。技術としては六づかしいかも知れぬが文藝家の理想としては、ほんの一部分に過

話しが無臭無形の神の事でもかゝうとすると何か感覺的のものを借りて來ないと文章にも繪にもなりません。だから舊約全書の神様や希臘の神様はみんな聲とか形とか或は其他の感覺的なる力を有して居ります。それだから吾人文藝家の理想は感覺的なる或物を通じて一種の情をあらはすと云うても宜しからうと存じます。そこで問題は二つになります。一は感覺的なるものとは何だと云ふか又、「感覺的なるものを通じて」と云ふのは感覺的なるものを使つて、此道具の方便である情をあらはすと云ふのか、然らずんば感覺的なるもの、それ自身が此情をあらはす目的物かと云ふ問題であります。此問題を解釋すると文藝家の理想の分化する模様が大体見當がつかます。第一問の解釋、第二問の解釋として順を追うては述べませんが、只秩序を立て、分り易くする爲めに矢張り一二の番號を振つて説明して行きます。

(一) 私は最前空間、時間の建立からして、物我の二世界を作ると申しました。其物なるものは自然である、人間である、(單に物として見たる)神である(我以外に存在するとすれば)と申しました。このうちで神は感覺的なるものでないから問題になりません。もし文藝に神が出現するときは感覺的なる或物を通じてくるのだから、出現するとしても、他と同じ分類のなかに這入るからして矢張り問題にする必要はありません。すると残るものは自然と人間であります。さうして

ぎんであります。人によると裸體畫さへかけば、畫の能事は盡きた様に吹聴してゐる。私の方には心得がないから、何とも申しかねるが、あれは佛國の現代の風潮が東漸した結果ではないでせうか。とにかく、畫でも詩でも文でも構はない。感覺物として見たる人間が既に感覺物の一部分に過ぎん上に、美的情操と云ふのが又、此感覺物として見たる人間に對する情操の一部に過ぎんと判然した以上は、裸體美と云ふものは尊いものかは知れぬが、狭いものには相違ないでせう。

美的にせよ、突兀的にせよ、飄逸的にせよ、皆吾人の物の關係を味ふ時の味ひ方で、其いづれを選ぶかは文藝家の理想でまゐるべき問題でありますから、分化の結果理想が殖えれば、どこ迄割れて行くか分りません。然し幾ら割れても、こゝに云ふ理想は、感覺物を感覺物として見た時に其關係から生ずるのであります。即ち此際に於ける情操は、感覺物其ものを目的物として見た時に起るので、之を道具に使つて、その媒介によつて、感覺物以外の或るものに對して起す情操と混同してはならぬのであります。

(二) 物我のうち物に對する理想と情操とは以上で大抵御分りになつたらうと思ひます。すると今度は私の番でありますから、此方を少々説明します。

(い) 我の作用を知情意に區別することは前に述べた通りで、此知の働きを主にして物の關係

を明かにするものは哲學者もしくは科學者だと申しました。成る程關係を明かにすると云ふ點より見れば哲學科學の領分に相違ないが、關係を明かにする爲に一種の情が起るならば、情が起ると云ふ點に於て、知の働きであるにも拘はらず文藝的作用と云はねばならぬかと思ひます。ところが知を働かして情の満足を得る爲めには前に説明した通り感覺的なものを離れて、單に物の關係のみを抽象してあらはしてはならぬのであります。換言すると文藝的に知を働かせる爲め感覺的の具體を藉りて來なければ成立しない、具體を藉りて其の媒介を待てば知の働きと雖も之を文藝化するを得べしと云ふ事になります。さうすると、こゝに新しい文藝上の理想が出來上ります。即ち物を道具に使つて、知を働かし、其關係を明かにして情の満足を得ると云ふ理想であります。此理想を眞に對する理想と云ひます。だからして眞に對する理想は哲學者及び科學者の理想であると同時に文藝家の理想にもなります。但し後者は具體を通じて眞をあらはすと云ふ條件に束縛されたゞけが、前者と異なるのであります。さうして此眞のあらはし方、即ち知を働かす具合も分化して色々になります。重に人間の精神作用が、(此場合には(一)に於ける如く人間を純感覺物と見做さないのである)あらかじめ吾人の豫想した因果律と一致するか、又は此因果律に一歩の分化を加へたる新意義に應じて發展する場合に多く用ひられるのであります。たとへば父子が激論をして居ると、急に火事が起つて、家が烟につままれる。其時今迄激論をして居た親子が、

情を働かせるときに亦一種の情を得ねばならぬ譯であります。此兩の情は假令其内容に於て彼此相一致するとしても、之を同體同物としては議論の上に於て混雜を生ずる譯であります。例へばある感覺物を通じて怒と云ふ情をあらはすとすれば、此作物より得る吾人の情も亦同性質の怒かも知れぬけれども（時には異性質の情を起す事あるは勿論である）兩者同物ではない。前の怒りは原因で後の怒りは結果である。わかり易く言ひ直すと、前の怒りは感覺物に附着した怒である。（たとひ其源は私の有する作用中の怒りを我以外に放射して創設せるものにもせよ）後の怒は我と云ふ自己中に起る怒りである。だから混同を防ぐ爲めに此二つを區別して置いて歩を進めます。然し其論法は大體に於て（い）の場合、即ち吾人は知の働きを愛して、之に一種の情を付與すと云ふ條りに説明したものと變りはありません。吾人の心裏に往來する喜怒哀樂は、それ自身に於て、吾人の意識の大部分を構成するのみならず、其發現を客觀的にして、之を所謂物（多くの場合）に於ては人間であります）に於て認めた時にも亦大に吾人の情を刺激するものであります。けれども此刺激は前に述べた條件に基いて、ある具體、ことに人間を通じて情があらはるゝときに始めて享受する事が出来るのであります。情に於て興味を有するからと云うて心理學者の様に情を抽象して、之を死物として取扱へば文藝的にはなり兼ねるのであります。尤も當體が情であるに、知意に比すると比較的抽象化しても物にならんとは限りませんが、之を詳しく説明する

急に喧嘩を忘れて、互に相援けて門外に逃げる所を小説にかく。すると書いた人は無論讀む人も成程さもありさうだと思ふ。即ち此小説はある地位にある親子の關係を明かにしたと云ふ點に於て、作者及び讀者の知を働かし得て、眞に對する情の満足を得せしむるのであります。又は反對に、大變中のよかつた夫婦が飢饉のときに、平生の愛を忘れて、妻の食ふべき粥を夫が奪つて食ふと云ふ事を小説にかく。するともある位地境遇にある夫婦の關係を明かにすると云ふ點で同様の満足を作者と讀者に與へるかも知れない。（人間の精神作用から云ふと眞は色々である。時には相反しても依然として雙方共眞である）好んでかう言ふ事をかく文藝家を眞を理想にする文藝家と云ひます。

（ろ）吾人の有する第二の精神作用は情であります。此情を理想として働かせる人を文藝家と云ふ事は前に述べた通りであります。説いてこゝに至ると混雜を生じ易いからして、少々辯じた上進行します。單に情と云ふと曖昧であります。何故なれば我々が情の活動を得んが爲めに、文藝上の作物を仕上げたり、又は之を味ふ時に働かしむる情は、作物中に材料として使用する情とは區別する必要があるからであります。我々は感覺物を感覺物として見るときに一種の情を起します。此情は即ち文藝家の理想の一であります。我々は又感覺物を通じて知を働かせるときに一種の情を起します。此情も亦文藝家の理想の一であります。次に我々は同じく感覺物を通じて

餘裕がないから略します。

そこで此種の理想に在つても分化の結果色々になりますが、先づ標準を云ふと、物を通して——物と云ふより人と云ふ方が分り易いから人としませう。——人を通じて愛の關係をあらはすもの、是は十中八九所謂小説家の理想になつて居ります。其愛の關係も分化すると色々になります。相愛して夫婦になつたり、戀の病に罹つたり——尤も近頃の小説にはそんな古風なのは滅多になりませんが、それからもつと皮肉なものになると、嫁に行きながら他の男を慕つて見たり、漸く思が遂げて一所になる明るる日から喧嘩を始めたり、色々な理想——理想と云ふのも可笑しい様だ——とにかく色々出来ませう。次には忠、孝、義侠心、友情、重な徳義的情操は其分化した變形と共に皆標準になります。此徳義的情操を標準にしたものを總稱して善の理想と呼ぶ事が出来ます。此事はもつと委細に御話したいが時間が無いから略して次に移ります。

(は) 精神作用の第三は意志であります。此意志が文藝的にあらはれ得る爲めには、矢張り前述の條件に従つて、感覺的な物を通じて具體化されなくてはなりません。さうすると、感覺的な物は道具であつて、此道具の爲に意志の働きが判然とあらはれてくる。然し道具はどこ迄も道具で、意志があらはれるから道具も尊くなる。例へば徳利の様なものであります。徳利自身に貴重な陶器がないとは限らぬが、底が抜けて酒を盛るに堪へなかつたならば、杯盤の間に周旋して主

人の御意に入る事は出来ないのであります。今かりに大弾丸の空裏を飛ぶ様を寫すとすると之を見る方に二通りある。一は單に感覺的で、第一に述べた様な場合に屬する。一は此感覺的なものを通して非常に猛烈な勢——只の勢では寫す事もどうする事も出来んから——をあらはす。すると弾丸は客で、實の目的は弾丸のあらはす猛勢である。自然ながら、器械的ながら一種の意志の作用である。冬富士山へ登るものを見ると人は馬鹿と云ひます。成程馬鹿には相違ないが、此馬鹿を通して一種の意志が発現されるとすれば、馬鹿全體に眼をつける必要はない、只其意志のあらはれる所、文藝的なる所文を見てやればよいかも知れません。貴重な生命を賭して海峽を泳いで見たり、沙漠を横ぎつて見たりする馬鹿は、みんな意志を働かす意識の連續を得んが爲めに他を犠牲に供するのであります。従つて之を文藝的にあらはせば矢張り文藝的にならんとは斷言出来ません。況んや國の爲めとか、道の爲めとか、人の爲めとか、(る)の場合に述べた徳義的理想と合する様に意志が発現してくると非常な高尚な情操を引き起します。所謂懦夫をして起たしむとは此時の事でありませう。英語では之を Heroism と名づけます。吾人の Heroism に對して起す情緒は實際偉大なものに相違ありません。私は今日此處へ參りがけに砲兵工廠の高い烟突から黒烟が無暗にむく／＼立ち騰るのを見て一種の感を得ました。考へると煤烟杯は俗なものであります。世の中に何が汚ないと云つて石炭たき程きたないものは滅多にない。さうして、あの黒

時間がないからやめます。

文藝家の理想を漸く此四種に分けました。此分類は私が文學論のなかに分けて置いたものとは少々違ひますが、是は出立地が違ふのだから仕方がありません。尤もこの分け方の方が、明瞭で適切の様に思はれますから、雙方違つてゐても決して諸君の御損にはなりません。楮前にも申す通り、知、情、意なる我々の精神的作用は區別の出来るにもかゝらず、區別された儘、他と關係なく發現するものでない、のみならず文藝にあつては皆感覺物を通じて其作用を現すのであるからして、此四種の理想に對する情操も、互に混合錯雜して、事實上は斯様に明瞭に區別を受けて、作物中に出てくるものではありません。それにも拘はらず理想は四種あるので、四種以下にはならぬのであります。しかも或る格段なる作物を取つて檢して見ると、四種のうちの孰れか尤も著しく眼に付きます。従つて此作はどの理想に屬するものと云ふ事はある程度迄云へます。さうして此四種の理想が、時代により、個人により、其勢力の消長遷移に影響を受けつゝあるは疑ふ可からざる事實であります。ある時代には、美の要求を満足しなければ文藝上の作品でないと思はれる事もありませう。又次の時代には理想が推移して美はとにかく眞は是非共あらはさなくては文藝の二字を冠する資格がないと評します。又ある人はどこかで道義心に満足に興へない作物は、作り度くない讀み度くないと斷言します。又他の人は意思の發現に伴ふ莊嚴の情

いものはみんな金がとりたい／＼と云つて烟突が吐く呼吸だと思ふと猶いやです。其上あの烟は肺病によくない。——然し私はそんな事は忘れて一種の感を得た。其感じは取も直さず、意志の發現に對して起る感じの一部分であります。砲兵工廠の烟ですらかうだから、眞正の heroism に至つては實に壯烈な感じがあるだらうと思ひます。文藝家のうちでは此種の情緒を理想とするものは現代に於ては殆んどない様に思ひます。此理想にも分化があるのは無論です。楠公が湊川で、願くは七たび人間に生れて朝敵を亡ぼさんと云ひながら刺しちがへて死んだのは一例であります。跋で結伽の出来なかつた大燈國師が臨終に、今日こそ、わが言ふ通りになれと満足でない足をみしりと折つて鮮血が法衣を染めるにも頓着なく座禪の儘往生したのも一例であります。分化は色々出來ます。然し其標準を云ふと先づ莊嚴に對する情操と云ふてよろしからうと思ひます。

是で文藝家の理想の種類及び其説明は先づ一通り済みました。概括すると、一が感覺物そのものに對する情緒。(其代表は美的理想) 二が感覺物を通じて知、情、意の三作用が働く場合で之を分つて、(い)知の働く場合(代表は眞に對する理想)(ろ)情の働く場合(代表は愛に對する理想及び道義に對する理想)(は)意志の働く場合(代表は莊嚴に對する理想)となります。此四大別の上に連想から來る情緒が如何にして混入するかを論じなければならぬのですが、是も

此故に此等四種の理想は、互に平等な権利を有して、相冒すべからざる標準であります。だから美の標準のみを固執して眞の理想を評議するのは痼氣筋の飛車取り王手の様なものであります。朝起を標準として人の食慾を批判する様なものでせう。御前は朝寝坊だ、朝寝坊だから無暗に食ふのだと判断されては誰も心服するものはない。拵を持ち出して、反物の尺を取つてやるから、さあ持つて来いと號令を下したつて誰も號令に應ずるものはありません。寒暖計を眺めて、どうもあの山の高さは餘程あるよと云ふ連中は、寒暖計を驗温器の代りにして逆上の程度でも計つたらよからうと思ふ。尤もこゝに見當違ひの批評と云ふのは、美をあらはした作物を見て、こゝには眞がないと否定する意味ではない。眞がないから駄目だ作物にならないと云ふ批評を云ふのである。眞はないかも知れぬ、なければよい。無いものを有ると云うて貰ひたいとは誰も云はないでせう。然し現にある美丈は見てやらなくつては、折角つた作物の生命がなくなる譯であります。頭は薬罐だが鬚丈は白いと云へば公平であるが、薬罐ちや御話しにならんよと、一言で退けられたなら、鬚こそいゝ災難である。運慶の仁王は意志の發動をあらはして居る。然し其體格は解剖には叶つて居らんだらうと思ひます。あれを評して眞を缺いてるから駄目だと云ふのは、云ふ方が駄目です。ミレーの晩祈の圖は一種の幽遠な情をあらはして居る。そこに目がつけば、それで澤山である。此畫には意志の發動がないと云ふのは、我慢して聞いてやつても好い。發動

緒を得なければ、文藝上のあるものを味ふた氣がしないと迄主張するかも知れない。是等の時代も是等の人々も悉く正しいのであります。又四種の何れでも構はないと云ふ人があれば、其人の趣味は尤も廣い人で又尤も正しい人と判断してもよからうと思ひます。此四種の何れが如何なる時勢に流行し、いづれが如何なる人に尤も歡迎さるゝかは大分興味ある問題であります。是も時間が無いから抜きに致します。只一寸御断りをして置きたいのは、此四種は名前の示す如く四種であつて互にそれ相當の主張を有して、文藝の理想となつて居るものでありますから、甲を以て乙に隷屬すべき理由はどうしても發見出來ないのであります。此四つのうちに、重要な度からして差等の點數をつけて見ると云はれた時に、何人も之を敢てする事は出來ない筈と思ひます。もしあるとすれば答案を調べずに點數をつける亂暴な教員と同じもので、言語道斷の不心得であります。只吾は時勢の影響を受けて居るから、しかくの理想に屬するものを好むと云ふならばそれでよろしい。吾は個性として斯くくの理想の下に包含せらるべきものを選択と云ふならば、夫で勘辨してもよい。好悪は理窟にはならんものだから、いやとか好きとか云ふなら夫迄であるが、根據のない好悪を發表するのを恥ぢて、理窟もつかぬ所に、いたづらな理窟をつけて、辯解するのは、消化がわるいから僕は蛸が嫌だと云ふ様な口上で、もし好物であつたなら、如何程不消化でも、だまつて、足は八本共に平げる程な覺悟だらうと思ひます。

がないから畫にならんと云ふなら、發動の管から文藝の世界を見る蛙の様なものであります。然しながら、一の理想をあらはすときに、他の理想を缺いて居る場合と、積極的に他の理想を打ち崩して居る場合とは少々違ふのであります。缺いて居るのは只含んで居らんと云ふ迄で、打ち壊すとすると明かに其理想に違背して居るのであります。此場合には作家の標準にした理想が、凡ての他を忘却せしめ得る程な手際でうまく作物にあらはれて居らねばならん。けれども是は天才でも甚だ六かしい。従つて普通の場合には功罪が帳消しになつて餘す所は棒丈になります。いくら藤村の羊羹でもおまるの中に入れてあると、少し答へます。其おまるたると否とを問はず、むしろ食ふものに至つては非常稀有の羊羹好きでなければなりません。あれも學才があつて教師には至極だが、どうも放蕩をしてと云ふ事になると到底及第は出来かねます。品行が方正でないと言ふだけなら、まだしもだが、大に駄々羅遊びをして、二尺に餘る料理屋のつけを懐中に呑んで、蹣跚として登校される様では、教場内の令名に關はるのは無論であります。だから如何な長所があつても、此長所を傷ける短所があつて、此短所を忘れ得せしむる丈に長所が卓然としてゐない作物は、惜しいけれども文句が付きまします。私はとくに惜しいけれどもと云ひたい。惜しいと云ふのは、既に長所を認めた上の批評であり、且短所をも知り抜いた上の判断で、一本調子に搦手ばかり、五年も六年も突つて居る陣笠連とは歩調を一にしたくないからかう云ふのであります。

そこで愈現代文藝の理想に移つて、少々氣焰を述べたいと思ひます。現代文藝の理想は何でありませう。美？美ではない。畫の方、彫刻の方でも恐らく、單純な美ではないかも知れないが、それは不案内だから、諸君の御一考を煩はすとして、文學に就て申すと決して美ではない。美と云ふものを唯一の生命にかいたものは、短詩の外にはないだらうと思ひます。小説には無論ありますまい。脚本は固よりです。詳しく云ふと、暇がかゝるから、此位で御免蒙つて先へ進みます。現代の理想が美でなければ、善であらうか、愛であらうか。此種の理想は無論幾多の作物中に經となり緯となり織り込まれて居るには相違ないが、是れが現代の理想だと云ふには、遙に微弱すぎると思ひます。それでは莊嚴だらうか。莊嚴が現代の理想ならば聊か頼母しい氣持もするが、實際は却つて反對である。現代の世程 Heroism に缺乏した世はなく、又現代の文學程 heroism を發揚しない文學は少からうと思ひます。現代の世に莊嚴の感を起す悲劇は一つも出ないのでも分ります。現代文藝の理想が美にもあらず、善にもあらず又莊嚴にもあざざる以上は、其理想は眞の一字にあるに相違ない。例を引けば長くなる、證を挙げれば大變である。仕方がないから、只眞の一字が現代文藝ことに文學の理想であると云ひ放つて置きます。しばらく之を事實と御承認を願ひたい。所で此眞なるものも、所謂分化作用で、色々の種類と程度を有して居る

廣い世界を、廣い世界に住む人間が、隨意の歩調で、勝手な方角へあるいて居るとすれば、御互に行き合ふとき、突き當りさうなときは、格別の理由のない限り、兩方で路を譲り合はねばならない。四種の理想は皆同等の權利を有して人生をあるいて居る。あるくのは御隨意だが、權利が同等であると極つたなら、衝突しさうな場合には御互に示談をして、好い加減に折り合を付けなければならぬ譯です。此折り合を付ける爲めには、自分が一人合點で、自分一人の路をあるいて居ては出来ない。つまり向ふから來る人、横から來る人も、それ／＼相當の用事もあり、理由もあるんだと認める丈に、世間が廣くなければなりません。所が狭く深くなると前に云うた御醫者の様にそれが出来なくなる。抽出法と云つて、自分の熱心な所丈へ眼をつけて他の事は皆抽出して度外に置いて仕舞ふ。度外に置く譯である。他の事は頭から眼に這入つて來ないのであります。さうなると本人の爲めには至極結構であるが、他人即ち同方向に進んで行かない人には随分妨害になる事があります。妨害になると云ふ事を知つて居れば改良もするだらうが、自己の世界が狭くて、此狭い世界以外に住む人のある事を認識しない原因から起るとすれば、どうする事も出来ません。現代の文藝で眞を重んずるの弊は、かうなりはしまいかと思ふのであります。否現にかうなりつゝあると私は認めて居るのであります。

眞を重んずるの結果、眞に到着すれば何を書いても構はない事となる。眞を發揮するの結果、

には相違ない、英佛獨露の諸書を獵涉したならば其變形の重なるものを指摘する事は出来る事になりませう。私はそれに對して決して不平を云ふ積ではありません。前に云ふ如く、眞は四理想の一であつて、其一たる眞が勢を得て、他の三理想が比較的下火になるのも、時勢の推移上銀杏返しがすたれて束髪が流行すると同じ様に、已むを得ぬ次第と考へられます。然し是に就て一言御參考の爲めに申し上げて置きたいのは、外ではありませんが、斯う云ふ事なんです。

人間の觀察と云ふ者は深くなると狭くなるものです。世の中に何が狭いと云つて専門家程狭いものはないのも御分りになるでせう。狭いと云ふ事は別段わるいと云ふ意味は含んで居りませんから、構はないと主張されるかも知れませんが、狭いと云ふと不都合な事になります。醫者があまり熱心になつて狭い専門の範圍を、寝ても覺めても出る事が出来ないと、遂には妻に毒藥を飲まして、其結果を實驗して見たい杯と飛んでもない事を工夫するかも知れません。世の中は廣いものです、廣い世の中に一本の木綿糸をわたして、傍目も觸らず、其上を御叮嚀にあるいて、さうして、是が世界だと心得るのは既に氣の毒な話であります。只氣の毒な丈なら本人さへ我慢すれば夫で済みますが、かう一本調子に行かれては、大にはたのものが迷惑する様な譯になります。往來をあるくのも分ります。いくら巡査が左へ／＼と、月給を時間割にした程な聲を出して、制しても、東西南北へ行く人を悉く一直線に、同方向に、同速力に向ける事は出来ません。

するのです。此衝突は文明が進むに従つて、益烈^{益々}なる許で決して調停のしやうがないに極つて居ます。之を折り合はせる爲には社會の習慣を變へるか、肉體の感覺美を棄てるか、どつちかにしなければなりません、が兩方共強情だから、収まりが付き^た悪い所を、無理に収まりをつけて、頓珍漢な一種の約束を作りました。其約束はかうであります。「肉體の感覺美に打たれてゐるうちは、裸體の社會的不體裁を忘るべし」と云ふのであります。最前^{さいぜん}用ひた^{もち}難かしい言葉を使ふと不體裁の感を抽出して、裸體畫は見るべきものであると云ふ事に歸着します。此約束が成立してから裸體畫は漸く其生命を繋ぐ事が出来たのであつて、ある畫工や文藝批評家の考へる様に、世間晴れて裸體畫が大きな顔をされた義理ではありません。電車は危険だが、交通に便だから、一定の道路に限つて、危険の念を抽出して、あるいてやらうと云ふ條件の下に、東鐵や電鐵が存在すると同じ事でありませぬ。裸體畫も、東鐵も、電鐵も、あまり威張れば存在の權利を取上げてよい位のものであります。然し一度抽出の約束が成り立てば構はない。眞も其通りであります。眞を發揮した作物に對して、他の理想を悉く忘れる、抽出すると云ふ條件さへ成立すればそれで宜しい。——宜しいと云つたつて大きな顔をして宜しいと云ふのではない、存在しても宜しいと云ふのであります。他の理想諸君へは御氣の毒だが、僕も困るから、少し辛抱して呉れ玉へ位の態度なら宜しいと云ふのであります。然し此條件を成立せしむる爲めには眞に對して起す情緒が

美を構はない、善を構はない、莊嚴を構はない迄はよいが、一步を超えて眞の爲めに美を傷つける、善をそこなふ、莊嚴を踏み潰すと云つては、眞派の人は夫で萬歳をあげる氣かも知れぬが美黨、善黨、莊嚴黨は指を叩いて、御尤もと屏息して居る譯には行くまいと思ひます。目的が違ふんだから仕方がないと云ふのは、他に累を及ぼさない範圍内に於て云ふ事でありませぬ。他に累を及ぼさざるものが嚴として存在して居ると云ふ事すら自覺しないで、眞の世界だ、眞の世界だと騒ぎ廻るのは、交通便利の世だ、交通便利の世だと、鈴をふり立て、電車が自分勝手な道路を、無茶苦茶に驅ける様なものである。電車に乗らなければ動かないと云ふ程な電車最良の人なら、夫で満足かも知れぬが、あるいたり、只の車へ乗つたり、自轉車を用ひたりするものゝ爲めには不都合此上もない事と存じます。

尤も文藝と云ふものは鑑賞の上に於ても、創作の上に於ても、多少の抽出法を含むものであります。(抽出法に就ては文學論中に愚見を述べてありますから御參考を願ひたい) 其極端に至ると妙な現象が生じます。たとへば、かの裸體畫が公々然と青天白日の下に曝される様なものであります。一般社會の風紀から云ふと裸體と云ふものは、見苦しい不體裁であります。西洋人が何と云はうと、さうに違ありません。私が保證します。然しながら、人體の感覺美をあらはす爲には、是非共裸體にしなければならん、此不體裁を冒さねばならん事となります。衝突はこゝに存

強烈で、他の理想を忘れ得る程に、うまく發揮されなくてはならん譯であります。今の作物には是丈の仕事が出来て居るか、疑問であります。

あまり議論が抽象的になりますから、實例に就て少々自分の考へを述べて見ませう。こゝに質の啞が一人あるとします。何か不審の件があつて警察へ拘引される。尋問に答へるのが不利益だと悟つて、愈啞の眞似をする。警官も已を得ず、其儘繋留して置くと、翌朝になつて、啞は大變腹が減つて来た。始めは啞だから黙つて辛抱したが、とう／＼堪へられなくなつて、飯を食はして呉れると大きな聲を出すと云ふ筋をかいたら、どんなものでせう。面白い小説になる、ならんの手際は、問題として、兎に角ある境遇に於ける、ある男に就て、一種の眞をあらはす事は出来る。面白味はそこにあるでせう。然し是丈では美な所も、善な所も、又莊嚴な所も無論ない。即ち眞以外の理想は毫も含んで居らんです。そこが疵かと云ふと私はさうは認めません。と云ふものは他の理想を含んで居らんと云ふ迄で、毫も之を害しては居りません。従つて眞に對する面白味を感じるのみで、他の理想は悉く抽出して讀み終る事が出来るからであります。

次にこんな事を書いたら、どうなりませう。一人の乞食が居る。諸所放浪してゐるうちに、或日、或時、或村へ差しかゝると、しきりに腹が減る。幸ひつそりとした一構へに、人の氣はいいない様子を見届けて、麴麴と葡萄酒を盗み出して、口腹の慾を充分充たした上、村外れへ出ると、

眠くなつて、うと／＼して居る所へ、村の女が通りかゝる。腹が張つて、酒の氣が廻つて、當分の間外の慾がなくなつた乞食は、女を見るや否や急に獸慾を遂行する。——此話しはモーパッサンの書いたものにあるさうですが、私は讀んだ事がありません。私に此話をして聞かした人は頻りに面白いと云つて居ました。成程面白いでせう。然し其面白いと云ふのは、矢張りある境遇にあるものが、ある境遇に移ると、それ相應な事をやると云ふ眞相を、臆面なく書いた所にあるのでせう。然し此面白味は、前の啞の話と違つて、只眞を發揮した許りではない。他の理想を打ち壊して居ます。其打ち壊された理想を全然忘れない以上は、折角の面白味は打ち消されて仕舞ふから役に立たんのみか、他の理想を主にする人から散々に悪口される場合が多いだらうと思ひます。かう云ふ場合に抽出の約束は成立しさうにもない。約束が成立しない以上は、此作物の生命はないと云ふより、生命を許し得ないと云ふ方がよからうと思ひます。一般の世の中が腐敗して道義の觀念が薄くなればなる程此種の理想は低くなります。つまり一般の人間の徳義的感覚が鈍くなるから、作家批評家の理想も他の方面へ走つて、こちらは御留守になる。遂に善杯はどうでも眞さへあらはせばと云ふ氣分になるではありませんまいか。日本の現代がさう云ふ社會なら致し方もないが、西洋の社會がかく腐敗して文藝の理想が眞の一方に傾いたものとすれば、前後の考へもなく、すぐ夫を擔いで、神戸や横濱から輸入するのは随分氣の早い話であります。外國か

らベストの種を輸入して喜ぶ國民は古來多くあるまいと考へる。私がかう云ふとあまり極端な言語を弄する様であります。實際外國人の書いたものを見ると、私等には抽出法がうまく行はれない爲めに不快を感じる事が屢あるのだから仕方がありません。

現代の作物ではないが沙翁のオセロ杯は其一例であります。事件の發展や、性格の描寫は眞を得て居りませう、私も二三度講じた事があるから、其邊はよく心得て居る。然し讀んで仕舞つて如何にも感じがわるい。悲壯だの芳烈だのと云ふ考へは出て來ない、只妙な壓迫を受ける。ひまがあつたら、此感じを明瞭に解剖して御目にかけてたいと思ふが今では、そこ迄に頭が整うて居りませんから一言にして不愉快な作だと申します。沙翁の批評家があれ程あるのに、今迄なぜ此の事に就いて何にも述べなかつたか不思議に思はれる位であります。必竟するに只眞と云ふ理想丈を標準にして作物に對する爲ではなからうかと思ひます。現代の作物に至ると、此弊を受けたものは枚舉に遑あらざる程だらうと考へる。ヘダ、ガブレルと云ふ女は何の不足もないのに、人を欺いたり、苦しめたり、馬鹿にしたり、ひどい眞似をやる、徹頭徹尾不愉快な女で、此不愉快な女を書いたのは有名なイブセン氏であります。大變に虚榮心に富んだ女房を持つた腰辨がありました。ある時大臣の夜會か何かの招待状を、ある手躰で貰ひまして、女房を連れて行つたら嘸喜ぶだらうと思ひの外、細君は中々強硬な態度で、着物がかうだの、簪がかうだのと駄々を捏ねま

す。折角の事だから亭主も無理な工面をして一々奥さんの御意に召す様に取り計ひます。夫で御同伴になるかと云ふと、まだ強硬に構へてゐます。最後に金剛石ダイヤモンドとかルビーとか何か寶石を身に着けなければ夜會へは出ませんよと斷然申します。さすがの御亭主も是には辟易致しましたが、遂に一計を案じて、朋友の細君に、かう云ふ飾り一切の品々を所持して居るものがあるのを幸ひ、たゞ一晚丈と云ふので、大切な金剛石の首輪をかり受けて、急の間を合せます。所が細君は恐悅の餘り、夜會の當夜、踊つたり跳ねたり、飛んだり、笑つたり、した揚句の果、とう／＼貴重な借物をどこかへ振り落して仕舞ひました。兩人は蒼くなつて、あまり跳ね過ぎたなと勘づいたが、是より以後跳方を儉約しても金剛石が出る譯でもないので、已むを得ず夫婦相談の結果、無理算段の借金をした上、巴里中かけ廻つて漸く、借用品と一對とも見違へられる首飾を手に入れて、時を違へず先方へ、何知らぬ顔で返却して、其場は無事に済ましました。が借金は中々濟みません。借りたものは巴里だつて返す習慣なのだから、如何な見え坊の細君も茲に至つて驕然節を折つて、臺所へ自身出張して、飯も焚いたり、水仕事もしたり、霜焼をこしらへたり、馬鈴薯を食つたりして、何年かの後漸く負債文は皆済かきさいしたが、同時に下女から發達した奥様の様に、妙な顔と、變な手と、卑しい服裝の所有者となり果てました。話はもう一段で済みます。

ある日此の細君が例の如く筈か何かを提げて、西洋の豆腐でも買ふ積で表へ出ると、不圖ふと先年

も何等の報酬をモーパッサン氏もしくは讀者から得る事が出来ない様になつて仕舞ひます。同情を表してやりたくても馬鹿氣てゐるから、表されないので。それと云ふのは最後の一句があつて、作者が妙に穿つた輕薄な落ちを作つたからであります。此一句の爲めに、モーパッサン氏は徳義心に富める天下の讀者をして、適當なる目的物に同情を表する事が出来ない様にして仕舞ひました。同情を表すべき善行をかきながら、同情を表してはならぬと禁じたのが此作であります。いくら真相を穿つにしても、善の理想をかう害しては、私には賛成出来ません。もう一つ例を挙げます。今度はゾラ君の番であります。御爺さんが年の違つた若い御嫁さんを貰ひます。結婚は致しましたが、どう云ふものか夫婦の間に子が出来ません。夫を苦に病んで御爺さんが醫者に相談をかけますと、醫者は何でも答辯する義務がありますから、左様、海岸へ御出でになつて何とか云ふ貝を召し上がつたら子供が出来ませうよと妙な返事をしました。爺さんは大喜びで、早速細君携帶で佛蘭西の大磯邊に出掛けます。すると其處に細君と年齢から其他の點に至るまで夫婦として、如何にも釣り合のいゝ男が逗留して居まして細君とすぐ懇意になります。兩人は毎日海の中へ飛び込んで一所に泳ぎ廻ります。爺さんは濱邊の砂の上から、毎日遠く之を拜見して、中若いものは活潑だと、心中ひそかに嘆賞して居りました。ある日の事三人で海岸を散歩する事になります。時に、お爺さんは老體の事ですから、石の多い濱邊を嫌つて土堤の上を歩きます。

金剛石を拜借した婦人に出逢ひました。先方は立派な奥様で、當方は年期の明けた模範下女よろしくと云ふ有様だから、挨拶をするのも、一寸面はゆげに見えただんでせうが、思ひ切つて、おやまあ御珍らしい事とか何とか話かけて見ると案の如く、先方では、もうとくの昔に忘れて居ます。下女に近付はない筈だがと云ふ風に構へて居た所を、しよげ返りもせず、實は是々で、あなたの金剛石を辨償する爲め、こんな無理をして、其無理が祟つて、今でも此通りだと、逐一を述べ立てると先方の女は笑ひながら、あの金剛石は練物ですよと云つたさうです。夫で御仕舞です。是は例のモーパッサン氏の作であります。最後の一句は大に振つたもので、定めてモーパッサン氏の大得意な所と思はれます。輕薄な巴里の社會の真相はさもかうあるだらう穿ち得て妙だと手を拍ち度くなるかも知れませんが、そこが此作の理想のある所で、そこが此作の不愉快な所でありませう。よくせきの場合だから細君が虚榮心を折つて、田舎育ちの山出し女と迄成り下がつて、何年の間か苦心の末、身に釣り合はぬ借金を奇麗に返したのは立派な心掛で立派な行動であるからして、もしモーパッサン氏に一點の道義的同情があるならば、少くとも此細君の心行きを活かしてやらなければ濟まない譯でありませう。所が奥さんの折角の丹精が一向活きて居りません。積極的にと云ふと言ひ過ぎるかも知れぬけれども、暗に人から罵されて、働かないでも濟んだ所を、無理に馬鹿氣た働きをした事になつて居るから、奥さんの實着な勤勉は、精神的にも、物質的に

の現象だと云うてもよいだらうと思ひます。諸君は探偵と云ふものを見て、齒するに足る人間とは思はんでせう。探偵だつて家へ歸れば妻もあり、子もあり、隣近所の付合は人並にして居る。丸で道徳的觀念に缺乏した動物ではない。たまには夜店で掛物をひやかしたり、盆栽の一鉢位眺める風流心はあるかも知れない。然しながら探偵が探偵として職務にかゝつたら、只事實をあげると云ふより外に彼等の眼中には何もない。眞を發揮すると云ふと勿體ない言葉であります。まづ彼等の職業の本分を云ふと、尤も下劣な意味に於て眞を探ると申しても差支ないでせう。それで彼等の職務にかゝつた有様を見ると一人前の人間ぢやありません。道徳もなければ美感もない。莊嚴の理想杯は固よりない。如何なる、うつくしいものを見ても、如何なる善に對しても、又如何なる崇高な場合に際しても一向感ずる事が出来ない。出来れば探偵なんかする氣になれるものではありません。探偵が出来るのは人間の理想の四分の三が全く缺亡して、残る四分の一の尤も低度なものが無暗に働くからであります。かゝる人間としては無論通用しない。人間でない器械としてなら、ある場合にあつては重寶でせう。重寶だから、警視廳でも澤山使つて、月給を出して飼つて置きます。然し彼等の職業はもと／＼器械の代りをするのだから、本人共も其積で、職業をして居る内は人間の資格はないものと斷念してやらなくては、普通の人間に對して不敬であります。現代の文學者を以て探偵に比するのは甚だ失禮であります。唯眞の一字を

若い人々は波打際を遠慮なくさつさとあるいて参ります。所が約五六丁も来ると、磯際に大きな洞穴があつて、兩人がそれへ遣入ると、うまい具合と申すか、折悪くと申すか、潮が上げて来て出る事が六づかしくなりました。老人は洞穴の上へ坐つた儘、沖の白帆を眺めて、潮が引いて兩人の出て来るのを待つて居ります。そこであまり退屈なものだから、不圖思出して、例の醫者から勧められた貝を出して、此貝を食つては待ち、食つては待つて、とう／＼潮が引いて、兩人が出てくる迄には餘程多量の貝を平げました。其場は夫れで済みまして、愈細君を連れて宅へ歸つて見ますと、貝の利目は忽ちあらはれて、細君は其月から懐妊して、玉の様な男子か女子か知りませんが生み落して老人は大満足を表すと云ふのが大團圓であります。ソラ君は何を考へて此著作を公けにされたものか存じませんが、私の考では前に擧げたモーパッサン氏よりもある方面に向つて一歩進んだ理想がなくなつては到底書きこなせない作物だと思ひます。よく下民の聚合する寄席杯へ参ると、時々妙な所で喝采する事があります。普通の人が眉を擧げる所に限つて喝采するから妙であります。ソラ君杯も日本へ来て寄席へでも出られたら、定めし大入を取られる事であらうと存じます。

現代文學は皆此弊に陥つて居るとは無論斷言しませんが、色々な點に於て此傾向を帯びて居ることは疑ひもないと思ひます。さうして此傾向は眞の一字を偏重視するからして起つた多少病的

輝き渡るとは何も作家の名前が傳はるとか、世間からわい／＼騒がれると云ふ意味で云ふのでは
ありません。作家の偉大なる人格が、讀者、觀者もしくは聽者の心に浸み渡つて、其血となり肉
となつて彼等の子々孫々迄傳はると云ふ意味であります。文藝に従事するものは此意味で後世に
傳はらなくては、傳はる甲斐がないのであります。人名辭書に二行や三行かゝれる事は傳はるの
ではない。自分が傳はるのではない。活版丈が傳はるのであります。自己が眞の意味に於て一代
に傳はり、後世に傳はつて、始めて我々が文藝に従事する事の閑事業でない事を自覺するのであ
ります。始めて自己が一個人でない、社會全體の精神の一部分であると云ふ事實を意識するので
あります。始めて文藝が世道人心に至大の關係があるのを悟るのであります。我々は生慾の念か
ら出立して、分化の理想を今日迄持續したのでありますから、此理想をある手段によつて實現す
るものは、我々生存の目的を、一層高く且つ大いにした功蹟のあるものであります。尤も偉大な
る理想を尤もよく實現するものは我々生存の目的を尤もよく助長する功蹟のあるものであります。
文藝の士は此意味に於て決して閑人かんとではありません。芭蕉の如く消極的な俳句を造るものでも李
白の様な放縱な詩を詠するものでも決して閑人ではありません。普通の大臣豪族よりも、有意義
な生活を送つて、皆夫れ／＼に人生の大目的に貢獻して居ります。
理想とは何でもありません。如何にして生存するが尤もよきかの問題に對して與へたる答案に過ぎん

標榜して、其他の理想はどうかつても構はないと云ふ意味な作物を公然發表して得意になるなら
ば、其作家は個人としては、いざ知らず、作家として陥缺のある人間でなければなりません。病
的と云はなければなりません。(四種の理想は同等の權利を有して相冒すべきものでないと、先
に述べて置きました。四種を同等に満足せしむる事は困難かも知れません。多少は冒す場合があ
るでせう。其場合には冒されたものが、屏息し得る様に、冒す方に偉大な特色がなければならぬ
のであります。此點に於ては、先に例證したオセロが一番辯護し易い様に思はれます。ソラとモ
ーパッサンの例に至つては殆んど探偵と同様に下品な氣持がします)

文藝に四種の理想があるのは毎度繰返した通りでありまして、其四種が又色々に分化して行く
事も前に述べた如くであります。此四種の理想は文藝家の理想ではあるが、ある意味から云ふと
一般人間の理想でありますからして、此四面に涉つて尤も高き理想を有して居る文藝家は同時に
人間としても尤も高く且つ尤も廣き理想を有した人であります。人間として尤も廣く且つ高き理
想を有した人で始めて他を感化する事が出来るのでありますから、文藝は單なる技術ではありま
せん。人格のない作家の作物は、卑近なる理想、もしくは、理想なき内容を興ふるのみだからし
て、感化力を及ぼす力も極めて薄弱であります。偉大なる人格を發揮する爲めにある技術を使つ
て之を他の頭上に浴せかけた時、始めて文藝の功果は炳焉として末代迄も輝き渡るのであります。

のであります。畫家の畫、文士の文、は皆此答案であります。文藝家は世間から此問題を呈出されるからして、色々の方便によつて各自が解釋した答案を呈出者に與へてやるに過ぎないのであります。答案が有力である爲には明瞭でなければならん、折角の名答も不明瞭であるならば、相互の意志が疏通せぬ様な不都合に陥ります。所謂技巧と稱するものは、此答案を明瞭にする爲めに文藝の士が利用する道具であります。道具は固より本體ではない。

そこで諸君はわかつたと云はれるかも知れぬ。又はわからぬと云はれるかも知れぬ。分つた方はそれでよろしいが、分らぬ方には少々説明をしなければなりません。只今技巧は道具だと申しました。さう一概に云ふと明瞭な様であるが退いて考へると中々わかり悪い。技巧とは何だと聽かれた時に、大抵困ります。普通は思想をあらはす、手段だと云ひますが、其手段によつて發表される思想だからして、思想を離れて、手段文を考へる譯には行かず、又手段を離れて思想文を拜見する譯には無論行きません。夫で段々論じ詰めて行くと、どこ迄が手段で、どこからが思想だか甚だ曖昧になります。丁度此白墨に即いて云ふと、白い色と白墨の形とを切離す様なもので此格段な白墨を目安にして論ずると白い色をとれば形はなくなつて仕舞ひますし、又此形をとれば白い色も消えて仕舞ひます。兩つのもは二にして一、一にして二と云つても然るべきものであります。そこで哲理的に論ずると中々面倒ですから、分り易い爲めに實例で説明しやうと思ひ

ます。先達て大學で講義の時に引用した例がありますから、一寸それで用を辨じて置きます。茲に二つの文章があります。最初のは沙翁の句で、次のはデ、フオーと云ふ男の句であります。之を比較すると技巧と内容の區別が自ら判然するだらうと思ひます。

Uneasy lies the head that wears a crown.

Kings frequently lamented the miserable consequences of being born to great things, and wished they had been in the middle of the two extremes, between the mean and the great.

大體の意味は説明する必要もない迄に明瞭であります。即ち冠を戴く頭は安きひまなしと云ふのが沙翁の句で、高貴の身に生れたる不幸を悲しんで、兩極の中、上下の間に世を送りたく思ふは帝王の習ひなりと云ふのがデ、フオーの句であります。無論前者は韻語の一行で、後者は長い散文小説中の一句であるから、前後に關係して云ふと、種々な議論も出來ますが、此二句文を獨立させて評して見ると、其技巧の點に於て大變な差違があります。それはあとから説明するとして、二句の内容は、二句共に大同小異である事は、誰も疑はぬ程に明かでありませう。だから思想から見ると雙方共に同様と見ても差支ないと思ひます。思想が同様であるにも關はらず、此二句を讀んで得る感じには大變な違があります。私は先達て中デ、フオーの作物を批評する必要があ

uneasy な状態は長い時間を切つて断面的に之を想像の鏡に寫す事も出来やうが、心の場合即ち心配とか、氣が、りと云ふ様なものは、さう云ふ風に印象を構成する譯には行かんだらうと。私は其攻撃に對しては、かう答へる。——さう云ふ uneasy な状態はあるに相違ない。ないが、こゝにはそんな事を考へる必要はない。よし帝王の uneasiness が精神的であつても、さう考へる必要はない。必要はないと云ふよりもそんな餘裕はない。uneasy の下に lies 即ち横はるとある。lies と云ふと有形的な物體に適用せらるゝ文字である。だから uneasy と讀んで、どちらの uneasy かと迷ふ間もなく、直 lies と云ふ字に接続するからして uneasy の意味は明確になつてくる。すると又かう非難する人が出るかも知れぬ。——lies にも兩様がある。有形物に就て云ふ事は無論であるが無形物に就ても能く使ふ字である。だから uneasy lies では君の云ふ様に判然たる印象は起つて來ないと。此非難に對する私の辯解はかうであります。uneasy lies では印象が起らぬと云ふなら第三字目の head と云ふ字を讀んで見るがよからう。head は具體的のものである。よし head 迄も比喩的な意味に解せられるとしても uneasy lies the head と續けて讀んで、しかも此 head を抽象的な能力とか知力とか解釋する者はあるまい。誰でも具體的の髪の生えた頭と解釋するであらう。head を具體的と解する以上は lies も無論有形物の lies する有様に相違ない。して見ると uneasy も亦形態に關係のない目に見えぬ意味とは取りにくい。

つて、其作物を讀直すときに偶然此句に出合ひまして、不圖沙翁のヘンリー四世中の語を思ひ出して、其内容の同じきにも關らず、其感じに大變な相違のあるに驚きました。何故こんな相違があるかに至つては解剖して見る迄は判然と自分にもわからなかつたのであります。そこで是から御話しをするのは私の當時の感じを解剖した所でありませぬ。

沙翁の方から述べますと——彼の句は帝王が年中（十年でもよい、二十年でもよい。苟も彼が位にある間丈）の身心状態を、長い時間に通ずる言語であらはずなさいで、之を一刻につゞめて示して居る。そこが一つの手際であります。其意味をもつと詳しく説明するとかうなります。III. easy (不安) と云ふ語は漠然たる心の状態をあらはず様であるが實は非常に鋭敏なよく利く言葉であります。例へば椅子の足の折れかゝつたのに腰を掛けて uneasy であるとか、ゾボン釣りを忘れた爲めゾボンが擦り落ちさうで uneasy であるとか、凡て落ち付かぬ様子であります。勿論落ち付かぬ様子と云ふのは、ある時間の経過を含む状態には相違ないが、長時間の経過を待たないで、すぐ眼に映る状態であります。だから此 uneasy と云ふ語は、長い間持続する状態でも、之を一刻もしくは一分に縮めて畫の様に咄嗟の際に頭腦の裏に描き出し得る状態であります。

ある人はかう云つて、私の説を攻撃するかも知れぬ。——成程君の云ふ様な uneasy な状態もあるかも知れない。然しそれは身體の uneasy な場合で心の uneasy な場合ではない。身體の

眼鏡で物を見る様に、其物は獨立して存在して居るが他の物と獨立してゐる事丈が明瞭で、其物の内容は朦朧として居つたのであります。所が *uneasy lies the head that wears a crown* と云はれたので焼點が急に極つた様な心持があるのであります。帝王と云へば個人として帝王の全部を想像せねばならん、全部を想像すると勢いばぼんやりする。ぼんやりしない爲に、局部を想像しやうとすると、局部が澤山あるので、どこを想像してよいか分りません。そこで沙翁は多くある局部のうちで、こゝを想像するのが一番いゝと教へて呉れたのであります。其教へて呉れたのは、帝王の足でもない、手でもない。乃至は脊骨せきこつでもない。もしくは帝王の腹の中でもない。彼が指さして、あそこ丈を注意して御覽、*HERE* がよく見えると教へてくれた所は、燦爛たる冠を戴く彼の頭であります。此注意をうけた吾々は今迄全局に眼をちらつかせて要領を得んに苦しんでゐたのに、かく注意を受けたから、試みに其方へ視線をむけると、成程 *HERE* が見えたのであります。明瞭なのは局部に過ぎぬけれども、此局部が *king* を代表して然るべき精髓であるからして、こゝが明瞭に見えれば全體を明瞭に見たと同じ事になる。取も直さず物を見るべき要點を沙翁が我々に教へてくれたのであります。此要點は全體を明かにするに於て功力があるのみならず、要點以外に氣を散らす必要がなく、不要の部分を悉く切り棄てる事も出来るからして、讀者から云へば注意力の經濟になる。此要點を空間に配して云ふと、沙翁は *HERE* と云ふ大きなものを縮

しかも其 *uneasy* な有様はいつまで続くか無論わからないが、よし長時間続く状態にしても、苟も續いてゐる間は、何時いつでも目に見える状態である。いつでも見える状態であるからして、其いづれの一瞬間を截ち切つても其断面は長い全部を代表する事が出来る、語を換へて云へば、二十年の状態を一瞬間の間につゞめたもの、煮詰めたもの、煎じ詰めたものを腦裏に呼び起すことが出来る。そこで此煮詰めた所、煎じ詰めた所が沙翁の詩的な所で、讀者に電光の機鋒をちらつと見せる所かと思ひます。是は時間の上の話であります。長い時間の状態を一時に示す詩的な作用であります。

所で沙翁には今一つの特色があります。上述のが時間的なるに對して是は空間的と云うてもよからうと思ひます。即ちかう云ふ解剖なのです。帝王と云ふ字は具體の名詞か抽象の名詞かと問へば、誰も具體と答へるだらうと思ひます。成程具體名詞に相違ないです。けれども只具體的だと承知する許りで、明瞭な印象は比較的出にくいのです。帝王の畫を眼前でかいて見ると云はれても、すぐと圖案は拵しらへられんだらうと思ひます。私共の腦中には此帝王と云ふものが頗る漠然として纏らない圖になつて疊み込まれて居ます。所へ *the head that wears a crown* と云はれると、帝王と云ふ觀念が急に判然とします。なぜかと云ふと、今迄は具體であると云ふ事丈が解つて居たけれど、局部の知識は頗る曖昧で取とめがつかなくかつたのであります。恰も度の合はぬ

是は決して悪口ではありません、御拾ひも時々結構であります。只年が年中足を揺木ユキにして、火事見舞に行くんでも、葬式の供に立つんでも同じ心得で、てく／＼やつて居るのは、本人の勝手だと云へば云ふ様なものゝ、あまり器量のない話であります。デ、フォーは甚だ達筆で生涯に三百何部と云ふ書物をかきました。まあ車夫の様な文章家なのです。

是で二家の文章の批評は了ります。此批評によつて、我々の得た結論は何であるかと云ふと、文藝に在つて技巧は大切なものであると云ふ事でありませぬ。もし技巧がなければ折角の思想も、氣の毒な事に、左程な利目が出て来ない。沙翁とデ、フォーは同じ思想をあらはしたのであります。其結果は以上の如く、大變な相違を來します。思想が同じのには是程な相違が出るのは全く技巧の爲めだと結論します。近頃日本の文學者のある人々は技巧は無用だとしきりに主張するさうですが、未だ明瞭なる御考へを承つた事がないから、何とも申されませんが、以上の説明によつて、文藝家である以上は、技巧はどうしても捨てる譯には、參るまいと信じます。さうして以上の説明は決して論理其他の誤謬を含んで居らんと信じます。有名な人の作曲さへやれば、どんな下手が奏しても構はないと云ふ御主意ならば文章も技巧は無用かも知れませんが、私にはさうは思はれません。さうして技巧を無用視せらるゝ方かたのうちには人生に觸れなくては駄目だ、技巧はどうでもよい、人生に觸れるのが目的だと言はれる人が大分ある様ですが、是も未だ明瞭な

めて、單なる「冠を戴く頭」に變化さして呉れたのであります。かくして六尺の人は一尺に足らぬ頭と煎じ詰められたのであります。

して見ると沙翁の句は一方に於て時間を煎じ詰め、一方では空間を煎じつめて、さうして鮮かに長時間と廣空間とを見せて居ります。恰も肉眼で遠景を見ると漠然として居るが、一たび雙眼鏡をかけると大きな老大なものが奇麗に縮まつて眸裡に印する様なものであります。さうして此雙眼鏡の度を合はして呉れるのが即ち沙翁なのであります。是が沙翁の句を讀んで詩的だと感ずる所以であります。

所がデ、フォーの文章を讀んで見ると丸で違つて居ります。此男のかき方は長いものは長いなり、短いものは短いなりに書き放して毫も煎じ詰めた所がありません。遠景を見るのに肉眼で見えて居ます。度を合せぬのみか、雙眼鏡を用ひやうともしませぬ。まあ智慧のない紋方と云つてよいでせう。或は心配して讀者の便宜をはかつて呉れぬ書き方、呑氣もしくは不親切な書き方と云つても悪くはありません。もしくは伸縮方を解せぬ、弾力性のない文章と評しても構はないでせう。汽車電車は無論人力さへ工夫する手段を知らないで、どこ迄も親譲りの二本足でのそ／＼歩いて行く文章であります。従つて散文的の感があるのです。散文的な文章とは馬へも乗れず、車へも乗れず、何等の才覺がなくつて、只地道ちかみちに御拾ひで御出になる文章を云ふのであります。

うして諸君に御目にかゝる機會も滅多にありません、且文藝全體に通じての議論ですから、大膽な所を述べて仕舞ひます。——あなたの方では人間を御かきになるときはモデルを御使ひになります、草や木を御かきになるときは野外もしくは室内で寫生をなさいます。是はまことに結構な事で、我々文學者が四疊半のなかで、夢の様な不都合な人物、景色、事件を想像して好加減な事を並べて平氣で居るよりも遙に熱心な御研究であります。其效能は固より御承知の事で、私杯が彼是申すのも釋迦に何とか云ふ類になります、先講話の順序として分らぬ乍ら、分つたと思ふ事を述べます。かう云ふ修業で得る點は私の考へでは先づ二通りになるだらうと思ひます。一つは物の大小形狀及び其色合杯について知覺が明瞭になりますのと、此明瞭になつたものを、精細に寫し出す事が巧者に且つ迅速に出来る事だと信じます。二は之を描き出すに當つて使用する線及び點が、描き出される物の形狀や色合とは比較的獨立して、それ自身に於て、一種の手際を帯びて來る事でありませぬ。此第二の技術は技術であり且つ理想をもあらはして居るからして純然たる技巧と見る譯には参りませぬ。現に日本在來の繪畫は重に此技巧丈で價値を保つたものであります。それにも關はらず、之に對して鑑賞の眼を恣にする、それ／＼に一種の理想をあらはして居る、即ち畫家の人格を示して居る、爲めに大なる感興を引く事が多いのであります。たとへば一線の引き方でも、(其一線丈では畫は成立せぬにも關はらず)勢ひがあつて畫家の意志に

説明を承つた事がないから何の意味だか了解出来ませんが、此言葉を承はる度に何だか妙な心持がします。只觸れる／＼と仰があつても、觸れる見當がつかなければ、作家は途方に暮れます。無暗に人生だ／＼と騒いでも、何が人生だか御説明にならん以上は、火の見えないのに半鐘を擦る様なもので、一寸景氣はいゝ様だが、どいた／＼と驅けて行く連中は、あとから大に迷惑致すだらうと察せられます。人生に觸れると御注文が出る前に、人生とはこんなもの、觸れるとはあんなもの、凡てのあんな、こんなを明瞭にして置いて僭斯様な譯だから技巧は無用ぢやないかと仰せられたなら、其時始めて御相手を致しても遅くはなからうと思つて、それ迄は差し控へる事に致して居ります。もし私の方で申す人生に觸れると云ふ意味が御承知になりたければ今ぢきに明瞭なる御答へを仕つてもよろしいが、序もある事だから、次の節迄待つて戴きませう。御待遠だといかぬから、すぐ様次の節に移つて辯じます。文學者の一部分で、しきりに觸れる觸れろと云ひ、技巧は無用だ／＼と云つて居るに反して、畫家の方では——畫家は我々の様に騒騒しくない、大人しく勉強して居られるから、無暗に三つ番は敲かれぬ様であるが——然し其實行して居られる所を拜見すると、觸れるの觸れぬのと云ふ事は頓着なく只熱心に技術を研いて居られる様に見受けまます。申す迄もなく私は極めて畫道には暗い人間であります。だから畫の事に關して嘴を容れる權利は無論ないので、門外漢の云ふ事も時には御参考になるだらうし、か

ば、存在の意義が薄くなる譯であります。此理想を感覺的にする方便として始めて技巧の價値が出てくるものと存じます。此理想のない技巧家を稱して、所謂市氣匠氣のある藝術家と云ふのだらうと考へます。市氣匠氣のある繪畫が何故下品かと云ふと、其畫面に何等の理想があらはれて居らんからである。或はあらはれて居ても淺薄で、狭小で、卑俗で、毫も人生に觸れて居らんからであります。

私は近頃流行する言語を拜借して、人生に觸れて居らんと申しました。私の所謂人生に觸れると申す意味は、前段からの議論で大概は御分りになつたらうとは思ひますが、御約束だから形式的に説明致しますと、比較的簡單で明瞭であります。少くとも私丈にはさう思はれます。我々は意識の連續を希望します。連續の方法と意識の内容の變化とが吾人に選擇の範圍を與へます。此範圍が理想を與へます。さうして此理想を實現するのを、人生に觸れると申します。是以外に人生に觸れたくても觸れられやう譯がありません。さうして此理想は眞、美、善、壯の四種に分れますからして、此四種の理想を實現し得る人は、同等の程度に人生に觸れた人であります。眞の理想をあらはし得る人は、美の理想をあらはし得る人と、同様の權利と重みとを以て、人生に觸れるのであります。善の理想を示し得る人は壯の理想を示し得る人と、同様の權利と重みを以て、人生に觸れたものであります。何れの理想をあらはしても、同じく人生に觸れるのであります。

對する理想を示す事も出來ますし、曲り具合が美に對する理想をあらはす事も出來ますし、又は明瞭で太い細い的關係が明かで知的な意味も含んで居りませうし、或は婉約の情、濃厚な感を著へる事もありませう。(知、情の理想が比較的顯著でないのは性質上已を得ません) かうなると線と點丈が理想を含む様になります。丁度金石文字や法帖と同じ事で、書を見ると人格がわかる杯と云ふ議論は全く是から出るのであらうと考へられます。だから、この技巧はある程度の修養につれて、理想を含蓄して参ります。然し前種の技巧、即ち物に對する明瞭なる知覺を其儘にあらはす手際は、全然理想と没交渉と云ふ譯には参りませんが、比較的之とは獨立したものであります。之をわかり易く申しますと、物をかいて、現物の様に出來上つても、知、情、意、の働きのあらはれて居らんのがあります。何だか氣乗りのしないのがあります。どことなく機械的なのがあります。私の技巧と云ふのは、此種の技巧を云ふのであります。私の非難したいのは、此種の技巧丈で畫工にならうと云ふ希望を抱く人々であります。無論諸君は、畫工になるには此種の技巧丈で充分だと御考へになつては居られませう。然し技巧を重にして研究を重ねて行かれるうちには、時によると知らぬ間に、つい此弊に陥る事がないとは限らんと思ひます。再び前段に立ち歸つて根本的に申しますと、前に述べた通り、文藝は感覺的な或物を通じて、ある理想をあらはすものであります。だからして其第一義を云へばある理想が感覺的にあらはれて來なければ

其一つ丈が觸れて、他は觸れぬものと斷言するのは、論理的にかく證明し來つた所で、成立せぬ出放題の廣言であります。眞は深くもなり、廣くもなり得る理想であります。然しながら、眞が獨り人生に觸れて、他の理想は觸れぬとは、眞以外に世界に道路がある事を認め得ぬ色盲者の云ふ事であります。東西南北悉く道路で、悉く通行すべき筈で、大切と云へば悉く大切であります。

四種の理想は分化を受けます。分化を受けるに従つて變形を生じます。變形を生じつゝ進歩する機會を早めます。此變形のうち、尤も新しい理想を實現する人を人生に於て新意義を認めたと云ひます。變形のうち尤も深き理想を實現する人を、深刻に人生に觸れた人と申します。(云ふ迄もなく深刻とは眞、善、美、壯の四面にわたつて申すべき形容詞であります。悲惨だから深刻だとか、暗黒だから深刻だとか云ふのは無意味の言語であります)變形のうち尤も廣き理想を實現する人を、廣く人生に觸れた人と申します。此三つを兼ねて、完全なる技巧によりて之を實現する人を、理想的文藝家、即ち文藝の聖人と云ふのであります。文藝の聖人は只の聖人で、之に技巧を加へるときに、始めて文藝の聖人となるのであります。聖人の理想と申して別段の事もありません。たゞ如何にして生存すべきかの問題を解釋する迄であります。

發達した理想と、完全な技巧と合した時に、文藝は極致に達します。(それだから、文藝の極

致は、時代によつて推移するものと解釋するのが、尤も論理的なのであります(文藝が極致に達したときに、之に接するものはもし之に接し得る丈の機縁が熟して居れば、還元的感化を受けます。此還元的感化は文藝が吾人に與へ得る至大至高の感化であります。機縁が熟すと云ふ意味は、此極致文藝のうちにはれたる理想と、自己の理想とが契合する場合か、もしくは之に引つけられたる自己の理想が、新しき點に於て、深き點に於て、もしくは廣き點に於て、啓發を受くる刹那に大悟する場合を云ふのであります。縁なき衆生は度し難しとは單に佛法のみで言ふ事ではありません。段違ひの理想を有して居るものは、感化してやり度くても、感化を受けたくても到底どうする事も出来ません。

還元的感化と云ふ字が少々妙だから、御分りにならんかと思ひます。之を説明すると、かう云ふ意味になります。文藝家は今申す通り自己の修養し得た理想を言語とか色彩とかの方便であらはずので、其現はされる理想は、ある種の意識が、ある種の連續をなすのを、其儘に寫し出したものに過ぎません。だから之に對して享樂の境に達すると云ふ意味は、文藝家のあらはした意識の連續に隨伴すると云ふ事になります。だから我々の意識の連續が、文藝家の意識の連續とある程度一致しなければ、享樂と云ふ事は行はれる筈がありません。所謂還元的感化とは此一致の程度に於て始めて起る現象であります。

一致の意味は固より明瞭で、此一致した意識の連続が我々の心のうちに浸み込んで、作物を離れたる後迄も痕迹を残すのが所謂感化であります。すると説明すべきものは唯還元の二字になります。然し此二字も亦一致と云ふ字面のうちに含まれて居ります。一致と云ふと私の意識と彼の意識があつて、此二つのものが合して一となると云ふ意味であります。それは一致せぬ前に言ふべき事で、既に一致した以上は一もなく二もない譯でありますからして、此境界に入れば既に普通の人間の状態を離れて、物我の上に超越して居ります。所が此物我の境を超越すると云ふ事は、此講演の出立地であつて、またあらゆる思索の根據本源になります。従つて文藝の作物に對して、我を忘れ彼を忘れ、無意識に（反省的でなくと云ふ意なり）享樂をほしむにまかする間は、時間も空間もなく、唯意識の連続があるのみであります。尤もこゝに時間も空間もないと云ふのは作物中にないと云ふのではない、自己が作物に對する時間、又自己が占めて居る空間がないと云ふ意味であつて、讀んで何時間かゝるか、又讀んで居る場所は書齋の裡か郊外か亭中かを忘れると云ふのと同じ事でありませぬ。普通の場合に於て此を忘れる事が出来んのは、ある間は作者の意識の連続と一致し、あるときは之を離れるから、我は依然として我、彼は依然として彼なのであります。一致して居る際に蚤に食はれて急に我に歸り、時計が鳴つて俄に我に歸ると云ふ様であるから、間髪を容れざる完全の一致より生ずる享樂を擅たにする事が出来るのであります。かくの如く自己の意識と作家の意識が離れたり合つたりする間は、讀書でも觀畫でも、純一無雜と云ふ境遇に達する事は出来ませぬ。之を俗に邪魔が這入るとも、油を賣るとも、散漫になるとも云ひます。人によると、生涯に一度も無我の境界に點頭し、恍惚の域に逍遙する事のないものがあります。俗に之を物に役せられる男と云ひます。斯様な男が、何かの因縁で、急に此還元的一致を得ると、非常な醜男子が絶世の美人に惚れられた様に喜びます。

「意識の連続」のうちで比較的連続と云ふ事を主にして理想があらはれてくると、重に文學が出来ます。比較的意識そのものゝ内容を主にして理想があらはれて来ると繪畫が成立します。だからして前者の理想はおもに意識の推移する有様であらはれて来ます。従つて此推移法が理想的に行く作物は、讀者をして還元的感化をうけ易くします。之を動の還元的感化と云ひます。夫から後者の理想はおもに意識の停留する有様であらはれて来ます。だから停留法がうまく行くと、即ち意識が停留したい所を見計つて、其利那を捕へると、觀者をして還元的感化をうけ易くします。之を靜の還元的感化と云ひます。然しながら是は重なる傾向から文學と繪畫を分つた迄で、其實は截然とかう云ふ區別は出来ないのであります。しばらく此二要素を文學の方へかためて申しますと、推移の法則は文學の力學として論すべき問題で、逗留の状態は文學の材料として考へるべき條項であります。雙方とも批評學の發達せぬ今日は誰も手を着けて居りませんから、研究の

一致の意味は固より明瞭で、此一致した意識の連続が我々の心のうちに浸み込んで、作物を離れたる後迄も痕迹を残すのが所謂感化であります。すると説明すべきものは唯還元の二字になります。然し此二字も亦一致と云ふ字面のうちに含まれて居ります。一致と云ふと私の意識と彼の意識があつて、此二つのものが合して一となると云ふ意味であります。それは一致せぬ前に言ふべき事で、既に一致した以上は一もなく二もない譯でありますからして、此境界に入れば既に普通の人間の状態を離れて、物我の上に超越して居ります。所が此物我の境を超越すると云ふ事は、此講演の出立地であつて、またあらゆる思索の根據本源になります。従つて文藝の作物に對して、我を忘れ彼を忘れ、無意識に（反省的でなくと云ふ意なり）享樂をほしむにまかする間は、時間も空間もなく、唯意識の連続があるのみであります。尤もこゝに時間も空間もないと云ふのは作物中にないと云ふのではない、自己が作物に對する時間、又自己が占めて居る空間がないと云ふ意味であつて、讀んで何時間かゝるか、又讀んで居る場所は書齋の裡か郊外か亭中かを忘れると云ふのと同じ事でありませぬ。普通の場合に於て此を忘れる事が出来んのは、ある間は作者の意識の連続と一致し、あるときは之を離れるから、我は依然として我、彼は依然として彼なのであります。一致して居る際に蚤に食はれて急に我に歸り、時計が鳴つて俄に我に歸ると云ふ様であるから、間髪を容れざる完全の一致より生ずる享樂を擅たにする事が出来るのであります。かくの如

號して、何か入らざる事でもして居るものゝ様に考へて居ます。實を云ふと藝術家よりも文學家よりも入らぬ事をして居る人間はいくらでもあるのです。朝から晩迄車を飛ばせて馳け廻つて居る連中のうちで、文學者や藝術家よりも入らざる事をして居る連中がいくらあるか知れませんが、自分丈が國家有用の材だ杯と己惚れて急がしげに生存上十人前位の權利があるかの如く振舞つても到底駄目なのです。彼等の有用とか無用とか云ふ意味は極めて幼稚な意味で云ふのですから駄目でありませぬ。怒るなら、怒つてもよろしい、いくら怒つても駄目でありませぬ。怒るのは理窟が分らんから怒るのです。怒るよりも頭を下げて其譯でも聞きに來たらよからうと思ひます。恐れ入つて聞きにすればいつでも教へてやつてよろしい。——私杯も學校をやめて、縁側にころ／＼晝寐をして居ると云つて、友達がみんな笑ひます。——笑ふのぢやない、實は羨ましいのかも知れませぬ。——成る程晝寐は致します。晝寐ばかりではない、朝寐も宵寐も致します。然し寐ながらにして、えらい理想でも實現する方法を考へたら、二六時中車を飛ばして電車と競争して居る國家有用の才よりえらいかも知れない。私は只寐てゐるのではない、えらい事を考へやうと思つて寐て居るのである。不幸にしてまだ考へ付かない丈である。中々以て閑人ではない。諸君も閑人ではない。閑人と思ふのは、思ふ方が閑人である、でなければ愚人である。文藝家は閑人が必要かも知れませんが、閑人ぢやありません。ひま人と云ふのは世の中に貢獻する事の出來ない人

餘地は幾らでもあります。私は自分の文學論のうちに、不完全ながら自分の考へ丈は述べて置きましたから、御參考を願ひます。固より新たに開拓する領土の事でありませぬから、御參考になる程には出來て居りませぬ。けれども、あの議論の上へ／＼と是からの人が、新知識を積んで行つて、私の疎漏な所を補ひ、誤謬のある所を正して下さつたならば、批評學が學問として未來に成立せんとは限らんだらうと思ひます。私はある事情から重に創作の方をやる考へてありますから、向後此方面に向つて、どの位の貢獻が出来るか知れませんが、もし篤實な學者があつて、銳意にそちらを開拓して行かれたならば、學界は此人の爲めに大いなる利益を享けるに相違なからうと確信して居ります。

最後に一言を加へます。我々は生きたい／＼と云ふ下司な念を本來持つて居ります。此下司な了見からして、物我の區別を立てます。さうして如何なる意識の連續を得んかと云ふ選擇の念を生じ、此選擇の範圍が廣まるに従つて一種の理想を生じ、其理想が分岐して、哲學者（又は科學者）となり、文藝家となり實行家となり、其文藝家が又四種の理想を作り、且つ之を分岐せしめて、各自に各自の欲する意識の連續を實現しつゝあるのであります。要するに皆如何にして存在せんかの生活問題から割り出したものに過ぎませぬ。だからして何をやらうと決して實際的の利害を外れたことは一つもないのであります。世の中では藝術家とか文學家とか云ふものを閑人と

を云ふのです。如何に生きて然るべきかの解釋を與へて、平民に生存の意義を教へる事の出来な
い人を云ふのです。かう云ふ人は肩で呼吸いそをして働いて居たつて閑人です、文藝家はいくら縁側
に晝寐をして居たつて閑人ぢやない。文藝家のひままとのらくら華族や、づぼら金持のひままと一所
にされちや大變だ。だから藝術家が自分を閑人と考へる様ぢや、自分で自分の天職を抛つ様なも
ので、御天道様に濟まない事になります。藝術家はどこ迄も閑人ぢやないと極めなくつちやいけ
ない。いくら縁側に晝寐をしても閑人ぢやないと極めなくつちやいけ
ない。然し是丈大膽にひま
人ぢやないと主張する爲めには、主張する丈の確信がなければなりません。言葉を換へて云ふと
如何にして活きべきかの問題を解釋して、誰が何と云つても、自分の理想の方が、ずっと高いか
ら、ちつとも動かない、驚かない、何だ人生の意義も理想もわからぬ癖に、生意氣を云ふなと超
然と構へる丈に腹が出来てゐなければなりません。是丈に出来て居なければ、いくら技巧があつ
ても、書いたものに品位がない。ない筈である。かう書いたら笑はれるだらう、あゝ云つたら叱
られるだらうと、びく／＼して筆を執るから、あの男は腹の中がかたまつて居らん、理想が生養なまにや
だ、と云ふ弱點が書物の上に見え透く様に寫つて居る、従つて如何にも意氣地いけぢがない。いくら技
巧があつたつて、是ぢや人を引きつけることも出来ん、況んや感化をやであります。又況んや還
元的感化をやであります。こんな文藝家を稱して閑人と云ふのであります。正木君の云はれた市

氣匠氣と云ふのは、かゝる閑人の文藝家に着いて廻るのであります。要するに我々に必要なのは
理想である。理想は文に存するものでもない、繪に存するものでもない、理想を有して居る人間
に着いて居るものである。だからして技巧の力を藉りて理想を實現するのは人格の一部を實現す
るのである。人格にない事を、只句を綴り章を繋いで、上滑りのする様にかきこなしたつて閑人
に過ぎません。俗に之を柄がらにないと申します。柄がらにない事は、やつても閑人でやらなくても閑人
だから、やらない方が手数が省ける丈得になります。只新しい理想か、深い理想か、廣い理想が
あつて、之を世の中に實現しやうと思つても、世の中が馬鹿で之を實現させない時に、技巧は始
めて此人の爲め至大な用をなすのであります。一般の世が自分が實世界に於ける發展を妨げる時、
自分の理想は技巧を通じて文藝上の作物としてあらはるゝ外に路がないのであります。さうして
百人に一人でも、千人に一人でも、此作物に對して、ある程度以上に意識の連続に於て一致する
ならば、一步進んで全然其作物の奥より閃めき出づる眞と善と美と壯に合して、未來の生活上に
消え難き痕跡を残すならば、猶進んで還元的感化の妙境に達し得るならば、文藝家の精神氣魄は
無形の傳染により、社會の大意識に影響するが故に、永久の生命を人類内面の歴史中に得て、茲
に自己の使命を完うしたるものであります。

作家の態度

——明治四十一年二月東京青年會館に於て述——

演題は「作家の態度」と云ふのであります。態度と云ふのは心の持ち方、物の觀方位に解釋して置いて下されば宜しい。此、心の持ち方、物の觀方で十人、十色様々の世界が出来又様々の世界觀が成り立つのは申す迄もない。一例を上げて申すと、もし諸君が私に向つて月の形はどんなだと聞かれれば、私はすぐに丸いと答へる。諸君も定めし御異存はなからうと思ふ。所が此間ある西洋人の書いたものを見たら、我々は普通月を半圓形のものとして居るとあつたのみか、何故眞丸なものと思つてゐぬかと云ふ譯迄が二三行つけ加へてあつたんで、少し驚いた位であります。我々は教育の結果、習慣の結果、ある眼識で外界を觀、ある態度で世相を眺め、さうして夫が眞の外界で、又眞の世相と思つてゐる。所が何かの拍子で全然種類の違つた人——商人でも、政事家でも或は宗教家でも何でもよろしい。成るべく縁の遠い關係の薄い先生方に逢つて、其人の意見を聞いて見ると驚ろく事があります。夫等の人の世界觀に誤謬があるので驚くと云ふよ

りも、世の中はかうも觀られるものと感心する方の驚ろき方であります。丁度前に述べた我々が月の恰好に對する考への差と同じであります。かう云ふと人間がばら／＼になつて、相互の心に統一がない、極めて不安な心持になります。其代り、誰がどう見ても變らない立場に居つて、申し合せた様に一致した態度に出る事も澤山あるから、さう苦になる程の混雜も起らないのであります。(少なくとも實際上) ジェームスと云ふ人が吾人の意識する所の現象は皆撰擇を経たものだと思ふ事を論じてゐるうちに、こんな例を擧げてゐます。——撰擇の議論は兎に角、其例が此所の説明には尤も適切だと思ひますから、一寸借用して辯じます。今こゝに四角があるとすると此四角を見る立場は色々である。横からも、堅からも、筋違からも、眼の位置と、角度を少し變へれば千差萬別に見る事が出来る。さうして其度々に四角の恰好が違ふ。けれども我々が四角に對する考は申し合せた様に一致して居る。あらゆる見方、あらゆる恰好のうちで、たつた一つ。——即ち吾人の視線が四角形の面に直角に落ちる時に映じた形を正當な四角形だと心得てゐる。是を私の都合の好い様に言ひ換へると、吾人は四角形を觀る態度に於て悉く一致して居るのであります。又別の例を申しますと彫刻杯で云ふ foreshortening と云ふ事があります。誰でも心得て居る事ではありますが、人が手でも足でも前の方に出してゐる姿勢を、こちらから眺めると、實際の手や足よりも短かく見えます。けれども本來はあれより長いものだと思つて見てゐま

す。だから畫心のない吾々が手や足を描かうとすると本來其儘の足や手を、方向の如何に拘はらず、紙の上にははしたくなる。あらはして見るとどうも釣合がわるい。悪いけれども腹が承知をしないで妙な矛盾を感じる。小供のかいた畫を見ると此心持ちが思ひ切つて正直に出てゐます。是も此際都合のいゝ様に翻譯して云ひますと、吾々が手や足の長さに對する態度はちやんと申し合せた様に一致して居ると云ふ事になります。

して見ると世界は觀様で色々に見られる。極端に云へば人々個々別々の世界を持つてゐると云つても差支ない。同時に其世界のある部分には誰が見ても一樣である。始めから相談して、かう見やうちやありませんかと、規約の束縛を冥々のうちに受けてゐる。そこで人間の頭が複雑になればなる程、觀察される事物も複雑になつて来る。複雑になるのではないが、單純なものを複雑な頭で色々に見るから、つまりは物自身が複雑に變化すると同様の結果に陥るのであります。是を前の言葉に戻して云ふと、世が進むに従つて、複雑な世界と複雑な世界觀が出来て、さうして一方では此複雑なものが統一される區域も擴がつて来るのであります。

そこで作家も一種の人間でありますから各々勝手な世界觀を持つて、勝手な世界を眺めてゐるに違ない。然しながら既に作家と云ふ名を受けて、官吏とか商人とか、法律家とかから區別される以上は、此名稱は單に鈴木とか、山田とか云ふ空名と見る譯には行かない。内實に於てそ

れ相當の特性があつて他の職業と區別されて居るのかも知れない。だから、此人々の立場を研究して見たらば、多少の御参考になりはすまいかと思つて此演題を掲げた譯であります。

そこで、此問題を研究する方法に就て述べますと、第一には歴史的研究があります。是は作家の世界觀の纏つてあらはれた著作其物を比較して、其特性を綜合した上で、之に一種の名稱（自然派とか浪漫派とか）を與へて、夫から年代を追つて其發展を述付けるのであります。所謂文學史であります。此間中からして、日本で大分自然派の論が盛になりまして色々の雑誌に其説明杯が澤山出て、私杯も大分利益を受けました。我々日本人が佛蘭西の自然派はかう發達したの、獨乙の自然派は今こんな具合だのと云ふ事を承知したのは、全く此歴史的研究の御蔭で至極結構な事と思ひます。

唯此種の研究に就て私の飽き足りない所を云ふと、或は下の様な弊がありはすまいかと思はれます。

(一) 歴史の研究によつて、自家を律せんとすると、相當の根據を見出す前に、現在即ち新と云ふ事と、價值と云ふ事を同一視する傾が生じ易くはないかと思はれます。凡ての心的現象は過程であるからして、Bと云ふ現象は、Aと云ふ現象に次いで起るのは勿論であります。従つてBの價值はBの性質のみによつて定まらない、Bの前に起つたAと云ふ現象の爲めに支配せられて居

だらうと思ひます。が是が因果であつて見れば致し方がない。唯氣をつけて然るべき事は、自分の心的状態がまだそんな廻り合せにならないのに、人の因果を身に引き受けて、やきもき焦るのは、多少他の疝氣を頭痛に病むの傾きがある様に思ひます。所が歴史的研究文を根本義として自己の立脚地を定めやうとすると、わるくすると此弊に陥り安い様であります。と云ふものは現に研究してゐる事が自分の歴史なら善からうが人の歴史である。人は夫々勝手な因を蒔いて果を得て、現在を標準として得意である。夫を遠くから研究して、彼の現在が、かうだから自分の現在もさうしなければならぬとなつて、少し無理が出来ます。自己の傾向がそこへ向いてゐないのに、向いて居ると同様の仕事をしなければならなくなる。云はゞ御付合になる。酷評を加へると自分から出た行爲動作もしくは立場でなくつて、模倣になる。物真似に歸着する。もとより我々は物真似が好きに出来上つてゐるから、しても構はない。時と場合によると物真似をする方が其間の手數と手續と、煩瑣な過程を抜きにして、すぐさま結局文を應用する事が出来るから非常に調法で便利であります。現に電信、電話、汽車、汽船を始めとして、凡そ我國に行はれる所謂文明の利器といふものは悉く物真似から出来上つたものであります。至極よろしい。人に餅を搗かして、自分が寐ながらにして之を平げるの觀があつて、頗る痛快であります。が此現象をすぐ應用して、文學杯にも持つて行ける、又持つて行かなければならぬと結論しては、少し寸法が違

る事も勿論であります。腹が減るといふ現象が心に起ればこそ飯が旨いと云ふ現象が次いで起るので、必ずしも料理が上等だから旨かつたと許りは斷言出来にくいのであります。そこで吾々はAと云ふ現象を心裡に認めると、之に次いで起るべきBに就ては、其性質やら、強度やら、色々な條件について出来得る限りの撰擇をする、又せねばならぬ譯であります。丁度車を引いて坂を下り掛けた様なもので前の一步は後の一步を支配する。後の一步は前の一步の趨勢に應ずる様な調子で出て行かなければ旨く行かない。人間の歴史はかう云ふ連鎖で結び付けられて居るのだから、決して切り放して見ても其價値は分りません。仰山に言ふと一時間の意識は其人の生涯の意識を包含して居ると云つても不條理ではありません。従つて人には現在が一番價値がある様に思はれる。一番意味がある如く感ぜられる。現在が凡ての標準として適當だと信じられる。だから明日になると何だ馬鹿々々しい、どうして、あんな氣になれたかと思ふ事がよくあります。昔し戀をした女を十年立つて考へると、なぜまあ、あれ程逆上られたものかなあと感心するが、當時は其逆上が尤もで、理の當然で、實に自然で、絶対に價値のある事としか思はれなかつたのであります。一國の歴史で申しても、一國內の文學史の歴史で申しても是と同様の因果に束縛されてゐるのは勿論であります。現代の佛蘭西人が革命當時の事を考へたら無茶だと思ふかも知れず。又浪漫派の勝利を奏したエルナニ事件を想像しても、あゝ熱中しないでもよからう位には感ずる

つてる様に思ひます。と云ふものは理學工學其他の科學もしくは其應用は研究の年代を重ねるに従つて、一定の方向に向つて發達するもので、どの國民がやり出して、同程度の頭で同程度の勉強をする以上は一日早くやれば早くやつた方が勝になる様な學問で、しかも一日後れたものは、必ず、一日早く進んだもの、後を（一筋道である）通過しなければならぬ性質のものであります。歩く道が一筋で、さきが進んでゐる以上は、此方の到着點も明らかに分つてゐるんだから、出来る丈早く甲を脱いで降参する方が得策であります。眞似をするに云ふと人間が悪いが骨を折らないで、旨い汁を吸ふ程結構な事はない。此點に於て私は模倣に至極賛成である。然し人間の内部の歴史になると、又其内部の歴史が外面にあらはれた現象になると、さう簡單には行きません。風俗でも習慣でも、情操でも、西洋の歴史にあらはれたもの丈が風俗と習慣と情操であつて、外に風俗も習慣も情操もないとは申されない。又西洋人が自己の歴史で幾多の變遷を経て今日に至つた最後の到着點が必ずしも標準にはならない。（彼等には標準であらうが）ことに文學に在つてはさうは参りません。多くの人は日本の文學を幼稚だと云ひます。情けない事に私もさう思つてゐます。然しながら、自國の文學が幼稚だと自白するのは、今日の西洋文學が標準だと云ふ意味とは違ひます。幼稚なる今日の日本文學が發達すれば必ず現代の露西亞文學にならねばならぬものだとは斷言出来ないと思ひます。又は必ずユーゴーからバルザック、バルザック

からゾラと云ふ順序を経て今日の佛蘭西文學と一樣な性質のものに發展しなければならぬと云ふ理由も認められないのであります。幼稚な文學が發達するのは必ず一本道で、さうして落ち付く先は必ず一點であると云ふ事を理論的に證明しない以上は現代の西洋文學の傾向が、幼稚なる日本文學の傾向とならねばならぬとは速断であります。又此傾向が絶體に正しいとも論結は出来ぬと思ひます。一本道の科學では新即ち正と云ふ事が、ある程度に於て言はれるかも知れませんが、發展の道が入り組んで色々分れる以上は又分れ得る以上は西洋人の新が必ずしも日本人に正しいとは申し様がない。而して其文學が一本道に發達しないものであると云ふ事は、理窟は備置いて、現に當代各國の文學——尤も進歩してゐる文學——を比較して見たら一番よく分るだらうと思ひます。近頃の様に交通機關の備つた時代ですら、露西亞文學は依然として露西亞風で、佛蘭西文學は矢張り佛蘭西流で、獨乙、英吉利も亦それ／＼に獨乙英吉利的な特長があるだらうと思ひます。従つて文學は汽車や電車と違つて、現今の西洋の眞似をしたつて、左程痛快な事はないと思ひます。夫よりも自分の心的状態に相當して、自然と無理をしないで胸中に起つて來る現象を表現する方が却つて、自分のものらしくつて生命があるかも知れません。

尤も日本だつて孤立して生存してゐる國柄ではない。矢つ張り西洋と御付合をして大分ば、臭くなりつゝある際だから、西洋の現代文學を研究して、其歴史的の由來を視て、ははあ西洋人は、

今こんな立場で書いてるな位は心得て置かなくつちやなりません。假令夢中に眞似をするのが悪いと云つても、先方の立場其他を参考にするのは勿論必要であります。文學は前申した様な特色のものではありませんが、其特色の中には一本調子に發達する科學の影響が澤山流れ込んで來ますから、定數として動かすべからざる此要素が、如何に科學の進歩に連れて文學の各局部を冒して居るかを見るのは、科學思想の發達しない日本人が、徒らに自己の傾向ばかり振り廻して居ては、分らないので、さう頭張つてゐては遂には正宗の名刀で速射砲と立合をする様な奇觀を呈出するかも知れません。

して見ると歴史的研究は前の様な弊もあるが、決して閑却すべからざるものでありますから、私の希望を云ふと、歴史を研究するならば其研究の結果として、総合的に現代精神とはこんなもので、此精神がないものは殆んど文學として通用しないものだと言ふ事を指摘して事實の上に證明したのであります。私の現代精神と云ふのは、今月もしくは先月新らしく出來た作物其物に就て、此作物は現代精神をあらはして居る云々と云ふ様な論じ方ではありません。過去一二世紀に渡つて、(もしくはもつと溯つても、よろしい)、人の心を動かした有名な傑作を通覽して其特性(一つでなくてもよろしい。又矛盾併立してゐても差支ない)を見出して行く事であり、さうすると一年や十年の流行以上に比較的永久な創作の要素がざつと明瞭になるだらうと思ひま

す。少なくとも吾々の子若しくは孫時代迄は變らない特性が出てくるだらうと思ひます。もし標準が必要とあるならば、これでこそ多少の標準が出來るとも云ひ得るでせう。かう云ふ手數をして現代精神を極めたからと云つて、夫より以前に出たものには現代精神がないと云ふ譯にはならない。たとへばダンテの神曲に見える様な考を持つてゐる人は今の世には澤山ない。又神曲の眞似をした作物を出さうと云ふ男もありますまい。然しあの神曲のうちから、現代精神を引き出せばいくらでも出て來るに極つてゐる。今の人の心に訴へる箇所は即ち現代精神であります。デカメロン其儘を春陽堂から出版したつて讀み手はないに極つてゐる。然しあの中に現代精神即ち種な點に於て吾人を動かす自然派の様な所はいくらでもあります。ずつと昔に溯つてホームーはどうです。全體から云ふと寧ろ馬鹿氣てゐる。誰もイリアツドが書いて見たいと云ふ人もあるまいが、其イリアツドが矢張り現代の人に讀み得る所、讀んで面白い所、讀んで拍案の概がある所、浪漫的な所、が少なくはなからうと思ふ。かう考へて見ると作物は時代の新舊ばかりで評をするよりも現代精神にリファーして評價すべき事となります。さうして此現代精神は實を云ふと、讀者がめい／＼胸の中に有つてゐる。たゞ茫乎漠然たるある標準になつて遺入つてゐるのだから、私の申出しは此茫乎漠然たるものを歴史的の研究で、もつと明瞭に、もつと一般に通用するものにしたと云ふ動議に外ならんであります。諸君の御存じのブランドスと云ふ人の書いた十九

世紀文學の潮流と云ふ書物があります。讀んで見ると中々面白い。獨乙の浪漫派とか、英吉利の自然派とか表題をつけて、其表題の下に、いくたりも人間の頭数を竝べて論じてあります。これで面白いのでありますが、私が讀んで妙に思つたのは、かう一題目の下に括られて仕舞つては括られた本人が押し込められたなり出る事が出来ない様な氣がした事です。英吉利の自然派は決して獨乙の浪漫派と一致する事は許さぬ。一點も共通な所があつてはならぬと云はぬ許りの書き方の様に感じられました。無論ブランドスの評した作家はかくの如く水と油の様に區別のあつたものかも知れない。然しながら、かう書かれると自然派へ屬するものは浪漫派を覗いちゃならない。浪漫派へ押し込めたものは自然派へ足を出しちや駄目だと、恰も先天的にこんな區別のある如く感ぜられて、後世の筆を執つて文壇に立つものも截然とどつちかに片付けなければならぬかの如き心持がしますからして、一寸誤解を生じ易くなります。さればと云つて此二派が先天的に哲理上かう違ふから微塵も一致するものでないと云ふ理窟も書いてなし、又理論上文藝の流派は是非かう分化するものだと教へて呉れない。只著者が諸家の詩歌文章を説明する條りを、さうですかさうですかと聞いてゐる様なものでありました。然し是は少し困る。例へば學派を分けなければ早稲田派だ、是は大學派だとして済ましてゐる様なものであります。夫程判然たる區別があるかないか分らないが、よしあつたにしても早稲田派と大學派は或る點に於て同じ説を吐い

てはならないと壓し付けるのみか、たとひ實際は同じ説でも、なに違つてゐるよ。早稲田だもの、大學だものと只名前丈で極めて仕舞ふ弊が起り易い。私の現代精神の綜合と云ふのは、此弊を救ふ爲めで、一方では此窮窟な束縛を解くと同時に、名に叶ふたる實を有する主義主張を竝立せしめやうとする爲であります。

けれども、かう云ふ研究は私には一寸臆劫で中々出来ないから、歴史的に行くと自然現代の西洋作家を實價以上に買ひ被る弊が起り易いと思ひます。そこで歴史的研究以外の立場から創作家の態度を御話する事にしました。

(二) もう一つ歴史的研究に對して非難したいのは、ちと哲學者染みますが、斯う云ふ事でありませぬ。凡ての歴史は與へられた事實であります。既に事實である以上は人間の力でどうする事も出来ない。儼として存在して居るから、此點に於て争ふべからざる眞であります。然しながら是が唯一の眞であるかと云ふのが問題なのであります。言葉を改めて云ふと人類發展の痕迹はみんな一筋道に伸びて来るものだらうかとの疑問であります。もしさうだと云ふ斷定が出来れば日本の歴史即ち西洋の歴史、西洋の歴史即ち希臘の歴史と云ふ事に歸着します。けれども多數の人は、是等各國の歴史を皆事實と首肯すると共に、悉く差違あるものと見做すだらうと考へます。尤も此各國の歴史から共通の徑路を抽象して人類の發展の方向は必ず、かう云ふ筋を通るものだと

云はれませう。然し夫だからと云つて日本も、支那も、英吉利も、獨乙も、同じ現象を同じ順序に過去で繰り返して居るとは參らるのであります。あまり雲を攫む様な議論になりますから、もう少し小さな領分で例を引いて御話を致しますが、日本の繪畫のある派は西洋へ渡つて向ふの畫家に甚だ珍重されてゐるし、又日本からは態々留學生を海外に出して西洋の畫を稽古してゐます。さうして御互に敬服しあつてゐます。兩方で及ばない所があるからでせう。それは、どうでも善いが、日本の畫を元の儘で抛つて置いて、西洋の畫を今の通打ち遣つて置いたら、兩方の歴史がいつか一度は、どこかで出逢ふ事があるでせうか。日本にラファエルとかエラスケスの様な人間が出て、西洋に歌麿や北齋の如き豪傑があらはれるでせうか。ちと無理な様であります。夫よりも適當な解釋は、西洋にラファエルやエラスケスが出たればこそ今日の様な歴史が成立し、又歌麿や北齋が日本に生れたから、浮世繪の歴史があつて、云ふ風に爲つたと逆論して行く方がよくはないかと存じます。従つてラファエルが一人出なかつたら、西洋の繪畫史は夫丈變化を受けるし、歌麿が居なかつたら、風俗畫の様子も餘程趣が異なつてゐるでせう。すると同じ繪の歴史でもラファエルが出ると出ないとで二通り出来上ります。(事實が一通り、想像が一通り) 風俗畫の方も其通り、歌麿のあるなしで事實の歴史以外にもう一つ想像史が成立する譯であります。所で此ラファエルや歌麿は必ず出て來なければならぬ人間であらうか。神の思召だと云へば夫迄だが、

もしさう云ふ御幣を擔がずに考へて見ると、三分の二は僥倖で生れたと云つても差支ない。もしラファエルの母が、ラファエルの父の所へ嫁に行く代りに外の男へ嫁いだら、もうラファエルは生れつこない。ラファエルが小さい時腕でも挫いたら、もう畫工にはなれない。父母が坊主にでもして仕舞つたら、矢張りあれ丈の事業は出来ない。よしあれ丈の事業をしても生涯人に知らせなかつたら決して後世には残らない。して見ると西洋の繪畫史が今日の有様になつてゐるのは、まことに危うい、綱渡りと同じ様な藝當をして來た結果と云はなければならぬのでせう。少しも金合が狂へばすぐ外の歴史になつて仕舞ふ。議論としてはまだ不充分かも知れませんが實際的には、前に云つた様な意味から歸納して繪畫の歴史は無數無限にある、西洋の繪畫史は其一筋である、日本の風俗畫の歴史も單に其一筋に過ぎないと云ふ事が云はれる様に思ひます。是は單に繪畫史を例に引いて御話をしたのでありますが、必ずしも繪畫には限りません。文學でも同じ事でありませう。同じ事であるとする、與へられた西洋の文學史を唯一の眞と認めて、萬事之に訴へて決し様とするのは少し狭くなり過ぎるかも知れません。歴史だから事實には相違ない。然し與へられない歴史はいく通りも頭の中で組み立てる事が出来て、條件さへ具足すれば、いつでも之を實現する事は可能だと迄主張しても差支ない位だと私は信じて居ります。そこで西洋の文學史を唯一の眞と認めてかゝるのは誤つて居ると、私は申し度いのであります

が、只夫丈ただそれだけなら別にこゝに述べ立てる必要もない。いざとなると西洋の歴史に支配されるかも知れませんが、普通頭の中で判断すれば西洋の文學史と日本の文學史とは現に二筋であつて、兩方とも事實で兩方とも眞であるのは誰が見ても分り易い事でありますから、其邊はどうでも構ひません。又一般に申して西洋の方が進んでゐるから萬事手本にするんだと言ふ人があつても構ひません。私も至極御同感であります。只歴史の解釋を私の様にした上で、西洋を手本にしたら間違が少なからうと思ふのであります。さうしないと弊が出てくる。さうして其弊に陥つて悟らずに居る事があります。

たとへば十九世紀の前半に英國にスコットなる人があらはれて、澤山小説をかきました。此人の作が一時期を畫する様な新現象である爲めに世人は之をロマンチズムの代表者と見做しました。それで差し支ないのですけれども、一度かう云ふ風に推し立てられると、スコットは浪漫主義で浪漫主義はスコットであると云ふ風にアイデンチファイされる様になります。アイデンチファイされると、スコットの作に見まはれた要素は悉く浪漫主義を構成するに必要で且つ充分(necessary and sufficient)なものと認められます。成程スコットの作中には中世主義もあります、冒險談もあります。種々な意味に解釋される浪漫主義の特色を含んで居りますが、困る事には多少の寫實的分子も交つて居るのです。所が寫實主義と云ふものは別に旗幟を翻がへして浪漫派の向

を張つてるんだから、兩々對立の勢の爲めに折角スコットの有つてゐる寫實的分子を引き抜いて寫實派の中へ入れてやる事が出来なくなつて仕舞ふ。又寫實派の中に散見し得る浪漫的分子を切り放して、浪漫派の中に入れる事も困難になつて仕舞ふ。そこで此名稱の爲めに誤まられて彼等の作品は精製した金や銀の様に純粹な性質で自然に存在してゐると思ふ様になります。所が實際は大概まさりものなのであります。だから本來を云ふなら、こゝに浪漫主義なら浪漫主義、自然主義なら自然主義の定義があつて、何人の作物でも構はないからして、此定義に叶つた丈を持つて來て此主義のうちへ打ち込むのが當然であらうと思はれます。例へば白なら白と云ふ屬性の概念があつて、白墨、白紙、白旗、雪杯と云ふ出來上つたものゝうちから白と云ふ屬性丈を引き抜いて此概念の下に詰め込むのが至當でありませう。然るに只色丈が白いからと云つて、色の白いものは形や質や溫度其他の如何に關せず悉く白のうちへ入れて、しかも外へ出る事を許さなかつたら、統一の出來るのは白と云ふ屬性丈であるにも關せず、人は凡ての點に於て統一されて居るかの如く誤解を抱くのであります。白いものは白で區別しても差し支ないから、之と同時に、形や質の點に於ても區別して、一個の具體を二重にも三重にも融通の利く様に取り扱はなかつては眞相には達せられん筈であります。又一例を云ふと、こゝに一人の男がある。此人は學校へ出る。其時には教師の仲間へ入れて見なければなりません。筆を執る。其時には著作家の群に伍するも

しきもの丈に何主義の名を以てする弊であります。だから此際理論の方から這入れれば成立し得るあらゆる歴史に通用する議論が立てられますし、又はユーゴーとか、バルザックとか云ふ名前前で代表してゐる作物を、一塊りの堅牢體で、塊まりとして取り扱ふより外に手の付けられないものだと言ふ觀念を脱する便宜もあり、又從來實際に發展した歴史から出て來た何々主義より以外には主義は存在し得べからざるものであるとの誤解もなくなるだらうと思ひます。

(三) もう一つ歴史的研究に就ての危険を一言單簡に述べて置きたいと思ひます。主義を本位にして動かすべからざるものと見ますと、前申した通り作家(即ち作物)を取り崩して掛らんと不都合が生ずる如く、作家(即ち作物)を本位として動かすべからざるものとする、今度は主義の方にもつと融通をつけなければなりません。融通をつけると云ふと、一つの作物のうちには同時に色々な主義を含んで居る場合が多い、少なくとも含んで居る場合があり得るのですから、斯様な作物を批評したり分解したり説明したりする際には、一主義のもとに窮篇に律し去る習慣を改めて、歴史的には矛盾する如くに見做されて居る主義でも構はないから、之を併立せしめて、苟しくも其作物のある部分を説明するに足る以上は之を列擧して憚からん様にしなければ、矢張り前段同様の不都合に陥る譯であります。然し歴史的關係から作物は夫自身に *note* なものとして取り扱はれて居りますし、何主義と云ふ名は此 *note* な作物を掩ふ名稱として用ひられて

のと認めるのが至當であります。家へ歸る。すると夫とも親ともして種類別をしなければならぬ。此人は一人であるけれども是程の種類へ編入される資格があるのであります。作物も其通りであります。之を分解し、之を綜合して、同一物のある部分を各適當な主義に編入するのが穩當であります。そんな錯雜した作物がないと云ふのは過去の歴史文を眼中に置いた議論では先過去の作物丈に就て檢して見ても其作全體もしくは其人の作物總體をある一主義のもとに一括し得て妥當と認めらるゝ程の單調なもの許りはない筈であります。然るに歴史に束縛されると此分類が旨く行かない。何故と云ふと文學史で云ふ何々主義と云ふのは理論から出たのでなくして、個人の作物から出たのであつて、其作物の大體を驚擾みにして、さうして尤も顯著に見える特性を目標として下した迄であります。元祖が既にさうであるからして、繼いで起るものゝ分類も、みんな此格で何主義のもとに押し込められて仕舞ふ。嚴正な類別でなくつて、人別になつて仕舞ふ。嚴正な類別をやるには人を離れて、作をほごして、出來上つたものを取り崩して掛らなければなりません。因襲の結果歴史的研究は此方法を吾人に教へないのであります。つまりは幾通りとなく成立し得べき歴史のうちで實際に發展した歴史文に重きを置いて、しかも殆んど偶然に出現した人間の作其物を全き成體で取り崩す事の出來ないものと見做した上で其特色の著る

居りますから、妙な現象が起つて参ります。茲に甲の人があつてAと云ふ作物を出す。すると此作物にB主義と云ふ名がつく。(多くの場合に於てはかう一言に纏められないにも拘はらず)次に乙なる人が出て来てA'と云ふ作物を公けにする。すると批評家がAとA'の類似の點を認めて、矢張りB主義に入れて仕舞ふ。或は作家自身が自らB主義と名乗る場合もありませう。どちらでも同じ事でありませう。第三に丙と云ふ男が出てA''を書く。A'とA''と似て居る所から矢張りB主義に纏められる。かう云ふ風にして、漸次にA'''迄行つたとすると、どんなものでありませう。甲と乙とは別人であります。乙と丙とも別人であります。別人である以上はいくら眞似を仕合つた所で全然同性質のものが出来る譯がない。況んや各自が本來の傾向に従つて、個性を發揮して懸つた日には、どこかに異分子が混入して来る譯になります。しかも此異分子も亦B主義の名に掩はれて次第々々に流轉して行くうちには、B主義の意味が一步ごとに摺れて、摺れる度に定義が變化して、變化の極は空名に歸着するか、夫でなければ徒らに紛々たる擾亂を文壇に喚起する道具に過ぎなくなります。芭蕉が死んでから弟子共が正風の本家はおれだ我だと争つた話があります。成程正風の旗を翻へすのは、天下を挟んで事を成す様なもので當時にあつて實利上大切であつたかも知れませんが其争奪の渦中から一步退いて眺めたら全く無意味としか思はれません。今私の申す弊は全く理知的の事で實利問題とは全く没交渉ではありませんが、轉々承繼した主義を一徹に

主張すると、少なくとも其形迹丈は芭蕉以後の正風争ひと同價値に終る様になりはせぬかと思はれます。尤もこんな事は我々の日常よくある事で、友人と一時間も議論をしてゐると何時の間にか出立地を忘れて、飛んでもない無關係の問題に火花を散らしながら毫も氣が付かない場合は珍しくない様です。AとA'とは似てゐる。だから雙方共B主義でもまあよろしい。A'とA''とも似てゐる。だから雙方共まあB主義でよろしい。降つてA'''とA''''とを比較すると矢張り似てゐる。だから雙方とも依然としてB主義で差支ない様なものの、最初のAと最終のA''''を對照した時に始めて困る。何だかB主義では足りない様な心持がします。スコットの浪漫趣味とモリスの浪漫趣味とは大分違ふ様です。モリスはチヨースーに似てゐると云ひます。其チヨースーは詩人ではあるが寫實派と云ふ方が適當であります。すると浪漫主義を中世主義と解釋せぬ以上はスコットとモリスとを同じ浪漫派に入れるのが妙になつて來ます。今度はモリスとゴーチエを比較する。誰が見ても同じ範疇では律せられさうもない。夫でも雙方共浪漫家で通用してゐます。ある人の説によると佛蘭西の自然派は浪漫派を極端迄發展させたもので、決して別途の徑路をたどるものではないと申します。さうなると自然派は浪漫派の出店見た様なものになつて仕舞ひます。イブセンを捕まへて自然派だと云ふ人があります。どうもイブセンとモーパッサンとは一所にならない様にはれません。さうかと思ふとイブセンを浪漫派だと申す人があります。然しイブセンとユーゴーと

は到底同じ畠のものぢやない様であります。要するに二三の主義をどこ迄も押し通して、あらゆる作物をどつちかへ片付け様とする無理から起つたものぢやないかと考へられます。イブセンならイブセンを本位として、説明するには、在來の何々主義（しかも其うちの一つ）で足りると思ふのは、又足りなければならぬと思ひ定めてかゝるのは、矢張り歴史的研究の弊を受けたものではなからうかと愚考致します。夫で少々出立地を變へて見たら、此窮屈を破ると同時に此曖昧をも幾分か避けられるだらうと思ひます。

(四) もう一つ申して本題に入る積りですが、是は純粹なる歴史的研究所は云へないかも知れません。今迄述べた三ヶ條はみな文學史に連続した發展があるものと認めて、舊を棄て、漫りに新を追ふ弊とか、偶然に出て來た人間の作の爲めに何主義と云ふ名を冠して、作其物を是非此主義を代表する様に取り扱つた結果、妥當を缺くにも拘はらず之を飽く迄も取り崩し難き whole と見做す弊や、或は漸移の勢につれて此主義の意義が變化を受けて混雜を來す弊を述べたのであります。こゝに申す事は歴史に關係はありますが、歴史の發展とは左程交渉はない様にはれません。即ち作物を區別するのに、ある時代の、ある個人の特性を本として成り立つた某々主義を以てする代りに、古今東西に涉つてあてはまる様に、作家も時代も離れて、作物の上のみあらはれた特性を以てする事であります。既に時代を離れ、作家を離れ、作物の上のみあらは

れた特性を以てすると云ふ以上は、作物の形式と題目とに因つて分つより外に致し方がありません。まづ形式からして作物を區別すると詩と散文とになります。是は誰でも知つてゐる事で改めて云ふ程の必要も認めません。詩と散文と區別したからと云つて創作家の態度が一寸髣髴しくないので。分けないより増しかも知れないが、分けた所で大した利益も出て來ない様です。次に問題からして作物の種類別をすると、先づ出來事を書いたものを敘事詩（是は希臘の作を土臺にして付けた名だから、我々は敘事文と云つても構ひません）と名づけたり。自己の感情を味じたものだから抒情詩（是も抒情文としてもよろしい）と申したり。性格を描いたり、人生を寫したりするんで、小説とか戯曲とかの部類に編入したり。或は靜物を模寫するんで敘景文と號する様な分類法であります。此分類になると多少細かになりますから、詩と散文の區別より幾分か創作家の態度を窺ふ事が出來て、随分重寶ではあります。是れとても與へられた作物を與へられたなりに取り扱ふ丈で、其特性を概括するにとゞまつて仕舞ひやすいから、夫より以上に溯つて、もう少し奥から、かう云ふ立場で、かう變化すると小説が出來る、かう變化すると抒情詩が出來ると迄は漕ぎ付けてゐないのが多い。そこ迄漕ぎ付けられない以上は、頭から、結果と見られべき作物を棄て、原因と認めべき或物の方から説明して、溯る代りに、流を下つてくる方が善い譯になります。つまり角があるから牛で、鱗があるから魚だと云ふ代りに、發生學から出立して、どん

な具合に牛が出来、どんな具合に魚が出来るかを究めた方が、何だか事件が落着いた様な心持が致します。

私が作家の態度と題して、歴史の發展に論據を置かず、又通俗の分類法なる敘事詩抒情詩等の區別を眼中に置かないで、單に心理現象から説明に取りかゝらうと思ふのは之が爲めでありま

す。
夫で作家の態度と云ふと、前申した通り作家が如何なる立場から、どんな風に世の中を見るかと云ふ事に歸着します。だから此態度を検するには二つのもの、存在を假定しなければなりません。一つは作家自身で、かりに之を我と名づけます。一つは作家の見る世界で、かりに之を非我と名づけます。是は常識の許す所であるから、別に抗議の出様譯がない。又此際は常識以上に溯つて研究する必要を認めませんから、これから出立する積でありますが、今申した我と云ふものに就て一言辯じて後の伏線を張つて置きたいと思ひます。尤も辯ずると申しても哲學者の云々 'Transcendental I' だの、心理學者の論ずる Ego の感じだのと云ふ六づかしい事ではありません。只我と云ふものは常に動いてゐるもので（意識の流が）さうして續いてゐるものだから、之を區別すると過去の我と現在の我となる譯であります。尤もどこで過去が始まつて、どこから現在になるんだと議論をし出すと際限がありません。古代の哲學者の様に、空を飛んで行く矢

へ指をさして今何處に居ると人に示す事が出来ないから、必竟矢は動いて居ないんだ杯と云ふ議論もやれないでもありません。さう、こたわつて來ては際限がありませんが、十年前の自分と十年後の自分を比較して過去と現在に區別の出来ないものはありませんから、かう分けて差し支ないだらうと思ひます。そこで——現在の我が過去の我を振り返つて見る事が出来る。是は當然の事で記憶さへあれば誰でも出来る。其時に、我が経験した内界の消息を他人の消息の如くに觀察する事が出来る。事が出来ると云ふのですから、必ずさうなると云ふのもなければ、又さう見なくてはならないと云ふのでもありません。例へば私が今日此所で演説をする。其時の光景を家へ歸つてから寝ながら考へて見ると、私が演説をしたんぢやない、自分と同じ別人がした様に思ふ事も出来る——出来ませんか。それぢや、斯う云ふなどうでせう。去年の暮に年が越されな

内から出産して居るに違ひない。違ひないとは申しながら、泣いた覺もなければ、浮世の臭もかいた氣がしません。親に聞くと慥かに泣いたと申します。が私から云はせると、冗談云つちや不可ません。大方そりや人違ひでせうと云ひ度なります。そこで我々内界の経験は、現在を去れば去る程、恰も他人の内界の経験であるかの如き態度で觀察が出来る様に思はれます。かう云ふ意味から云ふと、前に申した我のうちにも、非我と同様の趣で取り扱はれ得る部分が出て参ります。即ち過去の我は非我と同價値だから、非我の方へ分類しても差し支ないと云ふ結論になります。斯様に我と非我とを區別して置いて、夫から我が非我に對する態度を檢査して懸ります。心理學者の説によりますと、我々の意識の内容を構成する一刻中の要素は雜然尨大なものでありまして、其うちの一點が注意に伴れて明瞭になり得るのだと申します。是は時を離れて云ふ事であり、前に一刻中と云つたのは、まあ形容の語と思つて頂けばよろしい。例へば私が此演壇に立つて一寸見廻はすと、千餘人の顔が一度に眼に這入る。這入つたと云ふ感じはありますが、何となく同じ顔で、悪く云ふと眼も鼻も揃つて居ない人が竝んで御出でになる。あなたが私に度胸が据らないで眼がちら／＼する許ではない。かう、漠然たるのが本來で、心理學者の保證する所でもあります。然し此際は不幸にして、別段私の注意を惹くものがないから、只漠然たるのみで、別に明瞭なる所がありません。もし演壇のすぐ前に美しい衣装を着けた美しい婦人でも居られ

たら、その周圍六尺許りは大いに明瞭になるかも知れませんが、惜しい事に御出にならんから、完全に私の心理状態を説明する譯に参りません。そこで此漠然たる限界の廣い内容を意識界と云つて、其うちで比較的明瞭な點を焦點と申します。是は前申した通り時間の経過に重きを置かない simultaneous の場合であります。時間の経過上に就ても同様の事が申されます。然し之を説明するとくどくなりますから略します。又想像で心に思ひ浮べる事物も略同様に見做されるだらうと考へますから略します。夫から前に申した例は單に分り易い爲めに視覚から受ける印象のみに就て説明したものでありますから、實際は非常に區域の廣いものと御承知を願ひます。先づ我々の心を、幅のある長い河と見立ると、此幅全體が明らかなものではなくつて、其うちのある點のみが、顯著になつて、さうして此顯著になつた點が入れ代り立ち代り、長く流を沿ふて下つて行く譯であります。さうして此顯著な點を連ねたものが、我々の内部経験の主腦で、此経験の一部分が種々な形で作物にあらはれるのであるから、此焦點の取り具合と續き具合で、創作家の態度もきまる譯になります。一尺幅を一尺幅丈に取らないで、其うちの一點のみに重きを置くとすると勢ひ取捨と云ふ事が出来て参ります。さうして此取捨は我々の注意（故意もしくは自然の）に伴つて決せられるのでありますから、此注意の向き、案排もしくは向け、具合が即ち態度であると申しても差支なからうと思ひます。（注意そのもの、性質や發達は茲には述べません）

私が先年倫敦に居つた時、此間亡くなられた淺井先生と市中を歩いた事があります。其時淺井先生はどの町へ出て、どの建物を見ても、あれは好い色だ、これは好い色だ、と、とう／＼家へ歸る迄色盡しで御仕舞になりました。流石畫伯丈あつて、違つたものだ、先生は色で世界が出来上がつてると考へてゐるんだなと大に悟りました。すると又私の下宿に退職の軍人で八十許になる老人が居りました。毎日同じ時間に同じ所を散歩をする器械の様な男でしたが、此老人が外へ出ると吃度杓子を拾つて来る。尤も日本の飯杓子の様な大きなものではありません。小供の玩具にするブリツキ製の匙であります。下宿の婆さんに聞いて見ると往來に落ちてゐるんだと申します。然し私が散歩したつて、未だ嘗て落ちてゐた事がありません。然るに爺さん丈は不思議に拾つて来る。さうして、これを叮嚀に室の中へ竝べます。何でも餘程の數になつて居りました。で私は感心しました。外の事に感心した譯でもありませんが、此爺さんの世界觀が杓子から出来上つてゐるのに勘なからず感心したのであります。是はたゞに一例であります。詳しく云ふと講演の冒頭に述べた如く十人十色で、いくらでも不思議な世界を任意に作つて居る様であります。中にもカントとかヘーゲルとか云ふ哲學者になると到底普通の人には解し得ない世界を建立されたかの如く思はれます。

かう複雑に發展した世界を、出来上つたものとして、一々御紹介する事は、とても出来ません

から、分り易いため、極めて單純な經驗で一般の人に共通なものを取つて、經驗者の態度が如何に分岐して行くかと云ふ事を御話して、其態度の變化が即ち作家の態度の變化にも應用が出来るものだと云ふ意味を説明し様と思ひます。極めて單純な所丈、大體の點のみしか申されませんが、幾分か根本義の解釋にもならうかと存じて、思ひ立つた譯であります。

先づ吾人の經驗で尤も單純なものは *sensation* であります。近頃の心理學では、此字に一種限定的の意味を附して、ある單純なる全部經驗の一方面をあらはす事になつて居りますが、私は便宜の爲め全部經驗の意義に用ひます。只便宜の爲めに用ひるのでから、實際の衝突のない事は私の説明を御聞になれば御分りになるだらうと思ひます。夫からある心理學者は *sensation* は分解の結果到着する單純な經驗で、現實な吾人の經驗はもつと複雑な所から始まつてゐるぢやないかと云つて居りますが、夫も構ひません。只 *sensation* が單純な經驗をあらはせば、私の目的には宜しいのであります。もし不都合なら、そんな字を借用しないでもよろしい。面倒な事を云はないで、例で以て御話をすれば、早く合點が行かれますから、すぐさま例に取りかゝります。

時々酒問屋の前杯を御通りになると、目暗縞の着物で唐棧の前垂を三角に、小倉の帯へ挟んだ番頭さんが、菰被りの飲口をゆるめて、樽の中から僅許りの酒を、勿體なさうに猪口に受けて舌の先へ持つて行く所を御覧になる事があるでせう。商賣柄丈に旨い事をするなと見て居ると、酒

の雫が舌へ觸るか、觸らないうちにぶつと吐いて仕舞ひます。さうして次の樽から又同じ様に受けて、同じ様に舌の先へ落しては、次へ次へと移つて行きます。けれども何遍同じ事を繰り返しても決して飲まない。飲んだら好きさうなものです。悉く吐き出して仕舞ひます。そこで今度は同じ番頭が店から家へ歸つて、神さんと御取替か何かで、晩酌をやる。すると今度は飲みますね。決して吐き出しません。ことによると飲み足りないで、もう一本なんて、赤い手で徳久利を握つて、細君の眼の前へぶらつかせる事があるかも知れません。先づ此二た通りの酒の呑み方（尤も一方は呑み方ではない、吐いて仕舞ふから吐き方かも知れませんが）——吐き方なら吐き方でもよろしい。此呑み方と吐き方を比較して見ると面白い。研究と申す程の大袈裟な文字は如何はしいが、説明の仕様によると、中々えらく聞える様に出來ますから御慰みになります。先づ第一には、御店で舐めた酒と、長火鉢の傍でぐびぐび遣つた酒とは、此番頭に取つて同じ経験であります。尤も焼酎とベルモット、ビールと白酒では同じ経験とも申されませんが、同種、同類、同價の酒を店で吐いて、家で飲んだとすれば、吐くと飲むとの相違があるで、舌の當りは同じ事だと思ふのが順當だから、つまり此男は同じ味覺の経験を繰り返した譯になります。此所迄は誰が見ても同じ経験であります。それなら何所迄も同じだらうかと云ふと、違つてゐます。店で試しに口へ當てゝ見るのは、此酒はどんな質で、どう口當りがして、賣れば幾何位の相場で、舌觸りがびりゝとして、後が淡泊して、頭へびんと答へて、灘か、伊丹か、地酒か濁酒かが分る爲め、言ひ換れば酒の資格を鑑別する爲めであります。これが晩酌の方で見ると趣が違ひます。そりや時と場合によると、今日の酒は大分善いね、一升九十錢位するね位の事は云ひながら、舌をびちやゝ鳴らすかも知れませんが、何も九十錢を研究してゐる譯でも何でもありません。だから九十錢が一圓でも只旨く飲めさへすりや結構なんです。かう云ふ點から云ふと、兩方が變つて居ます。酒の味を利用して酒の性質を知らうと云ふのが番頭の仕事で、酒の味を旨がつて、口舌の満足を得ると云ふのが晩酌の状態であります。雙方とも同じ経験に違ひない。只其経験の處置が異なつてゐます。言葉を換へて云ふと同様の経験に就て、眼の付け所が違ふ、注意の向け方が違つてゐる。最後に此講演に大事な言葉を用ひて申しますと、態度が違つて居ります。（こゝの所が少しヴント杯と違つてるかも知れませんが。ヴントの様な専門の大家に對して異説を立てるのは甚だ恐縮ですが、私のは、かう行かないと説明になりませんから、かうして置きます。又かうしても、實際上差支ないと信じます）

もう一步進んで、此態度が違つて居ると云ふ事を説明しますと、番頭の方は酒の味を外へ抛げ出す態度であります。即ち自分の味覺を以て、自分以外のもの、（最前申した非我）の一部分を知る料に使ふのであります。譬喻で云ふと、酒の味が舌の先から飛び出して、酒の中へ潜んで落ち

の雫が舌へ觸るか、觸らないうちにぶつと吐いて仕舞ひます。さうして次の樽から又同じ様に受けて、同じ様に舌の先へ落しては、次へ次へと移つて行きます。けれども何遍同じ事を繰り返しても決して飲まない。飲んだら好きさうなものです。悉く吐き出して仕舞ひます。そこで今度は同じ番頭が店から家へ歸つて、神さんと御取替か何かで、晩酌をやる。すると今度は飲みますね。決して吐き出しません。ことによると飲み足りないで、もう一本なんて、赤い手で徳久利を握つて、細君の眼の前へぶらつかせる事があるかも知れません。先づ此二た通りの酒の呑み方（尤も一方は呑み方ではない、吐いて仕舞ふから吐き方かも知れませんが）——吐き方なら吐き方でもよろしい。此呑み方と吐き方を比較して見ると面白い。研究と申す程の大袈裟な文字は如何はしいが、説明の仕様によると、中々えらく聞える様に出來ますから御慰みになります。先づ第一には、御店で舐めた酒と、長火鉢の傍でぐびぐび遣つた酒とは、此番頭に取つて同じ経験であります。尤も焼酎とベルモット、ビールと白酒では同じ経験とも申されませんが、同種、同類、同價の酒を店で吐いて、家で飲んだとすれば、吐くと飲むとの相違があるで、舌の當りは同じ事だと思ふのが順當だから、つまり此男は同じ味覺の経験を繰り返した譯になります。此所迄は誰が見ても同じ経験であります。それなら何所迄も同じだらうかと云ふと、違つてゐます。店で試しに口へ當てゝ見るのは、此酒はどんな質で、どう口當りがして、賣れば幾何位の相場で、舌

ますが、其中に彼等の技巧は驚ろくべきものでありました。何故驚ろくべきものかと申すと、彼等は原畫を一目見るや否や、此色と此色を、是丈の割合で、かう混ぜれば、此調子が出ると、すぐに呑み込んで仕舞ふ。それから其通りにやる、果して其通りの調子が出る。まづこんな具合なんださうです。所が畫工の方はどうかと云ふと、先づ腹の中で、此所へこんな調子を出して、面白味を付け様と思ふ。夫から繪の具を交ぜる——もしイムプレシヨニストなら單純な色を並べて、すぐに畫布へ塗り付ける。さうして思ひ通りの調子を出す。今此兩人を比較して見ますと、ある手段に訴へて、目的（即ち思ひ通りの色）に到着するのだから、其所迄は同じ事と見做して差支ないのです。然し兩人が工夫の結果同じ色彩に到着しても、到着した時の態度は大に違ふと云はなければなりません。畫工の方は此色彩を楽しむのであります。いゝeffectが出たと云つて嬉しいのであります。此樂みを除いては、色々の工夫を積んで此結果に達する迄の知識は無用なのであります。然し此知識をある意味に於て自得してゐないと、どうあつても此結果が出せない。出せなければ楽しむ譯に參らんから已を得ず此過程を其々のうちに或は理論的に覚え込むのであります。然るに、石版屋の方では、注文を受けて原畫と同じ様な調子を出せば、夫で萬事が了するので、其結果が網膜を刺激し様が、連想を呼び起さうが一向構はるので、必竟するに彼の興味は色彩其物に存するのであります。何と何と何がどんな割合に調合されて此色彩が出来上つ

着く方角に働くのであります。晚酌の方は之が反對の方向に働いて居ります。非我のうちに酒と云ふものがあつて、其酒が、ある因縁で、外から飛び込んで来て、我を冒かした、もしくは我が目されたと承知するのであります。詰めて云ふと、一は我から非我へ移る態度で、一は非我から我へ移る態度であります。一は非我が主、我が賓といふ態度で、一は我が主、非我が賓と云ふ態度とも云へます。番頭から云ふと酒の味自身が酒の屬性になるのだから、之を屬性的の経験とも云へませう。晚酌から云ふと酒の味が自己の幸不幸（あまり大袈裟なら不快）になるのだから感受的とも云へませう。洋語で云ふと affective と申したら妥當だらうと思ひます。或は番頭の、自己にあらざる酒に重きを置く點から云へば客觀的態度とも名づけられませうし、晚酌の、自己に受くる刺激を、密切な自己の一部分と見做す點から云へば、主觀的とも申されませう。又は番頭の態度が非我を明らめやうとする態度であるから、主知主義と云つて善からうと思ひますし、晚酌の態度が、我に感ずる態度であるから、主感主義と云つて善からうと思ひます。（こゝに云ふ兩主義は便宜の爲め私が拵へたのだから、かの心理學の一派を代表する主意説とは切り離して見て頂きたい）

これで大抵御分りになつたらうと思ひますが、猶念の爲に、もう少し複雑で時間の経過を含んで居る例を御話しして置きたいと考へます。嘗て西洋の石版業の事を書いたものを見た事があり

さうすると私は、何だか入らざる駄辯を弄した、獨りよがりの心理學者の様になります。夫では少々心細いから、もう少し此兩方面を研究して御話ししたいと思ふ。即ち此單純な經驗に於て兩面を區別して置く方が適當であると御納得の參る様に、此兩面が漸々右と左へ分れて發展する結果遂には大變違つたものに爲り得ると云ふ事を説明したいと思ひます。

説明はなるべく單簡な方が宜ろしいから、茲に一つの物でも、人でもあるとする。此物か人は與へられたものとしませう。すると、以上の兩態度で之に對すると、之を敘述する方法が雙方共にどう發展するかと云ふ問題であります。

其前に一寸御斷わりをして置きますが、こゝではAならAを與へてあると見て、其與へられたAを如何に敘述して行くかと云ふのですから、敘述家にAを撰擇する權利がない事になります。然しながら前に我々の心を幅のある河に喩へた時、此川幅の一點丈が明瞭になるから、明瞭になつた一點丈が意識の焦點になつて、他は皆茫々の裡に通過して仕舞ふ。さうして其焦點は注意の尤も強い所に来る、さうして注意は即ち態度であると申しました。だから心の態度は撰擇淘汰の權を有して居ります。茲にAを與へられたとするのは、心の態度にAを撰擇する權利がないと云ふ意味ではありません。既に撰擇せられたるAに就ての話であります。

本來ならば前に申した兩態度が如何なる風に、如何なる性質の焦點を作るかを論じなければな

たんだなと見分けがつけばよろしいのであります。従つて彼の重んずる所は色彩から受ける樂みよりも、如何にして此色彩を生じ得るかの知識もつと纏めて云へば此色彩の知識にあると云つても無理ではありません。諸此兩人も出來上つた色を經驗すると云へば同じ經驗をしたに違ひない。只石版屋の方は此經驗を我から放出して、非我の屬性たる色と認め、且つ屬性として他の色と區別するに引き易へて、畫家は同一經驗を、畫面より我に向つて反射し來つた一種の刺激と見做し、此色が如何に我を冒すかの點にのみ留意するのであります。だから石版屋の方を客觀的態度で主知主義とし、畫工の方を主觀的態度で主感主義と名けてよからうと思ひます。

先づ是で客觀、主觀、主知、主感の解釋が出來ましたが、是は極めて單純なる經驗に就て云ふ事で、其經驗は一の全き經驗でありますから、此經驗に對する注意の向け方、即ち態度一つで、かう兩面に分解は出來ます様なものゝ、此兩極端の態度を取つて、いづれへか片付けなければならぬ様に人間が出來上つて居ると思ふのは中庸を失した議論であります。分り易い爲めにこそ、かう截然たる區別はつけましたが、かう明瞭に離れる場合は、あらゆる場合の兩端に各一つ宛しかないと合點しても間違ではなからうと思ひます。其中間に横つてゐる多數の場合は皆此兩面を兼ねて居るでせう。もし兼ねて居るのが不都合ならば或る比例に於て入り交つてゐると云ふが好いでせう。

第一段は敘述が、一步客観主観の両面へ展開した時の状態で、此左右の扉を對と見る所に興味があるのであります。此時期に於ける客観的敘述を私は *perceptual* と名づけ様かと思ひます。即ち前に申した酒の味よりも稍複雑な感覺的屬性が纏まつて一體を構成してゐるものを、綜合された一體と認めて、認めた儘を敘述する意味に用ひる積であります。例へば茲に洋卓オクトがあると、此洋卓は堅い、黒い、ニスニスの臭のする、四角で足のある、云々と一々に其屬性を認めて、認めた屬性を綜合して始めて敘述が成立する譯であります。所が斯様に屬性を結びつけると云ふ事が、前に申した酒の味るときよりも一層客観性を慥かにする事だらうと思はれます。と云ふものは視覚、聽覺其他を單に主観的態度で取り扱つてゐると色は遂に色で、音はどこ迄も音で、此色と此音は同一體の非我が兼ね有して居ると云ふ事實には比較的無頓着で居られます。従つて色も非我の屬性であり、音も非我の屬性であると云ふ以上に、此色も此音も同一非我の屬性であると綜合すれば、前よりは一段と其物の存在を確かにする意味になるから、客観的態度に重きを置いた敘述と云はねばなりません。只注意すべき事は此際主観的分子が無くなつたと解釋してはならぬのであります。現に色を視、音を聞く以上は、此經驗を綜合して我以外に抛げ出すと、抛げ出さざるとに論なく、色も音も依然として、一方では主観的事實であります。

是で私の所謂 *perceptual* な敘述の意味は大概御分りになりましたらう。所が、屬性が複雑に

らん筈であります。然しさうすると大變複雑な問題になりますし、又撰擇の態度は、即ち撰擇されたものを敘述する態度と同じ事で、雙方とも傾向に相違はないと考へます。前に云つた色好きの淺井先生の様な人に、エストミンスター・アペーが眼に着いたとすると、先生は自分の勝手に此寺院を撰擇した譯になりますが、楮之を敘述する段になれば（腹の中で敘述しても、口で敘述しても、又は筆で敘述しても）撰擇した時の態度を以て細かに局部に向ふ丈の事でありませぬ。只敘述の際にある連想だとか、ある概念だとかある記號だとかアペー以外の材料を以て來て、アペーの色を説明するかも知れませんが、説明の道具に使はれる材料も亦同じ態度で撰擇したものでありますから、つまりは同じ事だらうと思ひます。（尤も例外は出て來ます。態度が途中で代る事もあり得ます。然し是は些細の事として御見逃しを願ひたい）

そこでAを與へられたものと見て、之を敘述する様子が段々に分れて遠ざかる所を御話したい。A其物は何だか分らないのですが、之を敘述する方法は主知（客観）の態度に三つ、主感（主観）の態度に三つ、さうして兩方を一つづつ結び付けて對にする事が出来るかと思ひます。當つてゐる當つてゐないは勿論大切であります。比較すると、よく對がとれて居る所に私は興味があるのでありますし、敘述となると既に文學の領分に、いつの間にか這入つて居りますから、私の思ひ付いた儘を御参考に供します。

なるに従つて、敘述が長たらしくなります。長たらしくなると、敘述をする當人も迷惑であり、敘述を聴くものは一度に纏めかねる様になります。従つて此敘述を簡單にする爲めには、勢ひ敘述されべき物に類似のもので、聞く人の頭の中に、既に纏つて遣入つてゐるものを持ち出して代理をさせるのが便利になります。例へば柿を見た事のない西洋人に柿を説明するよりも赤茄子の様だと話す方が早解りがする様なものであります。勿論此代理になる赤茄子の考が先方の頭の中になくは駄目で、考がある以上は、其考へ次第では、第二段に述べる conceptual な敘述を豫想した事になります。是は其場合に至つて成るべく不都合のない様に説明して見ませう。兎角に此代理のものを用ひると云ふ事は、純粹の敘述ではない、方便であるから、あまり嚴密に考へると少しは破綻が出さうであります。然し實際的には殆んど、私の主意を害する事のないのみか、却つて私の考を明瞭に御分らせ申す結果になりますから、かう致して置きたい。のみならず、斯うして置くと、片一方の主觀的の方と比較するときに大變な好都合になるのであります。

さうすると、歸着するところは、Perceptual な敘述の尤も簡便な形式は洋卓（イブ）は唐机（タウ）の如しか、柿は赤茄子の如しとか、驢は騾の如しとか、凡て眼に見、耳に聞き、手に觸れ、口に味はい、鼻に嗅いで得たる形相（モト）を以て敘述する事になります。其一般の形式をAはBの如しとして置きます。

Perceptual な敘述に對する、主觀的方面の敘述は何であるかと云ふと、私は一寸名前に窮するから、暫らく在來の修辭學に用ひてゐる直喩（simile）と云ふ語を借用致します。然し全然從來の simile とも思はれない様ですから、其積で聞いて頂きたい。普通修辭學者の説によると、似たものを似たもので説明するんださうです。是文ならば柿を赤茄子で説明したり、洋卓（イブ）を唐机（タウ）で説明するのと別段の相違もない様です。所が實際の例を見ると、大分之とは趣を異にしてゐるのがあります。あの人の心は石の様だ。あの男は虎の様だ。扨と云ふのがあります。ここでは私は第一段の主觀的敘述をあらはすに simile と云ふ字を借用しました。是は普通 simile の下に取り扱はれて居る敘述のあるものが、私の所謂第一段の主觀的敘述と同傾向を有してゐるからと云ふ丈に過ぎません。借今申した、あの人の心は石の様だと云ふ例をとつて、調べて見ると、心と石を並べても比較し様がありません。又あの男は虎の様だと云ふ例にしても其通り、虎と人間とは到底一所になり様がない。けれども別に無理とも思はないで使つてゐます。して見ると何所か似た所があるに違ない。其似た所を考へて見たら此兩面の敘述の差が判然するだらうと思ひます。人の心を石に比較するのに、比較にならん様に思ふのは、我々が石に就ての經驗を、我から非我の世界に抛げ出す態度、即ち我以外に一塊の動かすべからざる石と名づくるものが存在して居ると見做すからではありませんまいか。既に抛げ出されて石と名づけられたる以上、我の態度が我から非

人も動物であると云ふ點に於て、既に客觀的價值のある比較であります。何も動物と云ふ概念がなくとも構ひません、寐る所が似てゐる、物を食ふ所が似てゐる、歩く所が似てゐる以上は、客觀的價值があります。いくら皮膚が似てゐなくつても、足の恰好が似て居なくつても、鬚の數が似て居なくつても、似てゐる所がある丈夫客觀的價值のある比較であります。然しながら、もし以上の點に於て類似を主張するならば、よりよき類似を主張する比較物はいくらでもある筈であります。例へばあの人は父に似てゐるとか又は母の如しとか云ふ方が虎の如しと云ふよりも遙かに穩當であります。立派な Perceptual な敘述が出来る筈であります。然るに之を棄て、客觀的價值の尤も少ない虎を持つて來たのは、凡ての不類似のうちに獐猛の一點を撰、擇して尤も大切な類似と認められたからであります。借此撰、擇は前に云つた通り我々の注意できまるので、云ひ換へると我々の態度で決せられるのであります。では此際の態度は客觀か主觀かと云ふ問題になりません。獐猛を客觀的に虎の屬性と見做せば獐猛は遂に虎の獐猛であつて、どうしても虎を離れる事は出来ません。其代り人間の獐猛も亦客觀視する事が出来ますからして雙方共我を離れたものとして比較が出来ます。然し同一經驗の方向を逆にして虎より受くる獐猛、人より受くる獐猛として、雙方から來る心持丈を比較すると、主觀の態度であります。だから此場合に於ては、兩方に見る事が出來て、兩方共正しいのであります。然しながら實際はどうかと云ふと、個人の習慣及

我に向つて働らく以上は、石は何處迄も石で、どうしても人の心に比較され様譯がないのであります。我々の石に就ての經驗は堅いとか、冷たいとか、素氣ないとか云ふ屬性から構成されて居るのは無論であります。苟しくも此屬性が石の屬性で、石の意義を明瞭ならしむるものと相場が極つて仕舞へば、もう融通は利きません。どうしても石を離れる事が出来なくなりません。石を離れる事が出来ないとする、丸で性質の違つた心を形容する譯には参りません。堅いのは石が堅いので、冷たいのも矢張石が冷たいんだから、其堅さ冷さを石から奪つて、心に興へる譯には参りません。然し一度び立場を變へて、其堅さ冷たさを石から經驗したとすれば、自分が石を認めたくなくて、石が自分を冒したとすれば、冷たいのは自分の冷たさで、堅いのも自分の堅さであるから、一度び石の經驗に觸れるや否や、石を離れて冷たい、堅いと云ふ心持ち丈になるから、苟しくも之と同じ心持を起すものならば、移して何へでも使ふ事が出来ます。それで、あの人の心は石の様だと云ふ敘述が意味のあるものとなります。是は全く性質の違つた比較をする場合で、寧ろ極端であります。比較するものと比較されるものとの屬性が一點もしくは一以上の諸點に於て、似て居れば似て居る丈夫客觀的比較に近づく譯です。漸々 Perceptual の敘述に縁が付いて参ります。例へば先刻のあの人は虎の様だと云ふ様な simile でも石と心の比較に比べると、幾分かは Perceptual の方面へ向いて居ります。何故と云ふと、虎は動物であり、

種類の甲乙を度々見た上で、矢張り同種類の丙に逢つた時、是は此種類の代表者もしくは其一つであると認めるのは conception の力であります。隣りの斑まだらはかうであつた。向ふの白しろはかうであつた。どこそこの犬はかうであつたの経験が重なる、凡ての犬はかうであつたと纏つて参ります。夫れがもう一層固まると、かうであつたが變じて、斯くあらねばならぬと迄高じて参ります。斯くあらねばならぬとなつた時に、犬なら犬全體に通じての考が出来ます。斯くあらねばならぬ考だから、本人はまだ見ぬ犬にも、未だ生れぬ犬にも之を適用致します。借此概念を抱いて往來を歩いて居ると、忽ちわんと吠えられる事があります。當人は早速には、あ鳴いたな。是れ犬なりと断じます。私は此これ犬なりの敘述を conceptual な敘述と申したのであります。犬は一匹であります。耳が垂れて、尾が巻いて、わん／＼云ふ聲を出して居るかも知れません。然し單に夫丈見たり聞いたりした丈では、種屬全體に通用する犬と云ふ断案は出て來ません。だから此際に於ける犬は、頭の中に前から存在してゐる犬の一匹もしくは代表者であります。固より頭のなかに這入つてゐる犬は、犬と云ふ名前前で這入つてゐるか、又は抽象的な關係の知識になつて這入つてゐる丈だから、形を具へては居りません、形を具へてゐる犬はいつでも代表的な一匹の犬になつて仕舞ふのは無論であります。個々特別の場合を綜合して成立つたものであると云ふ點に於て、既に密切な主觀的意味を失つて居ります。personal element が亡なくなつて居りま

び其時の模様によつて、變化のあるのは無論であります。多くの場合に、多くの人が、多く主觀の方に重きを置いて居る様に思はれます。だから私は此種の比較に用ひる虎なら虎を、客觀的價値の尤も少ないものであると云ふ譯で、又客觀的價値のある局部をも主觀的態度で注意する傾向があると云ふ譯で、此方面の敘述と見るのであります。石の例と虎の例でも分る如く既に主觀の程度には厚薄があります。猶進んで月が鎌の様だと云ふ敘述に至ると又一步 Perceptual の方へ近付いて居ります。(面倒だから解剖は致しません)。斯様にして漸々客觀的價値を増すに従つて、遂には Perceptual の敘述に達するのであります。

Perceptual の敘述と simile (私の所謂)との對は先づ斯様なものであります。前者は客觀で知を主とし、後者は主觀で感を主とするのが特性であります。然し常態を申すと雙方が幾分か交り合つて居る事は、例に因つて説明した通であります。

是から第二段の對に移ります。第二段の片扉かたがらで客觀態度の方を conceptual な敘述と名づけたと思ひます。夫から片扉の主觀態度の方を矢張り在來の修辭學の言葉借りて metaphor として置きます。意味は是から説明します。

あるものを二度見ては、ああれだたと合點するのを recognition と申します。二度以上度々見て、矢つ張りあれだたと承知するのを cognition と申します。もし一つものを度々見る代りに同

す。犬はかくあるべきものと云ふ事を云ひ換へると、凡ての人は犬をかく考ふべき筈だと云ふ事になります。即ち他人はどうでも自分はかうと云ふ立場を離れて居ります。誰にでも通用するもの、結局は客観的に慥かなものと云ふ事になります。夫だから犬の概念は頭の中にある丈にも拘はらず、其價値は頭以外即ち非我の世界に抛出されて始めて分るものであります。其代り例の主観的な分子は、perceptualの敘述に比べると全く缺乏して参ります。只吾人の知識が非我の世界に於て廣くなつたと云ふ事は云はれます。けれども犬と云へば、すぐに一匹の犬を思ひ出すのが通例であるから、理窟から云ふ程主観的分子は缺けて居ない場合が多いので、其點に於ては第一段の perceptual な敘述とつながつて居ります。(此場合に於ても是は犬なりと云ふのは尤も單簡なる形式を撰んだものであります)。

今度は對の片屏なる主観の方面即ち metaphor に移つて申します。是は御承知の通り simile の變化したもので、修辭學者は大膽なる simile と評して居ります。あの人の心は石の様だと云ふ代りに、あの人の心は石だと斷じ、あの人は虎だと云ひ切る類たぐひであります。第一段の比較に對して、こゝでは心を石と同一視し、人を虎と同一視するのであります。だから simile よりも一層客観的不類似の點を無視した譯になります。だから其點に於て一層主観的態度の敘述と見做して差支ありません。(其他の點は simile の所と同様の議論でありますから略します)。

第三段になると妙な對が出来ると思ひます。此所になると雙方共が象徴に歸して仕舞ふのであります。本來を云ふと、犬と云ふのも記號で、心を石だと云ふのも一種の象徴でありますから、第三段になつて正式にあらはれるのは既に前から胚胎して居つたものであります。客観的態度から出る象徴の、尤も面白い例は數字の記號であるものを代表する事であります。例へば、 10 ± 1 とあれば此關係で圓を敘述する事になるさうです。私の知つてゐる數學者は此式さへ見れば圓が眼に浮ぶと云ひました。恐ろしいものです。然し此式の意味を解しても、圓が眼に浮ぶ様になるのは一寸暇がかゝるだらうと思はれます。夫れから $a = A \cos 2\pi m$ は一種の振動をあらはしたり、 $\lambda = 507 \mu$ とあると光波の長さで光の色をあらはすのださうで、洵に不可思議の至の様に思はれますが、いづれも長くかゝつて説明すべきものを、手数を省く爲めに、斯様に詰めたものであります。だから比較的非常に込み入つた、客観的關係が疊み込まれて居るには相違ありません。夫が爲め是等を了解する非我の世界に於る知識は大分廣く深くなるであります。其代り我自身丈に關する經驗即ち主観の部分は全くないと云つても差し支ありません。但し 10 ± 1 は如何な圓でも圓でさへあればあらはして居るのだから、取も直さず圓の概念に當ります。のみならずある人は此式を見ればすぐに一個の圓が眼に浮ぶと云ふのですから、此人に取つては、此公式は perceptual な敘述の代りにもなります。まことに重寶な式であります。然し如何な數學好

きの友人も此式を見て好い心持だとか不愉快だとか申さない所を以て見ますと、主觀的方面の敘述とは殆んど縁がない式の様に思はれます。是から翻つて主觀の方の象徴を述べます。是は歴史的に申すと、私の知らない佛蘭西の詩人や何かを引用しなければなりませんので、少々迷惑致します。然し前以て申し上げた通り、是は文學史上の御話でないのだから、相成るべくは手製の例で御勘辨を願ひたいと思ひます。つまりは、此態度にかなつて居れば、どんな例でも構はん位で御聞き下さい。既にあの人の心は石の様だと云つても、あの人の心は石だと云つても、石を以て心を代表すると云ふ點から見ますと、矢張り主觀方面に屬する一種の象徴に違ありません。けれども、それが一步進んで、心と石を並べないで、石と云つてすぐ心を思ひ起させる敘述に至つたときに、私は之を始めて第三段の主觀的象徴と申したいと思ひます。勿論形式は此敘述に叶つて居ましても一向主觀の分子を含んで居らんのがありますが夫は御注意を致して置きます。例へば茶柱が來客を代表したり、噓が人の噂を代表したりする様なものであります。是は偶然の約束から成立した象徴でありますから、茲に云ふ種類には屬しない譯であります。尤も器械的の象徴も馬鹿にならんもので、習慣の結果茶柱を見て來客の時の様な心持になつたり、噓をして、人の噂を耳にする様な氣分が起る人がないとも限りません。さう云ふ人にはこんな象徴も矢張り主觀的價值のあるものであります。だから本人の氣の持ち様一つでは、仁參が御三どんの象徴になつて

飄箏が文學士の象徴になつても、悉く信心からの齟齬の頭と同じ様な利目があります。猶進むと、鳥鳴きが凶事の記號になつたり、波の音が永劫をあらはす響と聞えたり、星の輝きが人間の運命を默示する光りに見えたりします。かうなると漸々主觀的價值が増してくるのみならず、解剖の結果全く得手勝手な象徴でないと云ふ事も證明が出来ます。此位ならばまだ、大した事はありません。第二段第一段とつながつて居る位のものであります。層々展開して極端に至ると妙な現象に到着します。一寸其説明を致します。我々は我々の氣分（主觀の内容）を非我の世界から得ます。然し非我の世界は器械的法則の平衡を待つて始めて落ち付くものであります。もし此平衡を失へばすぐに崩れて仕舞ひます。従つて自分がかう云ふ氣分になりたいと思つた時に、其氣分を起してくれる非我の世界の形相が具つて居らん事があります。つまり非我の世界を支配する器械的法則が我の氣分に應じて働いては呉れません。そこで此法則の運行と、自分の氣分と合體した時、即ち自分がかくなりたいたいと兼々希望してゐたかの如き氣分を生ずるときの非我の形相を、常住の公式に翻譯しやうとするのが我々の欲望であります。例へば時鳥平安城を筋違にと云ふ俳句があります。平安城は器械的法則の平衡を保つて存在して居るのだから、さう無暗に崩れてはしまひません。それすら明治の今日には見る事が出来ません。況んや時鳥は早い鳥であります。又其鳥が筋違に通る所も、始終はありません。おやと云ふうちに時鳥も筋違も消えて仕舞ひます。

あらはせないのです。で已を得ず一丈にして已めて置く敘述であります。無論氣分を氣分としてあらはすなら、大に悲しいとか、少々嬉しいとか云ふ丈で、始めから表はせる表はせないの議論をする必要がないのですが、此深い様な、廣い様な、複雑な様な氣分の對象を、客觀的なる非我の世界に見出さうとすると十の氣分を一の形相で代表させて、残る九は此象徴を通じて思ひ起す様にしなければなりません。然しながら元來之は本人すら無理な事をしてゐるのでから、他人には餘程通用し悪くなる譯であります。一を聞いて十を知ると云ふ事がありますが、一を見て十を感じる人でなければ出来ない事です。しかも一を見て十を感じる、其感じかたが、云ひあらはした本人と一致してゐるかどうかに至ると甚だ六づかしい問題であります。要するに象徴として使ふものは非我の世界中のものかも知れませんが、其暗示する所は自己の氣分であります。要するにおれの氣分であつて、非常に嚴密に言ふと他人の氣分ではない、外物の氣分では無論ない。と云ふ傾向のある所から、此種の象徴を主觀的態度の第三段に置いて、數學の公式杯の對と見立てました。(シモンズの佛蘭西の象徴派を論じた文のなかに、こんな句があります。「我々が林中の木を一本々に敘述するの煩を避けて、自然を怖れて逃がれんとするが如くもてなすと、益自然に近くなります。又普通の俗人は日常の雜事を捉へて實在に觸れてゐると考へて居りますが、是等の煩瑣な事件を掃蕩して仕舞ふと、益人間に近くなるものであります。世界に先つて生

消えて仕舞ふ以上は其時の氣分になりたくつても一寸なれないから、平安城を筋違にといふ瞬間の働きをさも永久の状態の如く、保存に便にする様に纏めて置きます。楮斯様に纏つた氣分が(客觀的に云ふと形相)段々頭のなかへ溜つて參ると假定します。さうして夫が入り亂れるとします。廣くなり深くなると見ます。すると一種奇妙な氣分になります。此氣分を構成する一部一部は、非我の世界に之に相應する形相を發見しもしくは想像する事が出来ませんが、此全體の氣分に應じたものを客觀的に拈出しやうとすると到底駄目であります。花でも足りない。女でも面白くない。あゝでもない、かうでもない、ともかく様になります。之を形容して、よく西洋人杯の云ふ口調を借りて申しますと、無限の憧憬 (infinite longing) とかになるのでせう。私は昔し大學に居つた頃此字を見て何の事だか分かりませんでした。それでも難有がつて振り廻してゐました。今でも實は分かりません。私は解釋丈は出来ませんが、本當の所 infinite longing と云ふものを持つてゐないのだから、是非も御座いません。然し私の様に説明すればともかくも形容の詞ことばなのでから、それで差支御座いますまい。とにかく、そんな形容を使はなければならぬ氣分が起りまして、煩悶致します。煩悶してどうか發表したいとするが發表出来ない。出来ないで仕舞へば夫迄であります。せめて不完全ながら十の一でもあらはさうとすると、是非とも象徴に訴へなければなりません。十のものを十丈あらはさないで——あらはさないと云つては間違になります。

じ、世界に後れて残るべき人間の本体に近づくものであります」此人は又カーライルの語を用いて居ます。「真正の象徴は明らかに又直接に、無限をあらはして居る。無限は象徴によつて有限と合體する。眼に見える様になる。恰も達せらるゝかの如くに見える」此二人の言葉は多少 infinite longing と同じく、聊か形容の言葉の様にも思はれますが、御参考の爲に、こゝに引いて置きます)

是で主観客観の三對併せて、六通りの敘述の説明を済ませました。そこで是丈説明すればあらゆる文學書中に出て来る凡てのものを説明し盡したとは決して申す積ではありません。然しながら是丈説明すれば、吾人の經驗の取扱ひ方の一般は分るだらうと思ひます。客観主観の兩態度の意味と、其態度によつて、敘述の様子が段々に左右へ離れて行く模様が分るだらうと思ひます。それが普通の人の分れ具合で又作家の分れ具合であります。だから詰る所は作家の態度も常人の態度も同じ事に歸着して仕舞ひます。何だ詰らない、夫がどうしたんだと仰しやる方が、あるかも知れません。成程詰らない。私も詰らないと思ひます。然し此所迄解剖して見て始めて詰らない事が分つたので、夫迄は私も諸君と同じ様に一向不得要領であつたのです。然し詰らないながらも斯う云ふ事は云ひ得る様になりました。此六通りの敘述は極端から極端迄すうとつながつて居ます。どこで、どれが終つて、どこで、どれが始まつたと云ふ事が出来ない様に續いて

ゐます。それを外の言葉で翻譯すると、客観主観いづれの態度にしても、このうちの一通りに限らねばならないと云ふ理由もなし、又限つたが便利だと云ふ事もなし、其時其場合で變化しても差支ないのみならず、變化するのが順當で、變化しなければ窮窟であると云ふ事は儲かの様には思はれます。尤も客観の極端に至ると科學者丈に通用する敘述になり、主観の極端になると、少數の詩人のみに限られる敘述になりますから、例外になります。然し常人は此兩極の間を自由勝手にうろ／＼して居るものであります。さうして作家も亦常人と同じ様に其邊のいゝ加減な所を上下して居るものであります。

そこで、かの西洋の文學史に起つた何派もしくは何主義と云ふものは、其傾向から推して、此等の客観的態度の三敘述、もしくは主観的態度の三敘述の左右へ排列されるものだらうかと思ひます。先づ寫實派、自然派、の様なもの前者に屬し、浪漫派、理想派杯と云ふものは後者に屬するのではなからうかと思ひます。私は是等の諸派を歴史的に研究して、こんなものだと斷定するのはありません。私が作家の態度を極端迄左右に展開させて其傾向を確めてゐると、西洋にはかう云ふ派がある、あゝ云ふ派があると云ふ話だから、それならばと其性質を大略聞いて見て、夫ならば、私の解剖した兩派の方へ其派の名前を結び付けて排列して見様、見ればかう左右に割つて置かれはしないかと云ふ迄であります。従つて私は此解剖によつて、歴史的に起つた自

然派や浪漫派の定義を下す意は毛頭ありません。即ち此左右の兩翼が自然派若くは浪漫派とアイデンチカルのもので云ふ考は丸でないであります。私は心理状態の解剖から出立する。だから出来る丈單純に又出来る丈根本的に片付け得る様に解剖して來たのであります。然るにかの自然派もしくは浪漫派と名くるものは其中に含まれたる多くの書物の特性をあらはして居つて、大分複雑であるのみならず、其内容を形づくつて居る文章が既に純粹に、何々派をあらはして居らんから、到底私の展開させた兩翼と全然一致し様がないのであります。けれども大體の傾向を云へば、かう分布排列しても無理はないと思ひます。

所で普通の人間は今申す通り、此兩極端の間をうろついて居ります。そのみならず、此六通りのうちの一敘述を擇んだ所で、擇んだのは常人で、之を聞くもの又は讀むものは其隣りの敘述と受取るかも知れません。例へば月が眉の様だと云ふ敘述を本人は *Perceptual* と思つて述べて居ても、聞く人は *emotive* と受取るかも知れません。第三者が之を見て、どつちが間違つてゐるとも評されません。雙方共正しいとしなければなりません。そこでかう云ふ事は云はれないでせうか。自然派と浪漫派とは本來の傾向から云ふと矢張り左右に展開してゐる様ですが或る所になると、どつちでも解釋が出来るもので、要は讀者の態度如何によつて決せられるものと云ふ事は。一句や二句の例ではありません、ちと比例を失する様な大きな例になるかも知れませんが、

一寸御判断を願ふ爲に御話を致します。獨乙で浪漫主義の熾に起つた時、御承知の通り、有名なカロリーネと云ふシュレーゲルの細君がりました。此細君が夫の朋友のシェリングと親しい仲になりました、とうとう夫と手を切つて、シェリングと一所になります。しかも其時此女は自分の手紙のうちに、縁は是にて切れ申す。始めより二世かけてとは固より思ひ設けずいと書きました。しかもシュレーゲルと一所になつたのが既に二度目なのですから、シェリングの所へ行くと三度目の細君になるのです。夫で亭主の方はどうかと云ふと、離婚を申し込まれた時は俠氣を起して早速承知したのみならず、離別後も常にシェリングと親密な音信をして居たさうであります。もう一つこんな御話があります。東京近傍の在ですが、ある宿に一軒の荒物屋がありました、荒物屋の向ふに反物屋がありましたさうで、所が其荒物屋の神さんが、どう云ふ仔細か、その家を離別致して、すぐ向ふの反物屋へ嫁に行つたさうです。それで、嫁に行つた明くる日から、店先へ坐つて、もとの亭主と往來を隔て、向きあつて居るんださうです。私に此話をして聞かせたものは淺間しいと云はぬ許りな顔をして、田舎のものは呑氣なものだと云つて笑つてゐました。此二つの話を取つて調べて見ますと餘程似て居ります。然し前のは浪漫派の中心で起つた事で、後のは——何派だか一寸困りますが、まあ自然派の作にでもありさうに見えます。然し事實はどうしても同じなんだから致し方がない。それちや同じものが、どうして浪漫派になつたり、自然派

ないとも限りません。して見ると自然派と浪漫派もある場合には、客観主観の敘述が合し得る如くに合し得るものと見ても差支ない、かと思ひます。(尤も是は一句や二句の敘述ではありませんから、「眉の様な月」の様に、きつぱりとは参りません。只兩態度の傾向を推して極端迄持つて行つた御話ですから其邊は御斟酌を願ひます)

是は一つの態度が兩様に認められ得ると云ふ例であります、もう一つ前節の最初に申した我の態度は常に兩極の間をぶらつて、居るもので、決して片つ方づけられるものでないと云ふ事を御話をして夫から、議論の歩を進めたいと思ひます。是も分りやすい爲めに成るべく單簡に通俗な例で説明致します。普通用談の際は無論雑談の際でも、我々は減多に主観的な敘述を用ひては居ないと思つてゐます。詩的な、浪漫的な句は筆を執つて紙にでも味懐の辭を書き下す時には居る様に考へてゐます。所が實際は大違で、談笑の際始終此種の敘述をやつて居ります。腹の虫が承知しない杯と云ふのも其一つであります。腹のなかに虫は居りません。よし居つた所で、承知しない虫は居りません。承知しない虫が居たつて誰が相談なんかするものですか。或は腹が立つと申します。腹が立つと云つたつて、元來坐りもしない腹が立ち様がないぢやありませんか。或は眼が廻るとも云ふ様ですが、今日迄未だ眼玉の廻轉してゐる人に逢つた事がありません。それにも拘はらず三句とも皆通用してゐます。是は皆主観的態度で話し主観的態度で聞いて居るの

になつたりするんでせう。まあ説明するとこんな譯ぢやありませんか。浪漫派の人は主観的傾向に重きを置くもので、愛は其傾向の尤も顯著なるもので従つて尤も神聖なものであります。愛と云ふ分子があればこそ結婚とか夫婦同棲とか云ふ形式の内容に意味がある譯だから、此内容がなくなる以上は、どんな形式だつて構やしません。三下り半を請求する方も其覺悟、遣る方も其了見だから雙方共酒然として形式の爲めに煩はされないのであります。所が反物屋の方になると愛に重きを置いた出來事かも知れないが、始めから愛のない結婚で出ても引いても同じ事なのかも知れない。それはどう解釋するにしても、我々はさう云ふ動機を見るのぢやない、普通の約束的の徳義を破壊した行爲だと云ふ點を認めるのであります。徳義を棄てた露骨の人性かもしくは野性が其儘出た所作だと見るのであります。カロリーネの方は離縁したり結婚したりするのを善い事、美しい姿と思つてやるのです。反物屋の神さんはそんな事を考へちや——まあ居ないでせう。だから見るものゝ方でも、そんな人間もあるかね、はあさうかねと一つの事實として認めるのであります。だから此二つの話を敘述する時には、只敘する時の態度が違ふのであります。所が先つき申した通り「眉の様な月」と云ふ敘述が、どつちの態度にもなる譯ですから、此結婚問題の敘述も亦どつちの態度にも受け取られるかも知れない。いくら反物屋の神さんを書いて主観的の敘述だと人が讀むかも知れず、カロリーネの嫁入事件を寫しても客観的の敘述だと解され

し降参する必要もないだらうと思ひます。と云ふのは私の考では一句でも敘述、二句でも敘述、三句續いても敘述の氣なので、しかも其敘述には前に説明した様な種類以外の敘述即ち回想とか批判とか云ふもの迄も含められる丈含める積なのですから、應用は是で思つたよりも存外廣いのであります。

こゝで一步進めます。客觀的態度の三敘述を通じて考へて見ますと、何れも非我の世界に於ける(冒頭に説明した如く我も非我と見做す事が出來ますが)ある關係を明かにする用を務めて居ります。知識を興ふるのが主になつて居ります。だから一言にして云ふと眞を發揮するのが本職であります。本職と云ふ意味は、同時に主觀的内職も出來ると云ふ積りで用ひた言葉であります。もし此内職がある程度迄併行して居なければ、此種の敘述の價値は大分減じます。大學の教授が私立大學をやめると収入が餘程違ふ様なものであります。現に眞専門の¹⁾氏の如きに至つては、殆んど文學を休めて、理學の方で月給を貰はなければ立行かん姿であります。唯眞を本職とする作家の爲めに都合の好い事は眞其物に付着してゐる別途の感情を有して居る事であり、例へば(前の例で説明して見ますと)柿は赤茄子の如しと云ふと無論 smile を内職の内職位にして居りますが、本職は固より柿の性質を明かにする爲めです。柿を葡萄や梨と區別する爲めであり、今柿を赤茄子で説明すると、其説明がうまく出來たか出來ないか、よく

であります。此態度で話せばこそ、聞けばこそ通用するのであります。大袈裟に云ふと御互が浪漫派だから合點が出来るのであります。簡單を尊んで、短かい句丈で説明しましたが、もつと長くなつても精神に變りはありません。此態度で行く方が大分便利な事があります。其代り徹頭徹尾浪漫派では矢張り辟易します。「君富士山へ登つたさうぢやないか」「うん登つた」「どんなだい」「どんなの、こんなつて大變さ」「どうして」「先づ足は棒になる、腹は豆腐になる」「へえー」「それから耳の底でダイナマイトが爆發して、眼の奥で大火事が始まつたかと思ふと頭蓋骨の中で大地震が揺り出した」こんな人に逢つたら堪りません。少々氣が觸れてるんぢやないかしらと聊か警戒を加へたくなります。して見ると、我々の文句長く云へば敘述は矢つ張り前に説明した六通りの中間を左へ出たり右へ出たりして好い加減に都合の好い所で用を足して居るに違ない。創作家も矢つ張り其通りであります。論より證據自然派でも浪漫派でも構はないから、一冊の本を取つて来て、一句毎に五六頁順々に調べて見ると分ります。浪漫的な句は澤山出て來ます。浪漫的な句が嫌な人だつて、腹を立てちや不可ない、眼が廻つては怪しからん、是非腹の虫を殺して仕舞へと迄主張する人はないでせう。浪漫派の書物も其通り、決して、のべつ浪漫づくめでは濟まないのです。諸君は、或は、そりや唯句の話じやないか、一篇一章もその議論で行けるかいと御尋ねになるかも知れません。左様一篇一章一卷となると私も少し困却致します。然

柿をあらはし得たか得ないか、うまい比較物を以て来たか来ないか、柿と赤茄子が實によく似てゐる似ないで、はあ成程と思ふ程度が大分違ひます。此はあ成程が何時でも色々な程度で食つ付いて廻るのであります。smileの方でも此はあ成程は無論必要でありますが、それは内職で、本業を云ふと、石の冷たさ堅さを自得して、其自得した氣分で人の心を感じるのでありますから、石と人の心を比較して何處迄妥當なりや否やは寧ろ第二義の問題かも知れないのであります。柿と赤茄子の例は尤も簡單なものであります。もう少し複雑になると、このはあ成程丈で一篇の小説が出来ます。(因果律を發揮した場合)。之に反して馬琴の様な小説は主觀的分子はいくらでもありますが、この方面の融通が利かないから、つまりは靜御前は虎の如し坏と云ふsmileを使つてゐる様なもので、遂に讀む事が出来なくなるのであります。君の云ふはあ成程は成程分つたが、夫りや矢張り主觀ぢやないかと云はれるかも知れない。さうだと申すより外に致し方がないが、是は客觀的關係を明めるにつけて出るので、似る、移る、因が果になる等の事實を認めて感心した時の話であつて、既に明らかれたる客觀的關係を味ふのとは方向が違ふのであります。三勝半七酒屋の段といふものを知らないから、始めて聞いて見れば、ああと感心するのと、もう一遍酒屋を聞いて来ようかと出掛けて、は、ああと感心するのは、同じ感心でも、性質が違ひます。此客觀的に非我的關係を明めるにつけて生ずる付屬物をintellectual sentimentと云ひます。付屬物とは下等なものと云ふ意味ではありません。否寧ろ此方が文學の領域内では必要なものであります。然し客觀的態度を主として、眞の發揮に追陪して起るものでありますし、且は創作家の態度を主觀(主感)、客觀(主知)と分けた以上は、今又此intellectual sentimentを主觀の部に編入すると徒らに混雜を引き起しますから矢張り附屬物として置きます。夫でも少し混雜して御分りにくいかも知れません。私の説明の下手な所は御説を致します。(場合に依つてはintellectual sentimentと云ふのが餘り仰山であります。之で凡てを兼ねさせます)

客觀即ち主知の方は以上の通りであるが、主觀即ち主感の方はと申すと、眞を發揮するに對して、美、善、壯に對する情操を維持するか涵養するか助長するのが目的であります。此三者の解釋は詳しく述べる事が出来ません。美と云ふ事を大きく解すると、善も壯も掩つても構ひません。のみならず眞をさへ包んでもいゝでせう。夫は人の勝手であります。受持の範圍を極めて名をつける丈の事でありませう。私はごく單純に耳目を喜ばす美しいもの、美しい音位で御免蒙ります。尤も美醜を通じて同範圍のものを入れます。善も其通り善惡を通じ含ませるのみならず、直接に道德に關係のない希望とか、愛とか云ふものも入れる積です。壯は意志の發現(發現でなくつても發現のポテンシャルチーを認めた時も無論入れます)に對する情操を入れます。上は壯烈もしくは壯大より下は卑劣もしくは纖弱に至る迄入れます。すると是は前の善の範圍に或所迄入り込

柿をあらはし得たか得ないか、うまい比較物を以て来たか来ないか、柿と赤茄子が實によく似てゐる似ないで、はあ成程と思ふ程度が大分違ひます。此はあ成程が何時でも色々な程度で食つ付いて廻るのであります。smileの方でも此はあ成程は無論必要でありますが、それは内職で、本業を云ふと、石の冷たさ堅さを自得して、其自得した氣分で人の心を感じるのでありますから、石と人の心を比較して何處迄妥當なりや否やは寧ろ第二義の問題かも知れないのであります。柿と赤茄子の例は尤も簡單なものであります。もう少し複雑になると、このはあ成程丈で一篇の小説が出来ます。(因果律を發揮した場合)。之に反して馬琴の様な小説は主觀的分子はいくらでもありますが、この方面の融通が利かないから、つまりは靜御前は虎の如し坏と云ふsmileを使つてゐる様なもので、遂に讀む事が出来なくなるのであります。君の云ふはあ成程は成程分つたが、夫りや矢張り主觀ぢやないかと云はれるかも知れない。さうだと申すより外に致し方がないが、是は客觀的關係を明めるにつけて出るので、似る、移る、因が果になる等の事實を認めて感心した時の話であつて、既に明らかれたる客觀的關係を味ふのとは方向が違ふのであります。三勝半七酒屋の段といふものを知らないから、始めて聞いて見れば、ああと感心するのと、もう一遍酒屋を聞いて来ようかと出掛けて、は、ああと感心するのは、同じ感心でも、性質が違ひます。此客觀的に非我的關係を明めるにつけて生ずる付屬物をintellectual sentimentと云ひます。付

みます。凡ての感情が多くの場合に於て意志を促がすもの、又は意志に變化する傾向のあるものとの學說に従へば、此二範疇はある點に於て一所に出合ふものでせうが、壯とは行爲所作に對するこちらの受け方を本位として立てたので、善とは善惡其他の諸情其物に對するこちらの受け方を本位として立てた、範疇の積であります。御相談では片つ方へ編入してもよろしう御座います。夫れから人間の所爲を離れて所謂物質界に意志の發現もしくは其ポテンシャルを認められた場合には、此意志は變じて物理上の energy の様なものになります。少なくとも人間の意志とは趣を異にして参ります。斯様に壯の發現もしくは潜伏が物質界に移るとすると、美の範疇と接近して参ります。それ故時宜によつては、是も美のなかへ押し込んで構ひません。まづ不完全ながら善、美、壯、の解釋はかうと致して、此三者に對する私の受け方を敘述するのが此方面の文學の目的であります。所が私の受け方は千差萬別に錯雜して参りますが、總括すると快不快の二字に歸着致します、好惡の二字に落ちて参ります。即ち善に逢つて善を好み、惡を見て惡を惡み、美に接して美を愛し、醜に近づいて醜を忌み、壯を仰ひて壯を慕ひ、弱を目して弱を賤しむの類であります。固より善、美、壯の考は人により時により、相違はあります、又、三が冒し合はないとも限りますまい。現に前に述べたカロリーネの話でも愛に従ふのを善とすれば、あの話を讀んで充分満足の氣分になれませうし、又夫に従ふのを善とすれば、どうも不快な話になります。然

しどう浮世が引つ繰り返つても、三者に對する情操のない世はない筈で、如何に無頓着な人間でも此點に於て全然好惡を持つて居ない人はありません。もしあれば社會が維持出來ない許りであります。一步進んで云へば社會は改良出來ない譯であります。器械的の改良即ち法律が細かくなるとか巡查の數を殖す事は出來ますが、肝心の人間の行爲を支配する根本の大部分を閑却して世の中が運轉する譯がありません。是が爲めに、此等の情操を維持し、助長する事を目的にする文學が成立するのであります。

私は客觀主觀兩方面の文學の目的とする所を一言述べました。こゝに目的と云ふのは敘述家自ら、敘述以前にかゝる目的を有して居らなければならんと云ふ意味ではありません。其結果丈がかう云ふ目的に叶つて居る丈でも一向差支ないのであります。我々が結婚する様なもので、何も必ず子を産む了見で嫁を貰ふとは限りません。然し事實は多くの場合に於て、恰も子を産む事を目的にして結婚をした様に見えます。去ればと云つて子孫を作る目的で嫁を貰つてならんと云ふ理由ありませんから、結果が同じならどうでも構はないでせう。私は此目的を眼中に置かないで、おのづから此目的に叶ふ様な述作をやる人を *put for art* 派の藝術家と云ひたいと思ひます。俗に *art for art* 派と云ふと何だか、ことさらに道德を無視する作家のみを指す様ですが、たとひ道德的情操を鼓吹したつて、始めから、此目的を本位として、述作にとりかゝらずに、出

來上つた結果文がおのづから此目的にかなつて居たら矢張り *hit for hit* の作家かと思ひます。ユーゴーの攻撃の如きは固より歴史的にあつたのでせうが、私の様に解釋したならあれ程議論をする必要もなからうと思ひます。同時に最初から一定の目的を以て出立したつて構はない譯かと存じます。普通此立場を非難する人の説はかうなんだらうと思ひます。作其物が藝術家の目的であるのに、作以前にある目的を立て、置いて、其目的の爲めに、作を道具に使へば無理が出来るから、作の價値に影響を及ぼしてゐる所に弊がある。——果してかうならば至極御尤もであります。然しあらかじめ胸中にある目的を立てると、作そのものを目的にするのは此場合に於て、そんなに判然たる區別はありません。刀は人を殺す道具であります。すると人を殺すと云ふ所作が目的になります。だから二つのものは全く違ひます。然し斬ると云ふ働きを考へたらばどうでせう。方便でせうか目的でせうか。刀を使ふと云ふ方から云へば方便であります。が、殺す方から見れば、目的にもなりません。云ひ換へると、斬ると云ふ働きが一步進む毎に、殺すと云ふ目的が一步づゝ達せられるので、斬り了つた時に目的は終局に歸するのだからして、斬るのと殺すのはさう差違はありません。述作と述作の目的とは斬ると殺す位の差ぢやなからうかと思ひます。述作其物を方便としたつて、方便と共に目的も終了せられる譯ではないでせうか。少なくとも、今述べた様な目的を以てならば最初から其心得で述作に取り掛つても、只述作文を

目懸けて取り掛つても同じ事だと私は思つてゐるのであります。だから *hit for hit* 派でも、さうでなくつても差支ない。要するに述作の目的は以上の様に區別が出来ると云ふのであります。述作の二態度と其目的とする所は今申した通であります。只御注意迄に一言して置きたいのは、こんな事でありませう。かう分けると一寸、一方に屬するものは、他方に屬してはならん。どつちか片付けて旗幟を鮮明にしなければ濟まない様に見えるかも知れませんが、さう見えては却つて迷惑なので、既に誤解を防ぐ爲めカローリーネの例や馬琴の例をひいて、機會のあるたびに二度辯じて置きましたが、改めて御断わりを致して置きたいのは、眞を寫すものは純粹なる眞のみを寫しては居ません。また居られぬのであります。又如何に情緒に訴へる人でも全く眞を離れての敘述は——少なくとも長い敘述は——出來ないのであります。ゾーデルマンのマグダと云ふ脚本をつい近頃になつて讀みましたが、是はマグダと云ふ女が、父の意に忤つて、押し付けられた御婢さんを嫌つて、家を出奔した話であります。楮家を飛び出してから諸所を流浪する間に、ある男と親しい仲になつて、子を生んで、夫から其男に棄てられます。男はマグダの故郷に歸つて、立派な紳士になり澄ましてゐると同時に、マグダは以太利で有名な唄ひ手になる。回り回つて故郷へ興行に來る。父母と和解する。所が流浪中の不品行が曝露して、又騒動が起らうとする。昔し棄てた男が出て來て正當に婚儀を申し込む。こゝで目出度市が榮へれば平凡極まる趣向

であります、いざと云ふ間際になつて、婢にならうと云ふ男が昔の事——互の間に子があると云ふ事——丈は、今の身分にかゝはるから、どうか公けにしすに置いてくれと頼む。マグダは此所迄は納得した様なものゝ、そんな関係を内々にして夫婦になれるものかと大いに怒つて、どう頼んでも聞き入れない。父は御前が承知して呉れないと、家の恥辱になる。いたづら娘を持つたと云はれては、世間へ顔向けが出来ない。妹だつて御前の身内だと云はれては、誰も貰ひ手が無い。だから、どうか承知して男の云ふ事を承知してやれと逼る。マグダはどうあつても聞かない。父は遂に憤死する。是が結末であります。此一段があるので、昔から見馴れた戀愛談の陳腐なものとは趣を異にする様になりますが、結婚問題が破裂する所があればこそはあ成程と云はせる事が出来るのです。はあ成程と云ふのは取も直さず新らしかつたと云ふ意味であります。新らしい因果を見て尤もだ今の世の中にはこんな因果があるだらうと思ふからです。今の人々の腹の中には行爲にこそ、此所迄出さなくつても、約束的な姑息手段に堪へないで、マグダと同じ様な似たものが、あるだらう、あり得る筈だと認める丈の眼を以て讀んで行くからであります。此點に於て此劇は固より眞を發揮したものであります。然し此劇はそれ丈より外に能事のないものであらうかと考へて見ますと、大にあるでせう。第一は此相手の男の我儘な所、過去の非を塗り潰して好い子にならうと云ふ精神が出てゐるから、讀者はその點に於て憎悪とか輕蔑とかの念を起さ

なければならぬ筈でせう。然し世の中は虚偽でも上部さへ形式に合つてゐれば、人が許すものだから、互の終りを全くして幸福を得様とするには、過去の不品行を藏すに若くはないと云ふ男の苦心を察して見ると多少は氣の毒であります。どこ迄も習慣的制裁を墨守して娘の恥を雪ぐ爲めには、とも角も公けに結婚させて仕舞はなければならぬと思ひ亂れる父親にも同情があります。最後に娘が一徹に、たとひ世間からどう云はれても、社會的地位を失つても、そんな俗習に壓しつけられて、偽はりの結婚をして、可愛い子を生涯日蔭ものにするのは決していやだと、飽く迄も約束的習慣に抵抗する所は、たとひ其情操に全然一致しない人迄も、幾分か壯と感ずるでせう。此數者があればこそ劇も面白くなるのであります。これは、みんな主觀の方の情操であります。是で見ますと眞丈の作と思つたものに存外、他の分子が這入つてゐる事が御分りになります。之に反して如何に主觀的の作物でも全然眞を含んで居ないものはありません。もし含んでゐなかつたら到底讀み得ないに極つてゐます。かの infinite longing ですら之を敘述する時には單に吁とか嗟乎では云ひつくせないのです、不足ながら客觀的形相をかりて之を髣髴させ様とするのであります。それに就いてこんな話があります。是は小説ではありません。實事だとして、あるものを書いてありましたが、私は單に自分に都合のいゝ例として御話を致します。以太利の去るヴィオリニストが旅行をして、しばらく、ポートサイドに逗留して居りました時、妙齡の埃

て居ります。然し眞には乏しい。實事物語としてかいてありましたが、どうも其方の價值は乏しい。眞とか眞でないと言ふ事は、澤山の人の經驗が一致して存在してゐると認めるか、又天下に一人でもいゝから其存在を認められたものがあつて、これが眞だと云つた時に、他のものが之を認識しなくてはならぬものであります。又本人は眞だと證明し得るものでなくてはなりません。出来るものならば實驗でも證明し得るものゝ方が儘かには相違ないのであります。所が此幽霊談になると中々容易には證明出来ない。出来る様になるかも知れませんが、今の所では先づ嘘に近い方でありませぬ。然しながら胸中の戀とか、なつかしさとか云ふものは、たとひ人に見せられない迄も、よし人が想像してくれない迄も、又好い加減に甲、乙、丙、丁のだれの胸の中にも存在して居るんだらう位に推察して居るにも拘はらず、自分丈に取つては是程儘かなものはありません。是程切實な經驗はありません。だから矢つ張り眞だらうと云はれると、御尤もと云はなければなりません。只自分に眞なもの即ち人に眞なものになつて、始めて世間に通用する眞が成立するのだから、此切實な經驗を誰が見ても動かすべからざる眞にもり立て様とするには、之を客觀的に安置する必要が起つて参ります。そこで私は此演説の冒頭に自分の過去の經驗も非我の經驗と見做す事が出来ると云つてあらかじめ豫防線を張つて置きました。刻下の感じこそ、我の所有で、又我一人の所有でありますが、回顧した感じは他人のものであると申しました。少なくとも

及の美人に見染められまして親しき仲となつたさうで御座います。所が此男は本國に許嫁の娘があるの、愈結婚の期が通つた頃、ボートサイドを出帆して歸國の途に上りました。所が其夜になると、船足で波が割れて長く尾を曳いてゐる上に忽然とかの美人があらはれました。身體も服装も透き通つて居りますが、顔丈は儘かに其女だと分る位に鮮かであります。只常よりは非常に蒼白いのであります。此女が波の上から船の方へ手を伸して、舷を見上げながら美くしい聲で唄をうたひました。それが奇麗に波の上へ響くので、船の中の人は悉く物凄しい心持になりましたが、やがて夜が明けると共にかの美人はふつと消えました。やれ／＼と安心してゐると其晩又あらはれました。さうして手を伸して、首を上げて、波の上を滑つて、船のあとをつけて、如何にも淋しい聲で、夜もすがら唄をうたひます。それから夜が明けると、又ふつと消えます。さうして夜になると又出ます。そのうち船がとう／＼ネーブルスへ着きましたので、かの音楽家はそこで上陸致して、自分の郷里へ歸ると、手紙が来て居ります。差出し人はと見ると、ボートサイドに居る友人で、かねて自分と彼の女との間を知つてゐるものであります。すぐに開封して見ると、あの女は君が船へ乗つて出帆するや否や、海の中へさぶ／＼這入つて行つて、とう／＼行き方知れずになつたとありました。——話は是で御仕舞ひです。私は此話を讀むと何となく妙な氣分になりました。其氣分が妙になる所に此話の價值はあるのですから、どの畠のものであるかは分つ

蒙ります。それちや主觀の敘述は殆んどなくなる譯だと又仰しやるかも知れませぬが、前から何遍も申す通り無論ある所では主觀も客觀も雙方一致してゐるので、書き手の心持、読み手の心持で判するより外に手の付け様のない場合がいくらでもあります。だから形式の上では遂に要領を得なくなりませう。然し丁度好い機會だから、今の幽霊の話を説明かた／＼此疑點をも明らかにして置きませう。今申す如くたとひ愛の客觀的存在を公認しても、之を敘述する時には、其愛の所有者と結び付けなければなりません。五官に訴へ得る様に取り扱はなければなりません。同時に愛を主觀的の經驗としても矢張り同様の手段に訴へなければ敘述が出来ません。然し夫だから同じ事に歸着すると結論するのは少し誤つて居ります。前の方は非我の事相のうちに愛を認めて、之を描出するので、後の方は我の愛を認めたる上、之を非我の世界に抛げ出すのであります。即ち其本位とする所は、我が味ふ所の愛と云ふ情操で、此無形無臭の情操に相應する様な非我の事相を創設するのであります。非我の事相は自然から與へられたもので、一厘も動かすべからずとして、其一分子たる愛を敘して來ると、我の切實に經驗する愛を與へられたものとして、尤も適當に之を敘述せんが爲めに、非我の事相を任意に建立するのとの差になります。従つて兩者はある點に於て一致するのは勿論でありますが、極端に至ると大に趣を異にするのであります。先程述べた幽霊の戀物語の様なものはその極端の例の一つだと思ひます。こゝに、こんな切な戀が

自分に緣故の尤も近い他人のものとして取り扱ふ事が出來ると申しました。愛と云ふと一字であります。自分の愛と人の愛と云へば、たとひ分量性質が同じでも遂に所有者が違つて參ります。愛の見當が違ひます。方角が違ひます。従つて自己の過去の愛と他人の愛とは等しく非我の經驗と見做し得ます。此點に於て主觀的なる愛そのものを一步離れて眺める事が出來ます。只困る事は、時により場合により増減があつて、變化の度が著るしく眼につくんで、それが爲め客觀的價値が大分下落致します。のみならず悲しい事には、いくら客觀的に見る事が出來ても、客觀的に寫す事が出來ない性質のものであります。ある坊さんに、あなた一寸魂を手の平へ乗せて見せて御呉れんかと云はれて、弱つた人があります。是が私なら、魂と云ふ字を手の平へ書いて坊さんに見せてやらうと思ひます。それと同じ事で客觀的に愛が見られるなら、客觀的に愛を書いて見ると云はれるなら、只愛とかいて見せます。甘とか、辛とか書くのと同じ意味で書いて見せます。白とか黒とか云ふ意味で書いて見せます。然し愛の一字ちやいけないから、もつと長く分る様に書いて見ると云はれるなら、それちや小説でもかうと申します。それが茶かす様で氣に入らなければ、そんな無理を云はないで、誰その愛を書けと明瞭に所有主を示して貰ひたい、いくら僕が愛の客觀的存在を認めても、只の愛はかけない、根こぎにして引つこ抜いた愛丈はかけない、根こぎにして引つこ抜いた鉢植の松を描けと云ふ難題と同じ事だからと云つて御免

た意味が自から御明瞭になりましたらう。即ち如何な主観的な敘述でも、ある程度迄眞を含んで居らんと讀みにくいものである、さう截然と片つ方づけられるものぢやないと云ふ事でもあります。此幽霊の如きは極端の極端の例であるから、積極的に眞を含んで居らんと云へませうが、無暗に眞を打ち壊して居るものでないと云ふ事は、さきの説明で明らかであります。しかも讀んで馬鹿々々しくならんのは全く其お蔭である以上は、眞の分子が如何に敘述の上に大切であるかが分るであります。

客観、主観、兩態度の目的と關係は略説きつくしましたから、これから兩者の特性に就て少し述べたいと思ひます。既に兩者の關係やら目的を述べる際にも自然の勢で、不知不識の間に此問題に觸れてゐるのは勿論でありますから、其邊は御斟酌の上御聞を願ひます。

客観的態度から出た句もしくは節、もしくは章、大きく云へば一篇——さう純粹に行くものでないのは大抵御分りになりましたらうが、まああると假定して——それからの歴史的に發達した自然派寫實派——これも嚴密に議論したら純粹のものが、あるかどうか存じませんが、まああるとして、此二派を此方面に編入して置いて論じます。尤も自然派も寫實派も、眞本位ではないと主張されると、夫迄で、やめにする丈であります。又は眞本位だけれど御前の所謂眞ぢやないと云はれると、矢つ張りやめにしなければなりません。が大抵の所で眞の解釋は折合がつきさ

ある。之をどう云ひあらはしたらば、云ひ終せるかとの試問に應じて出來上つた答案と見なければなりません。世の中へ出て行つて、どんな戀があるか探索して來いと云ふ命令に基いた、報告書と見ては見當が違ひます。従つて客観的價値の少ないものが出來たのであります。眞と認められないものになりました。だから此話を聞くと、マグダの結末程には、はあ成程、かうもあらうとか、かうあるかも知れないねと云ふ氣にはなりません。然しながら其代りに、御尤もだ、かうもありがたいね、斯うあれかしだと云ふ氣には慥かになれます。あれかしと云ふ語は裏面に事實ぢやないと云ふ意味を含んで居りますから、つまりは嘘だと云ふ事に下落して仕舞ひます。此下落が烈しくなると到底讀めなくなりません。馬鹿々々しくなります。例へば今の話しでも、もし船のあとを跟けるものが、幽霊でなくつて、本當の女が、波の上をあるいて來て、ちよいと、あなたとか何とか云つて手招きでもしたら夫こそ奇蹟になります。幽霊ならば、有るとも無いとも證明が出來ない丈で済みますが、生きた人間が波の上を歩いては明かに自然の法則を破つて居ります。いくら、かくあれかしと思つたつて、冗談ぢやない、おのろけも好い加減にした方がよからうと申したくなります。人を馬鹿にするにも程があらあね、丸で小供だと思つてわやがると本を抛げ出すかも知れません。(西遊記、アレピヤン、ナイト、もしくはシエーキング、オブ、シヤグバツトの様なもの、面白味は別問題として論じなければなりません) して見ると私が前段に申し

好悪が生ずるのであります。だから客観的態度で敘述した詩文には偽があるかも知れませんが、又ある筈であります。けれども客観的態度で向ふ世界には、偽は始めから存在して居らん、少なくとも眞丈だとしなければ、最初から眞の價値を認めないのと同様の結果に陥ります。だから苟しくも眞を本位として筆をとる以上は好悪の念を挟む餘地がない事になります。従つて取捨はないと一般に歸着致します。たとへば隣りに醜い女がある。見ても厭になると仰しやる。それはどうでも御隨意でありませうが、いくら醜くつても何でも現に居るものは居るに相違ありません。醜いから戸籍に載せないとなつた日には、區役所の調べは丸で當にならぬ事になります。偽りになります。氣に喰はない生徒だからと云つて點數表から省いたら、學校程信用の出来ない所はなくなるでせう。して見ると、眞を寫す文字程公平なものはない。一視同仁の態度で、忌憚なく容赦なく押して行くべき筈のものであります。ブルンチエルがバルザックを論じたうちにこんな句があります。自然派作家には、蛆よりも象の方が大切だと考へる權利がない。勿論生物學上の發達から云つたら、象の方が重要な位地を占めてゐるかも知れないが、何も是は自然派作家が自分の意志で隨意に重要にした譯ではない。——面白い句であります。(ブルンチエルのバルザック論は勿論一人の著者に就ての議論でありますから系統的に理論は述べてありませんが、かう云ふ點に關して甚だ有益の参考書でありますから御一讀を願ひます。この取捨のない意味なども、

うに思ひますし、且歴史を眼中に置かないで立てた私の議論と、全く歴史的に起つた流派とを、結び付けられれば、結び付けて考へますと、大分諸君にも私にも興味があるからかう致したので、よしや自然派や寫實派が此部門から脱走致しても、私の議論は矢つ張り議論になるだらうとは思はれます。そこで此部門の主要な目的は前に申す如く眞を發揮するに存する事は別に繰り返す必要も御座いますまい。既に眞が目的である以上は好悪の念を取りのけなければなりません。取捨と云ふ事を廢さなくつてはなりません。と云ふと諸君はかう仰しやるかも知れない。眞が目的なら眞を好むのだらう、よし好まない迄も、偽を惡む譯だらう。眞を取り偽を棄てるのは自然の數ぢやないか。成程さうであります。然し文字の上でこそ眞偽はありますが、非我の世界、即ち自然の事相には眞偽はありません。昨日は雨が降つた、今日は天氣になつた。雨が眞で、天氣が偽だとなると少し、天氣が迷惑する様に思はれます。これを逆にして、それぢや雨の方が偽だと云つても、雨の方が苦情を云ふだらうと思ひます。だから大千世界の事實は、既に其事實たるの點に於て悉く眞なのであります。此事實は眞だから好きだ、此事實は偽だから嫌だと、どうしても取捨は出来ない譯であります。眞偽取捨の生ずる場合は、此客観の事相を寫し取つた作物其ものに就てこそ云はれべきものであります。詳しく云へば、傍觀者が此作物を自然其物と比較するとき、もしくは甲の作と乙の作とを自然を標準として對照する時に始めて眞偽が出來、取捨が出來、

實はバルザック論の所々にあるのを私が、纏めて布衍して行く位なものであります。此人は同書に又、我、浪漫派、抒情主義杯と云ふ字を使つて説明をして居ります。然し二者を截然區別の如く論じて居るのが缺點かと思はれます。既に公平無視の立場でありますから、問題の撰擇がない。撰擇がないと云ふのは、意識界に落つるものが悉く焦點になつて仕舞ふと云ふ譯ではありません。意識界のどの部分も比較的自由に焦點になり得ると云ふ意味であります。毛嫌をしないと云ふ事でもあります。あるもの丈に注意が向いて、其他には頑強の抵抗があつて、氣が向けられないと云ふ様な状態に居らない事を指すのであります。だからもう一つ言葉を換えて云ふと敘述すべき事相に自己の評価を與へて優劣の差別をつけないと云ふ事にもなります。例へば美しい女と差し向ひになる。——難有い。——女が戀の物語をする。——嬉しい。——所で急に女が欠伸をする。——と急に厭になる。厭になつたからと云つて、そこ丈抜きにしてしまつたら、抜かした丈が事實に叶はなくなる。然し事實を書くからには、眞を寫すと云ふからには、徒らに好惡の念丈で欠伸を棄てべきものではない筈でありませう。眞に妨げなきものとして略すところを云ふべきでありませう。又別の例を擧げて見ますと、こゝに一人の醫者があります。ある患者の病症を確める爲めに検尿をやる、或は検便をやる。わきから見ると随分きたない話であります。然し本人は別に留意する氣色もなく、熱心に検査をする。尿なり便なりの成分を確める迄は是非や

ります。もし、きたないから好加減にして已めると云ふ醫者があつたら夫こそ大變であります。醫者の職分を忘れたものであります。醫者ばかりではありません、學者でもさうであります。動物學者が御苦勞にも泥溝どぼの中から一滴の水を取つて来て、しきりに顯微鏡で眺めてゐます。澤山虫が見えるでせう。然しみんな裸體に違ない、のみならず時々は如何はしい状態をするかもしれない。覗き込んでゐる動物學者が此有様を見て、いやは大變だ風紀に害があるから、もう研究を已めやう。と云ふ馬鹿もないでせうが、あつたらどうでせう。非常に道徳心の高い動物學者には相違ないでせうが、然し眞理の研究者としては殆んど三文の價値もないと申さなければなりません。文學者も其通りかと存じます。眞を目的とする以上は、眞を回避するのは卑怯であります。露骨に書かなければなりません。大膽に忌憚なく筆を着けなくつては、眞に對して面目のない事になります。(此點に於て善、美、壯に對する情操と時々衝突を起す事は文藝の哲學的基礎に於て述べましたし。前段に於ても一方が強くなると、一方が弱くなる事實を例證しましたから御記憶を願ひます) けれども眞に向つて進む人が必ずしも好惡のない人とは申されません。眞に向つて進む間丈好惡の念を脱却するのであります。尿を検査する醫師がいつでも尿に無頓着とは受け取れません。無頓着ならば食卓の上で便器があつても平然として食事が出来る筈であります。虫の交尾する所を研究する動物學者だつて、虫以外の萬事迄に其態度を應用する勇氣はないでせ

う。たゞ眞を研究する時丈他を忘れ得る程に眞に熱中するのであると解釋しなければなりません。眞を寫す文學者も此醫者や動物學者と同じ態度で、平生は依然として善惡に拘泥し、美醜に頓着し、壯劣に留意する人間である事は争ふべからざるの事實であります。柳は綠、花は紅、其外に何の奇があると云ひます。然し實際はかう素氣ない世の中ではありません。柳に舟を繋ぎたくなつたり、花の下で扇を翳したくなるのが人情であります。

そこでかう云ふ事が起ります。眞を描く文學は、眞を究めさへすればよろしいとなる。其結果他の情操と衝突しても、まあ好いとす。——讀者の方では好いとしないかも知れませんが——然しながら眞は取捨なき事相であります。公平の敘述であります。好惡の念を離れたる描寫であります。従つて褒貶の私意を寓しては自家撞着の窮地に陥ります。ことに作以外の實際に於て、約束的にせよ善に興し惡を忌み、美を愛し、醜を嫌ふものが、單に作物の上に於てのみ矛を逆まにして惡を鼓吹し、醜を獎勵する態度を示すのは、たゞに標準を誤まるのみならず、誤まつた標準を逆に使用して居る點に於て二重の自殺と云はれても仕方がありません。書籍を買ふ條件で國から爲替を取り寄せて、之を別途に支辨するからが、既に間違つてゐるのに、使ひ道もあらうに身を持ち崩す爲めに使ひ果したとあつては、申し譯が立つ立たないの段ではありません、頭がよくない人だと云はれても仕方があるまいと思ひます。幸ひ今日の日本には、かう云ふ作家は見當りませんが、自然派の趨勢一つでは、向後この種の作物がいつ何時あらはれて來ないとも限りませんが、御互に用心をしたら善からうと存じて聊か愚存を付け加へました。

眞を寫す文學の特性は略是で明瞭になりましたから、進んで善、美、壯を敘して之に對する情操を維持しもしくは助長する文學の特性に移ります。然し是は前段と相待つて分明になるべき關係のものでありますから、私の申し上げべき事の影法師は既に諸君の御認めになつた筈であります。即ち客觀的態度の公平なるに對して、此態度の不公平——不公平と云ふと可笑しく聞えますが、好惡に支配せられる事でもあります。意識の幅の一ヶ所丈が焦點にならなくてはならないのが原則で、此焦點は注意できまるのでありますから、もし好惡が注意に關係するとすれば、好惡のはげしいものには注意が餘計集まる譯になります。従つて好惡が焦點を支配致します。借此意識の内容を紙へ寫す際には好は好、惡は惡で判然と明瞭に意識された事でもありますから、勢ひ惡の方即ち嫌な事、厭なもの、は避ける様になるか、もしくは之を敘述するにしても嫌ひな様に寫します。厭だと云ふ意味が分る様にして寫します。最後には自己の好きなもの、面白いものを引き立てる爲めの道具として寫します。従つて敘述が評價的敘述になります。尤も評價はあらはでない含蓄の場合が多いかも知れませんが、ともかくも好惡の兩面を記述して、しかも公平に記述すると云ふ事は、恰も冷熱の二性を寫して、湯と水を同一視しろと云ふ注文と同じ事で、それ

う。たゞ眞を研究する時丈他を忘れ得る程に眞に熱中するのであると解釋しなければなりません。眞を寫す文學者も此醫者や動物學者と同じ態度で、平生は依然として善惡に拘泥し、美醜に頓着し、壯劣に留意する人間である事は争ふべからざるの事實であります。柳は綠、花は紅、其外に何の奇があると云ひます。然し實際はかう素氣ない世の中ではありません。柳に舟を繋ぎたくなつたり、花の下で扇を翳したくなるのが人情であります。

そこでかう云ふ事が起ります。眞を描く文學は、眞を究めさへすればよろしいとなる。其結果他の情操と衝突しても、まあ好いとす。——讀者の方では好いとしないかも知れませんが——然しながら眞は取捨なき事相であります。公平の敘述であります。好惡の念を離れたる描寫であります。従つて褒貶の私意を寓しては自家撞着の窮地に陥ります。ことに作以外の實際に於て、約束的にせよ善に興し惡を忌み、美を愛し、醜を嫌ふものが、單に作物の上に於てのみ矛を逆まにして惡を鼓吹し、醜を獎勵する態度を示すのは、たゞに標準を誤まるのみならず、誤まつた標準を逆に使用して居る點に於て二重の自殺と云はれても仕方がありません。書籍を買ふ條件で國から爲替を取り寄せて、之を別途に支辨するからが、既に間違つてゐるのに、使ひ道もあらうに身を持ち崩す爲めに使ひ果したとあつては、申し譯が立つ立たないの段ではありません、頭がよくない人だと云はれても仕方があるまいと思ひます。幸ひ今日の日本には、かう云ふ作家は見

自身に於て矛盾であります。もし雙方を絞る以上は勢ひ評價せねばならぬ事となります。のみか、たとひ好きな方面文を撰ぶにしても、撰ばれたものが悉く一様の價值として作者の眼に映らない以上は、矢張り表向きでも、内々でもいゝから、評價のあらはれる様になければなりません。此意味で(差等をつける)と云ふ意味)、此種の文學ではプルンチエルの所謂無取捨と云ふ事が不可能になるのであります。撰擇と云ふ事が、あなたがちに甲はとる、乙は捨てる)と云ふ意味だと思ふと誤解が生じやう御座いますから一寸辯じて置きました。かう云ふ性質の文學であるからして、此種の文學には、眞を寫す文學に見出し難い特徴が出て参ります。即ち作物を通じて著者の趣味を洞察する事が出来ると云ふ便宜であります。もし我々の趣味が所謂人格の大部を構成するものと見做し得るならば、作を通して著者自身の面影を窺がう事が出来ると云つても差し支ないであります。それで著者の趣味が深厚博大であればある程、深厚博大の趣味があらはれる譯になりますから、えらい人が此種の文學をかいて、えらい人の人格に感化を受けたいと云ふ人が出て来て、雙方がびたり合へば、深厚博大の趣味が波動的に傳つて行つて、一篇の著書も大いなる影響を與へる事が出来ます。然し個人に重きを置かない社會にあつては、ヒーローを首肯(うけが)はない世に於ては、自他の懸隔差等を見無視する平等觀の盛んな時代に於ては、崇拜畏敬の念を迷信の残り物の如く取り扱ふ國柄に於ては、思ふ程の功果の出て來ないのは勿論であります。従つて著

作家は立派な趣味を育成したり、高尚な嗜好を涵養したり、通俗以上の氣品を修得する事が不必要になつて参ります。つまりは事相に對する評價を、世間が著作家に對して要求しないからであります。御前方は眞相を興へればいゝ、評價の方は此方で引き受けるからと云ふ讀者許りになるからであります。我々の知りたいのは事實である、著者は事實を興へる媒介者として、重きを置く必要はあらうが、著者自身の人格や、趣味や、評價は、反つて迷惑だと云ふ讀者許りになるからであります。迷惑は聞えて居りますが、迷惑と感ずる人が、各々自己に相當の評價的標準を具して、其標準で評價しつゝ作に向ふか向はないかが疑問であります。もし向はないとすると、(全然此態度を滅却する事は不可能であります、もし眞を本位として著作に向ふと、思つたよりも評價的神経は遲鈍になります)其結果は人間が段々不具になります。自己の趣味は——趣味のない人は全然ありませんが——同趣味のものと、接觸する爲めに、涵養を受けるので、又異趣味のものに逢着する爲めに啓發されるので、又高い趣味に引き付けられるが爲めに、向上化するのであります。さうして世の中の運轉は七分以上此趣味の發現に因るのでありますから、此趣味が孤立して立枯れの姿になると、世の中の進行はとまります。とまらない部分は器械の様に進行するのみであります。「誰さんは金が欲しいために、奥さんを離別しました」「さうか、それも一つの事實さね」「あの男は藝者を受け出す爲に泥棒をしたさうです」「はあ、それも一つの事實さ

ね」「誰さんは、ちつとも約束を守らないで困りますよ」「成程それも一つの事實だね——かう事實づくめで、ひどい奴だとも感心な男だとも思はなかつた日には、懐手をして、世の中を眺めてゐる丈で、善にも移らないし、悪をも避けたいし、壯舉をも企て得ないし、下劣をも恥ぢないし、花晨月夕の興も盡きはてやうし、夫婦としても、朋友としても、親子としても、通用しない人間になるでせう。

こゝ迄来て、氣が付いて見ると、客観、主観兩方面の文學には妙な差違が籠つて居ります。純乎として眞のみをあとづけ様とする文學に在つては、人間の自由意思を否定して居ります。たとへばこゝに甲があつて、ある憤りの結果、乙を殺す。罪を恐れて逃げる。後悔して自殺する。と假定すると、憤りが原因で人を殺して、人を殺したのが原因で、罪を恐れる様になつて、それが又原因になつて、後悔して、後悔の結果遂に自殺した事になりますから、かくの如く層々發展して来る因果の纏綿は皆自然の法則によつて出来たものと見なければなりません。殺すのも、恐れるのも、悔ゆるのも、自殺するのも、決して當人が勝手にやつた譯ではない。殺して見ると、厭でも應でも恐れなくつちや居られなくなり、恐れると、どんなに避けやうとしても悔恨の念が生じ、悔恨の念は是非共自殺させなければ已まない様に通つて来る。此階段を踏んで死ななければならぬ様な運命を以て生れた男と見做すより外に致し方がなくなります。さつき用ひた言葉で

分る様に申しますと、此男の所作は評價を離れたものになります。毀譽褒貶の外に立つべき所作であります。柳は綠花は紅流の死に方であります。従つて人殺しをした本人を責める譯にも、自殺をした本人を責める譯にも參らなくなります。若し責めるなら自然を責めなくつてはなりません。褒めるにしても自然を褒めるより致し方がなくなります。人間に義務を負はせる代りに、神か何かに義務を負はせなければなりません。所が情操を本位とする文學になると、好悪があり、評價があるんだから、篇中人物の行爲は自由意志で發現されたものと判じてかゝらなければならぬ。右へも行ける。左へも行ける。のに彼は右を棄て、左へ行つた。だから、えらいとになります。感心だとなります。彼自身の意志の働らきで、やつた行爲であればこそ、其行爲者に全部の責任を負はせる事が出来、出来るから其責任者たる當人が責められる資格もあり、又褒められる資格もあります。もし自分がやつたんぢやない、因果の法則がしかしたのだと、高を括つて居たらば、行爲其ものに善悪其他の屬性を認め得るにしても、行爲を敢てしたる本人には罪も徳もない譯になります。かうなつて来ると人間の考が大分違つて来なければなりません。自分は自然に生み付けられて、自然の命する通りをやるんだから、罪を犯しても、悪を働らいても仕方がない。恨んでくれるな、嫉んで貰ふまいと落ちて来る。だから大きな顔をして、不都合な事を立ち振舞ふ様になるでせう。夫では御互が迷惑する。社會が崩れて来る。文學の目的が直

接に此弊を救ふにあるかどうかは問題外としても情操文學が此間缺を補ふ効果を有し得る事は儘かでありませぬ。しかも此情操の供給を杜絶すれば、吾人に大切な涵養物を奪はれたると一般で日に日に瘦せ果てる許りであります。

兩種の文學の特性は以上の如くであります。以上の如くでありますから、雙方共大切なものがあります。決して一方ばかりあれば他方は文壇から驅逐してもよい杯と云はれる様な根柢の浅いものではありません。又名前こそ兩種でありますから自然派と浪漫派と對立させて、壘を堅ふし濠を深かうして睨み合つて居る様に考へられますが、其實敵對させる事の出来るのは名前丈で、内容は雙方共に往つたり來たり大分入り亂れて居ります。のみならず、あるものは見方讀方ではどつちへでも編入の出来るものも生ずる筈であります。だから詳しい區別を云ふと、純客觀態度と純主觀態度の間に無数の變化を生ずるのみならず、此變化の各のものと他と結び付けて雜種を作れば又無数の第二變化が成立する譯でありますから、誰の作は自然派だとか、誰の作は浪漫派だとか、さう一概に云へたものではないでせう。それよりも誰の作のこゝの所はこんな意味の浪漫的趣味で、こゝの所は、こんな意味の自然派趣味だと、作物を解剖して一々指摘するのみならず、其指摘した場所の趣味迄も、單に浪漫、自然の二字を以て單簡に律し去らないで、どの位の異分子が、どの位の割合で交つたものかを説明する様にしたら今日の弊が救はれるかも知れないと思

ひます。今日の日本の批評は山縣は長州人だ大山は薩州人だと云ふ様な具合に傾いて居はしないかと考へられます。それよりも山縣はこんな人、大山はこんな人と解剖し又綜合する方が二元帥を評する適當の方法かと存じます。それでも長州薩州は地圖の上で動かすべからざる面積を持つて居りますから、まだ混雜が少ない様ですが、歴史の流に沿ふて漂ひ付いた二派は名前は昔の通りですが内容は始終變つて居りますから猶不都合であります。だから、もし作物を本位としないで、主義を本位とするならば主義の意義を確然と定めて、さうして其主義のもとに、其主義に叶ふ局部（作物の）を排列して、此主義の實例とするが適當だらうと思ひます。一つの作物と、一つの主義をアイデンチファイしなければ氣が濟まない様な考は是非共改める事に致したいと思ひます。是から先き文學上の作物の性質は異分子の結合で愈複雑になつて参りますから、幾多の變態を認めなければならぬのは無論の事であります。従つて、二三の主義を終古一定のものとして、萬事を是で律せんとするのみならず、律せんとする尺度の年々に移り行くのを咎めないのは、將來出現の作家には不便宜の極で、且つ批評家の無責任を表白するものではないかと存じます。

客觀、主觀兩面の目的、特性、必要、關係等は略述べ終りました。以上は大體の御話であります。固より普遍的の論で一般に通ずる説とは信じますが、今日の日本に於ていづれが比較的必要かと云ふと、少しは特別の問題になりますから、此點を一應調べた上、演説の局を結ぼうかと思

ひます。情操文學の目的は情操を維持し、啓發し、又向上化するにあるとは私の前に述べた通りであります。借與へられたる情操は與へられたる事相に附着して居ります。たとへば孝と云ふ情操は親子の關係に附着して居ります。所が親子の關係は社會上複雑な原因からして、わが日本では著るしく變つて参りました。此關係が變れば、孝と云ふ情操の評価も次第に變らなければならぬ譯になります。然るに舊來の親子關係に附着した儘の評価を與へて、孝を敘述して居ると、在來の孝心を維持するか、もしくは不孝のものを啓發するか、又は一層孝心を深くする爲めの敘述になります。今日は孝の時代でないから親を粗末にして好いと誰も云ふものはありませんが、昔の様に絶對的评价をつけて敘述するのは、どうでありませう。孝と云ふ字は現に勅語にもあつて大切な情操には相違御座いせんが、昔日の様に親が絶對的權威を弄する事を社會の有様が許さない以上は、多少其邊に注意を拂つた適度の評価をしなければなりません。もし是を在來の儘で絶對評價を以て敘述すると時勢後れになります。折角の目的が達せられなくなります。昔は親の爲めに身を苦海に沈めるのを孝と云つたかも知れない。今日の我々から見ても孝かも知れないが、よし娘が拒絶したつて、事柄が事柄だから不孝とは思ひますまい。夫丈孝の評価が下落したのであります。之を西洋人に云はせると、頭からんで想像し得られないと云ひます。西洋へ行くと孝の評価が又一段下がるのであります。こう云ふ風に評價が變つて行くのはつまるところ、前

に云つた社會狀態の變化に基いた結果に外ならぬのでありますから、此狀態の變化を知りさへすれば、舊來の評価を墨守する必要がなくなります。之を知らねばこそ煩悶が起つたり矛盾が起つたりして苦しむのであります。かう云ふ時に誰か眼の明きらかな人が、此狀態の變化を知らせる、——即ち客觀的に敘述すれば、讀者ははあ、成程と思ふので、大變な解脱になります。(こんな單純な場合では解脱にもなりませんまいが、まあ例ですから其積りで御聞きを願ひます)それで讀む人は難有がる。書く人は成功する。ばかりぢやない、傍から見ても、舊來の評価を無理に維持しやうとする情操文學よりも必要の度が多いでせう。

次に日本では情操文學も揮眞文學も雙方發達して居りませんのは、いくら己惚の強い私も充分に認めねばなりません。昔から今日迄出版された文學書の統計を取つて見たら、無論情操文學に屬するものが過半でありませう。のみならず作物の價值から云つても此系統に屬する方が優つてゐる様であります。それは當然の事で客觀的敘述は觀察力から生ずるもので、觀察力は科學の發達に伴つて、間接に其空氣に傳染した結果と見るべきであります。所が残念な事に、日本人には藝術的精神はありあまる程あつた様ですが、科學的精神は之と反比例して大いに缺乏して居りました。それだから、文學に於ても、非我の事相を無我無心に觀察する能力は全く發達して居らなかつたらしいと思ひます。くどくなりませうから、例も引きませんが、是丈で充分御合點は參る